
魔法少女とイノベイド～対話の前の話

KT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女とイノベイド〜対話の前の話

【Nコード】

N1247M

【作者名】

KT

【あらすじ】

戦いが終わり、ヴェーダの中に意識が消えていくティエリアしかし、それは彼の新たな戦いの幕開けの合図でもあった。これは、来るべき対話が始まる前のお話……

1、眠りと始まり（前書き）

自分、小説書くのは初めてですが、なるべくはやく更新ができるようにします。

1、眠りと始まり

夢のようなもの見ていた気がする。でも、それは本物。僕と、彼らと過ごした時間。

(これで、未来は人類に委ねられた…)

量子型演算システムヴェーダの中で、僕は眠りに就こうとしている。

これから、世界は、人類は、少しずつ、ゆっくりとイノベーターへの進化へと進むだろう。

(みんなとは…もう会えないかな)

正直言うと悲しし、辛い。この感情は本物か？自分ではわからないけど…

(ロックオンは…いや、みんなは本物だと言っだろう)

記憶は映像として意識に入ってくる。

刹那、アレルヤ、ロックオンことライル、スメラギ、ラッセ、フェルト、イアン、リンダ、ミレイナ。

クリステイナ、リヒテンダール、モレノ、そして…ニール。そこにはみんなの笑顔があった。

(僕はヴェーダの一部となり君達を見守るとしよう。来るべき、対

話の時まで…)

次に眼を覚ますとき、それは新たな戦いか、それとも別の何かか？それは分からない。

(なら、今の僕はこう言おう)

その時が来た時、皆への言葉を考えて・・・

(おやすみ、そして、さようなら、みんな)

ゆっくりと自分の意識が途切れていく。もし、ここに体があったのなら、その顔は笑っていただろう。

そして意識は消える。

だが彼は知らない。この後に来る戦いのことも、そして、この物語が始まることも・・・

彼、イノベイド ティエリア・アーデはまだ知らなかった。

1、眠りと始まり（後書き）

文才ないので・・・僕
ごめんなさい。

2、運命との出会い（前書き）

現在はティエ×フェイで行く予定っす
まあ、始まります

2、運命との出会い

(謎の小規模次元震の発生を確認。フェイトちゃん)

(こっちにも情報が入ってる。今現場に向かってるよ、なのは)

フェイトと呼ばれる黄金ように輝く髪をした女性は念話で話してきた女性、なのはに言った。

(じゃあ、私も今向かってるから、なにかあっても無理はしないでね)

(ええ。わかってる)

そしてスピードあげて目標のポイントである山脈を目指す。

「この辺りのはずけど・・・」

そう呟くが辺りにはないもない。くまなく探そうとしていると、

「フェイトちゃん!」

「なのは」

ちょうど親友の登場とともに探そうとしたが、

「フェイトちゃん、はやてちゃんから連絡があつて、この辺りにロストロギアの反応もあるって」

こんな場所にロストロギアの反応が出るなんて思つてもいなかったのだらう。その顔をは驚きが隠せていなかった。

「ともかく、この辺りを・・・ッ!」

次の瞬間、複数のガジェットが攻撃してきた。恐らくロストロギアに反応してここに集まつたのだらう。

「まずは、この状況をどうにかするしかないね」

フェイトはこくりと頷き攻撃を開始した。

テイエリアSide

「ここは...いつたい？」

僕は...

あいまいな記憶は、霧のように少しずつ晴れていく。

「僕はテイエリア・アーデ。ここは.....」

そして自分の「手」を見て驚いた。

「こゝ、これは.....なっ!」

そして、近くにあった川に自分の顔が映っているのにも驚いた。

「これは、いったい……しかし、」

感じる、ヴェーダとのリンクを……しかしなぜ僕の身体が

自分の服装を見ると、それはソレスタルビーイングの服であった。

「なにが起こっているんだ……ここはヴェーダの中なのか？」

答える人は誰もいない……はずだった

「違いますよ。マイスター」

「誰だ!!」

どこからか声がした。しかし、脳量子波ではない……これはいったい。

「マイスター、自分のポケットに手を入れてください」

その言葉に警戒しながら手を入れる。すると何かに触った感覚があった。

ティエリア「これは」

それを出してみると親指ほどの大きさの紫色の宝石、アメジストのようで、白いチェーンが首に掛けられるように付けられていた。

「お久しぶりですかね？マイスター、ティエリア」

「なっ!?!」

驚くのは無理もない、いきなりその宝石が喋り出したのだ。

「君はいつたい、これは通信機なのか?」

「いえ、違いますよ。我が主、ティエリア」

新たな声がした。まさかと思い先ほどとは逆のポケットに手を入れると同じ色の宝石だが、少し小さく、付けられたチェーンは黒色だった。

「こんにちは、我が主、ティエリア」

「これは、君は、君たちは」

君と聞いていいものかとは思うが、それでも情報が欲しかった。

「「我らは、あなたと共に戦った、あなたの力です」」

その意味が最初は分からなかった、しかし、自分の力と言った…

「まさか、君たちは」

「はい、自分はセラヴィー」

「私は、セラフィム」

「「あなたと共に戦った、ガンダムです」」

普通は疑うところだがティエリアは疑わなかった。自分でも分からないが、それが本当なのだと理解した。

「なら、君たちがセラヴィーとセラフィムとしても、ここはどこだ？」

「ここは……」

セラヴィーが説明をしようとしたその時、巨大な爆音が響いた。

「な、なんだ!？」

周りを見るとそこに上空に動く影が複数見えた。いくつかはオートマトンのようだが、形状と大きさが違う。なにより、飛行ができるオートマトンなど聞いたことがない。だが、それよりも一番驚いたことは

「彼女らはいったい……?」

それと戦っている茶髪の白服の女性と金髪の黒服の女性だった。なぜ空を飛んでいるのか、ビームのようなあの攻撃は何か、分からないことだらけではあったが、

「数が多すぎる、あれではいずれ囲まれる!」

しかし、今の自分ではなににもできないと思っていた。すると

「「我らを使ってください 主 マイスター」」

セラヴィーとセラフィムがそう言ってきた。

「どっぴいっことだ？」

「「我らを手握り、セットアップと言ってください」

いきなり言われて混乱しそうになるが、

「わかった……」

自分に今できることがあるのなら、やるべきだ

(そうだろ？ロックオン、いや、ニール)

二つの宝石を握りしめ、叫ぶ。

「セットアップ……！」

そして、僕は光に包まれた

ティエリアSide 了

「くっ、数が多い、バルディッシュ」

「了解」

いくつもの電撃の球体がガジェットに当たり破壊する。

「レイジングハート！」

「了解、アクセルシューター」

こちらにも複数のエネルギーの球体がガジェットを打ち抜く。

「はあ、はあ、本当に多いね」

しかし愚痴をこぼしてる暇はなかった。

「！！フェイトちゃん、後ろ！！」

「しまっ…」

長時間に及ぶ戦闘で疲れが出てきたのだろう、後ろから敵がだてたことに一瞬気付かなかった。

フェイトはすぐさま防御するがそれは無駄になる。ガジェットの真横から極太の光が、すべてのガジェットを消し去ったからだ。

「あ、あれは・・・」

なのはが見つめる先には見るからに巨体のフォームをした前方は白と背中黒のロボットだった。

「ここは僕にませろ」

「えっ！！！！」

いきなり喋り出したので驚いていた。そして敵に向かっていく時に出る緑の粒子を見ていた。

ガジェットは一斉に襲いかかるうとするが、両肩と両膝に付けられたキャノン砲から巨大な魔力弾がガジェットを飲み込む。それを逃れたものは攻撃をするが粒子でできたプロテクションが周りを覆い攻撃は全く効かない。残ったガジェットが攻撃をしながら体当たりをするしかし、背中黒い部分がいきなり動き出す。

「な、なにあれ!？」

「顔!？」

その顔であった。その顔を見せた瞬間、

「防御力が、上がった？」

プロテクションのは力を上げ、体当たりしてきたガジェットを止める。そして手首から出した光る剣を振り、すべて破壊した。

「す、すい…」

なのは思わずそう言ってしまう。フェイトは何も言わないが心底驚いている。そしてその口ボはゆっくりと地上へ降下する。

「時空管理局です。あなたは何者ですか？」

「時空、管理局?」

口ボはそう言った瞬間光に包まれ、それが消えたとき、そこに居たのは紫色の髪と、眼鏡をかけ、その奥の眼はルビーのように輝いた紅い瞳をした少年だった。

「僕はティエリア・アーデ。君たちは…」

「え、えと、高町なのはです」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。それより先程のあれは」

「これのことか？」

白いチェーンと黒いチェーンで結ばれた物を見てなのはとフェイトは驚愕した。

「そ、それ、デバイス!!」

「しかも二つ！」

「デバイス？なんだそれは？それにさきほど言っていた時空管理局は地球連邦の中にはなかったはずだ。」

ティエリアは疑問を問う

「地球連邦？そんな組織、聞いたこともありません」

「なんだと!？」

「それより、今、地球って…」

ティエリアは連邦の存在を知らないことに対して、なのはは、地球という言葉聞いて驚いていた。

「なら、アロウズは、カタロンは、ソレスタルビーイングは！！そして何より…ここは、地球ではないのか？」

あまりの質問の多さに二人は何も言えなくなる。すると

「マイスター、この世界には、あなたの知っている組織は一つもなく、そして、ここは地球ではありません」

答えたのはセラヴィーだった

「なぜ君が知っている、セラヴィー」

「いま、いくつかの情報が自分の中に入ってきました。ここがどこかは分かりませんが、少なくとも、あなたの知っている組織は、この世界にはありませんし、ここは地球でもありません」

まさか、そんなことが…

「なら、改めて君たちに聞こう。ここはいつたどこなんだ？」

「ここは、ミッドチルダといいます」

「ミッドチルダ…なら、もう一つ聞きたい。君たちのその力と、このデバイスというものは何だ」

「それは………」

テイエリアは彼女達が何か別のものに意識が言っていることと一瞬だけ気付いた。

余談かもしれないが、なのはとフェイトはいま、機動六課部隊長の八神はやたと話していた。

その内容はティエリアの保護と事情を聞くことだった

「ティエリアさん、ここでは詳しい話できません。ですから、私達の所に来てくれませんか？」

ティエリアは考えていた、彼女らを信じていいかどうかを

(しかし、彼女らに付いていけば、この世界の情報も分かる。今は何よりも、情報が必要だ)

考えをまとめて彼は了承した

2、運命との出会い（後書き）

文才ほしすぎ・・・

こんな駄文ですいません

3、魔法の存在とティエリアのデバイス（前書き）

今回でティエリアのデバイスについてるGNドライブや能力についての説明がでます。

3、魔法の存在とティエリアのデバイス

ティエリアは驚いていた。この世界の技術と自分が別世界から来た次元漂流者だということ。そして

「ティエリアさん、魔法の存在を信じますか？」

魔法という非科学的な物の存在に

説明中

「つまり、この世界の魔法とは、魔力というのを消費して発動される現象の総称を指し、僕の知っている《幻想》のようなものではなく《超科学》ということか？八神はやて」

科学と聞いてもまだ納得はできてはいない。

「その通りです」

「信じられないと言いたいが、先ほどの戦闘と、そこにいる妖精のような女性を見てしまったら、何も言えないな」

「えっへへ」

とその妖精、リインフォースエエこと、リインは顔を赤くして照れている。妖精と言われたことを小さいという表現ではなく、ほめた表現と思ったのだろう。

「信じてくださってどうもありが・・・」

「その慣れていない喋り方をしなくてもいい」

「ええっ！いつからバレとったん!？」

「最初に話してくれたとき、少し違和感を感じていたのですね」

「あ、あはは、まさか最初からやったとは」

そうやって笑って誤魔化そうとしているが、もう遅いのは分かりきったことだ。

しかしティエリアはこれ以上いじめるのはよくないと思い何も言わないことにした。

「それで、僕はこれからどうすればいいんでしょうか？僕の世界のことは、さきほど一通り話しましたが」

とは言うが話したのは地球連邦、太陽光発電、軌道エレベーターのことのみ。

ソレスタルビーイング、ガンダム、GNドライブ、アロウズ、カタロンに関しては何も言わず、どうにかはぐらかした。

「正直に言います。ティエリアさん、私達に協力してください」

（協力というのはこの機動六課の仕事のことだろう。先ほど言っていたロストロギアと呼ばれるものの回収といったものだが、……………

……おそろく)

「なるほど、僕を保護と協力という名目で、周りに危害が及ばないようにすると言っているのか」

「!?!」

「…分かりました、協力します」

「「へっ?」「」

まさか承諾するとは思ってもいなかったのか二人は驚く。

「えと、あの、なんで」

「君たちのとつた行動は当たり前前の行動だ、僕に拒否権はもともとない。それに…」

「それに?」

ティエリアは一呼吸して言った。

「自分の思ったことを、やると決めたことを、がむしゃらにやっっていくと決めているので」

それは本心である。昔の彼なら断り、この場を力づくで去っていただろうが、今は違う。

目の前の人たちは、監視をすることはあるが、それでも、自分を頼って来ている思いは本物である。

なら、それに応えるのみと思ったのだ。

「ありがとうな。ティエリアさん」

「礼を言われることをした覚えはないが…一応言っておこう。・・・
・・・どういたしまして」

その笑顔を見てはやては一瞬顔が赤くなるがすぐに戻す。それと同じに部屋の扉がノックされる。

「どうぞぞー」

「失礼します。ティエリアさんのデバイスの検査が終了しましたのでお返しします。」

「くろくろくさま」

「ありがとう、シャリオ・フィニーノ」

「気軽にシャーリーで構いません」

「そうか、わかったシャーリー」

そう言って自分のデバイスを受けとる。

デバイスに関しても先ほど聞いた。この世界の魔導師が魔法の使用の補助として用いる機械のことで、

その種類もいくつかあるがティエリアの場合はインテリジェントデ

バイスと呼ばれるものらしい。

「それじゃ、いま丁度なのはちゃんとフェイトちゃんが新人の訓練をしとるから、リインに付いて行ったらええよ」

つまりは実力を見せてくれとのことである。

「わかった。ではこれで」

「こちらです。アーデさん」

そして案内をされ部屋を出るとティエリアは聞く。

「ところで、なぜ君は僕をアーデと呼ぶんだい？」

「え、ただなんとなくですけど、いけませんでしたか？」

「いや、僕のことをアーデと呼ぶ人が一人だけいたから、少し気になっただけさ」

ティエリアは心の中でイアン・ヴァステイの娘、ミレイナ・ヴァステイのことを思い出して言った。

「あ、そうなんですか」

「性格も君に少し似ている」

「へー会ってみたいです」

そんな話をしながら二人は訓練場へと向かった

はやてSide

「それで、テイエリアさんのデバイスについて何か分かったことか
はあった？」

テイエリアさんが部屋を出た後、私はシャーリーに聞いた。

「残念ながら、ほとんど分かりませんでした。しかし、現状で分かったことですが、彼のデバイスは別々のデバイスですが、起動の際には必ずあの二つがそろい、同時に起動しなければならぬことが分かりました」

「同時につて…使い勝手が難しいな」

とは言うてはみたけど、珍しいタイプであることには間違いないな。

「それと、二つのデバイスについてなのですが、セラヴィーは攻撃と防御の機能を持っています。しかし、セラフィムに関してなんですが、魔力調節です。あとはどれだけ調べても分からなかったブラックボックスの機能が3つありました」

「ブラックボックス？なんなんやそれは？」

「はい。2つは何1つ情報が分かりませんでした。最後の1つはシステムの名前だけが分かりました」

「その、名前は？」

「それは……」

はやく Side 了

テイエリア Side

(トリアルシステムだと!?)

はい。主テイエリア

部屋を出て少し歩いたところで僕は気になっていたことを念話を使って誰にも聞かれぬようにしてセラヴィーとセラフィムに聞いていた。それにより分かったことがいくつかある。それはセラフィムのもつブラックボックスについて

1、トランザムシステム。元々この世界の僕のGNドライブはセラヴィーとセラフィムのバリアジャケットを構築した際に僕がイメージしたことによってできたものということ。本物ではないとはいえ、本物とほぼ同じ機能のため、トランザムも使える。だが、通信機器の妨害はできないとのこと。

2、瞬時バリアジャケット転換転送オートデバイスシステム。これはセラヴィーからセラフィムのデバイスに瞬時に転送して装備し、さらに残ったセラヴィーのデバイスもデバイスによる自律行動が可能なシステムだ。ただしこの状態のセラヴィーは魔法が使えない。

そして最後の一つがトリアルシステム。

(それで、その機能は?)

この世界にヴェーダとリンクした機体などあるはずもない。なら、このシステムは僕が知っているものとは違つと判断して聞いた。

「その能力は……………魔力の一時的な完全デリートです」

（?どういうことだ）

「主が対象にした以外の魔力によって機能している物の動きができなくなるといふことです。たとえば、これを魔導師につかえば、デバイスが初期化されるだけでなく、リンカーコアは一時的ですが完全消失します」

（なんと……）

「ティエリアはそれだけで分かつた。このシステムは前の自分が持っていた時と同じ、セラフィムの最後の切り札だ」と。

「しかし、現状はシステムがまだ完全構築されていないため、しばらく時間がかかります」

（なるほど。このことを他の人には?）

「すべて機密事項や、あなたの力の大切な部分のため、隠していました」

「ティエリアは内心ほつとする。いくら別世界とはいえGNドライブのことは話せない。」

「トライアルシステムも知られれば何に悪用されるか分からない。彼

女たちを信じていないわけではない。

だが、こういうものは争いを生むきっかけになることが多い。そのことは歴史も証明している。

(このことは、今は秘密にしておく)

「了解、主　マイスター」

ティエリアSide　了

その10分後訓練場につくと4つの人影が見えたがそこにいた人を見てティエリアは驚きを隠せなかった。

「皆、まだ子供だというのに、戦っているのか」

しかし、その目には皆決意のようなものがある。その覚悟があるなら、自分は何も言わないでおこう思ったのだった。ガンダムマイスター刹那・F・セイエイの時のように………

「それにしても、これがバーチャル映像とは思えないな」

そんなことを呟いていると4人の訓練を見ており、この世界に来て最初に会った女性の1人がティエリアの方に来た。

「ティエリアさん！はやてちゃんのお話は終わっただんですか？」

「ああ。君は確か、高町なのはだったな」

「なのはでいいですよ。みんなそう言いますし」

「そうか。なら僕も、ティエリアと呼び捨てでいい。同い年なんだ」とは言っているが推測でしかない。ティエリアはイノベイドだから歳はとらないが身長などを見てそう言う考えに至った。

「なら、ティエリア、さっきはやてちゃんから連絡があつて聞いたんだけど、私達に協力してくれるって」

「ああ。正式には、民間協力者ということだが」

「そうなんだ…それよりも……………」

「君の知っている地球と、僕の知っている地球は別のものだろう」

「!!やっぱり、そうなんだ」

それもそのはず、同じ地球でも西暦も技術も違う。ティエリアは一瞬過去に来たのかと思っただが、それは違つとすぐに判断した。人が過去、昔に戻るなどできない。過去を変えることなどできないのだから……………

(ロックオン……………)

悲しい表情を見せないようにして過去の恩人のことを思い出していた。そして、思考をやめ、目の前の女性に言う。

「だが、そんなものは些細なことだ。あまり気にしていてもしょう

がない」

「そう、だよな。なら、改めてよろしくねティエリア」

「こちらこそ、よろしく。なのは」

とあいさつを終えるとなのはの後ろから訓練をしていた4人が来た。

「あの、なのはさん、この人は？」

水色の髪をした少女がなのはに話しかける。

「ああ、スバル。この人は、今朝、保護された次元漂流者の人で名前はティエリアさん」

「ティエリア・アーデだ。今日から民間協力者として、機動六課に配属となった。よろしく」

「ほら、みんなも自己紹介」

なのはがそう言うのと皆緊張した感じで自己紹介を始めた。

「ティアナ・ランスター二等陸士、ポジションはセンターガードです」

オレンジの髪でツインテールの少女が言うと他の三人も言いだす。

「フロントアタッカーのスバル・ナカジマ二等陸士です！よろしく
願いますティエリアさん！」

先ほどのなには話しかけてきた水色の髪の少女も名乗る。

「エリオ・モンドユアル三等陸士です！えと、ポジションはガードウィングです！」

「き、キャロル・ルシエ、三等陸士、です。フルバックのポジションです」

赤髪の男の子と、桃色の髪の女の子も名乗る。

「きゅっ」

「こ、このこはフリードリヒです」

そしてキャロの上に乗っている小さな竜の紹介もしたが

(竜までいるとは…本格的にここが別世界だと分かったな)

竜の存在を見てティエリアは改めて自分の知っている世界と全く違うと思ったのだった。

「さて、自己紹介は終わったけど、僕はこれからなにをすればいい？」

「それじゃあ、ティエリアも訓練を・・・」

「いや、私と勝負してもらおう」

そこに現れたのはポニーテールで赤紫色の髪をした烈火の将、シグナムであった。

3、魔法の存在とティエリアのデバイス（後書き）

流れ星に願いを変えてもらえらるなら、文才が欲しい。
ほんとこんな文才のない自分ですいません。

4、ヴォルケンリッターの将2人VSティエリア（前書き）

最初はシグナムだけにしようかと思いましたが

この際だからヴィータも入れてみようかということ

ヴィータもバトルに加えました

4、ヴォルケンリッターの将2人VSティエリア

「し、シグナムさん!？」

なのははシグナムの姿を見て驚く。そう、姿を見て。

シグナムはバリアジャケットをすでに装備して、剣をティエリアに向けている。ありていに言えば準備万端の状態だ。

「シグナム、だったな」

「ああ。機動六課ライトニング分隊副隊長シグナムだ」

ティエリアは剣を向けられているにもかかわらず、冷静に質問をする

「君はなぜ僕の相手をする必要がある？僕はまだここに来たばかりで、実力などは分からないはずだが」

「そうですよ」

なのはもうなずいて言う。

「シグナム、いきなりどうしたの？私が止めてもやりたいって」

とそこにあらわれたのはなのはと同じくこの世界でティエリアが最初に会った女性フェイトだ。

「理由としては、主はやてに実力を確かめるように言われたからだが、それだけではない。こいつの眼は戦士の眼をしている。たとえ

何がおこるうとも、自分の決めたことを貫き通す覚悟が見える」

「つーわけで、あたしもやんぜ」

「て、ヴィータちゃんまで!!」

いつの間にかシグナムの横いる赤服の少女、ヴィータを見てティエリアは

(この2人、間違いなく強い。それもかなり)

二人がかなりの実力者だと分かるとティエリアは何かを決めたように頷き

「わかった、相手をしよう」

「ティエリア!？」

「ティエリアさん、大丈夫なんですか？」

なのはとフェイトは心配した様子で言うがティエリアは引く気はない。

そもそも、ティエリアは意外と売られたケンカは買う男で、なおかつ負けず嫌い。勝負をしると言った瞬間にもう決めていたのだろう。

「たしか、フェイト・テストロッサ・ハラウンだったな心配はいらない。それと、僕のことにはティエリアでいいし、敬語も必要ない」

「そう・・・なら、ティエリア、二人ともかなりの実力者だよ」

「ふ、負けるつもりはない」

その一言を聞いてもう止めても無駄だとここにいる全員が理解していた。

「セラヴィー、セラフィム、セットアップ」

「了解」

光に包まれティエリアの身体はセラヴィーガンダムになるが前回と違い、こんかいはGNバズーカを二つ、つまりはダブルバズーカを装備した状態だった。

「はじめるぞ」

シグナムがそう言うとヴィータとティエリアも武器を構える。そして

「はあああああ！！！！」

「うおらあああああ！！！！」

先に動いたのはシグナムとヴィータだ。左からはシグナムが彼女の剣であり、デバイスのレヴァンティンを、右からはヴィータがハン

マーのグラーファイゼンを振り下ろす。

「GNフィールド!!」

「了解、主」

しかしその攻撃はティエリアの張ったGNフィールドによって防がれて停止する。

「なに!!」

「か、かてえ・・・」

そして左右にGNバズーカを向けて発射する。

「ぐっ!!」

「やるな、こいつ」

当たってはいたが二人は寸前にプロテクションのバリアを張り、ダメージを最小に減らした。しかし、ティエリアから距離をとってしまった。

「セラフイム、フェイスバーストモード!」

「了解」

後ろの黒い部分が動き出し顔を見せる。その時、下で見ていたなのはとフェイトを除く全員が「背中に顔!？」と驚いていたがティエリア達を知るよしもなかった。

「圧縮粒子、開放！」

「発射」

六つの砲身から放たれる強力な魔力弾はシグナムとヴィータに命中するも防がれる。しかし、逆を言えば防ぐ以外に方法がないのだ。

「くっ、近づけない!!」

「ならこれで……………」

ヴィータは小さな鉄球のようなものを6つ出現させる。

「シュワル・フリーゲツ！」

「どうだああ!!!!」

アイゼンでそれを打つ。すると鉄球は赤い光に包まれ加速してテイエリアへ向かっていく。

「やったか!!」

ヴィータは命中を確信して一瞬気が抜けた。そして、煙が消えた先にいたのは無傷のテイエリアだった。

「セラヴィーの防御力を舐めてもらっては困る」

攻撃が当たる瞬間にGNフィールドを最大展開したのだ。並大抵の攻撃では効くはずもない。

「「こんどは、こっちから行く」

するとティエリアは自分の正面にGNフィールドを展開し、両肩と両膝のキャノンと同時に撃つ。

4つの光は1つにまとまり、さらに威力も上げて向かっていく。

「あぶねえ」

「なんとという威力だ」

ぎりぎり回避した2人が見たのは砲撃が当たり、崩壊する廃ビルだった

「・・・本気で行くぞ、ヴィータ」

「わかってる！！グラーフアイゼン！！！！」

「いくぞ、レヴァンティン！」

2人は再び武器を構える。そして

「「カートリッジロード！！」」

「「了解、カートリッジロード」」

2つの武器から弾丸の薬莖のようなものが出たと同時に魔力が増幅する。

（あれが、先ほどの資料でみたベルカ式の魔法、カートリッジシステムか。本番はここからだ！！）

そう思い先制攻撃を仕掛けようとするが一足遅かった。

「レヴァンティン！！」

「シュランゲンフォルム！！」

するといきなりレヴァンティンは連結剣となってティエリアに襲いかかる。

「GNフィールド！」

「展開」

一瞬防いだかのようにも見えたが

「突破された！魔力が強すぎるためか・・・ぐあ！！」

GNフィールドを突破されたと同時に後方に衝撃が走った。ヴィータのグラーファイゼンのラケーテンフォルム。サイドに付けられたブースターを使い出力と勢いをつけ、もうサイドのニードルの付いた方を力の限り振り落とした。さすがの重装甲バリアジャケットのセラヴィーでもこれには耐えられず、地面に落下した。

「す、すいい」

「ヴィータ副隊長、シグナム副隊長、ほんとに強い」

「でも、ティエリアさん、大丈夫でしょうか」

「し、心配です」

ティアナ、スバル、エリオ、キャロの4人は墜落……というより、たたき落とされたティエリアの心配をしていた。

序盤はティエリアが押していたため皆驚いていたが、カートリッジをロードした瞬間に形勢は逆転した。

「なのはさん、もう」

スバルは止めるようになのはに頼んだ。

「そうだね。フェイトちゃん、止めに行くよ」

「うん」

2人は模擬戦を止めるため動こうとする。しかし、その必要はなかった。停滞していた均衡は2筋の強烈な光で動き出した。

ヴィータは少々やり過ぎたと思った。リミッターをかけられているとはいえ、今の一撃はさすがに効いたはずだ。少なくとも大げがはしているだろうと思っていた。だがその油断が命取りとなった。

「なんだ!?!」

煙のむこうが光った時、強烈な2筋の光がヴィータに向かってきて、ついに命中した。

「ぐは、くそ!」

それでも自分の魔力弾をいくつか当ててある程度は相殺したもののダメージは大きかった。

「ヴィータ、大丈夫か?」

「なんとかな。それより、次が来るぞ!!!」

煙が完全に晴れるとティエリアが両手に持つGNバズーカを連射しながら接近する。

「そのような動きで!!!」

「カートリッジロード!」

シグナムの剣が炎をまといそのままティエリアに切りかかる。防がれてもまた突破すればいいと言う考えだった。

しかし、その攻撃を防いだのはセラヴィー膝の砲台から3本目の手から出てきて魔力刃でできたビームサーベルによるものだった。

「腕だと!?!」

さすがのシグナムも腕が出てくるとは思わなかったのか、油断がで

きた。その油断を見逃すティエリアではない。すぐさま両手に持ったバズーカを向けて撃った。

「ぐああああ！」

「シグナム！！このやるー！！！」

一人で突出するヴィータだが、1対1で、なおかつ力比べならティエリアが圧倒的である。

「なにい！！！」

ティエリアはグラーフアイゼンをバズーカを捨てて両手で受け止めた。

「パワーでセラヴィーに勝てると思うな！！！」

ティエリアの細身でやっているわけではない。セラヴィーが出力を上げて止めているのだ。そして力まかせにヴィータごと投げ飛ばした。そしてそのまま廃ビルに激突した。

「くそ、こいつう」

「まだまだ！！！」

シグナムとヴィータはまだまだいけると言った感じでティエリアを睨みつける。

「そこなくなてな」

テイエリアもまた、両手にビームサーベルを持ち構える。そこに

「はい、そこまで」

「3人とももういいから」

なのはとフェイトが止めた。

「テイエリアの実力は十分すぎるほど分かったし、これ以上続ける意味はないよ」

「ランクはS+なのはと私と同じだから、民間協力者とはいえリミッターをつけられることになるんだけど・・・テイエリアは大丈夫？」

「どうなんだ、セラヴィー、セラフィム」

「問題ありませんマイスターテイエリア」

「力はある程度落ちますが、それでも大丈夫です。すべてのシステムが使えます」

「なら、承諾しよう」

そう言ったあとテイエリアはヴィータとシグナムの方に向き直る。

「なかなかのものだった。いずれ決着をつけよう」

シグナムは心底嬉しそうに言った。

「ああ。のぞむところだ」

ティエリアもまんざらでもないのか笑顔で応える。

「それじゃあ、改めて名乗ろう。ティエリア・アーデ、民間協力者だ」

「機動六課スターズの分隊副隊長ヴィータだ」

「おなじくライトニング分隊副隊長シグナムだ」

そして3人は握手を交わした。が、ティエリアはやはり先程のダメージもあるがこの半日で色々あり過ぎたためバリアジャケットを外した直後、気絶した。

（お前は、お前が思う通りに進めティエリア）

気絶する間際に彼にとっての恩人の声が聞こえた気がしたのだった。

「ロックオン・ストラトス……」

ティエリアは無意識にその者のコードネームを呟きながら目を閉じた。

そして、物語は本当の序盤の戦いを見せる。

4、ヴォルケンリッターの将2人VSティエリア（後書き）

ふう、なんとかできたな。

最近、なにかと忙しいので書く暇がなくなってきたけど
それでもやります。がんばってみます。

5、アリート(前書き)

どうもです、こんかいも自分なりに書いてみました。

5、アラート

「ん、ここは・・・」

目覚めたティエリアが最初見たのは覚えのない天井だった。

「あ、起きたんですね」

「きみは・・・それにここは」

「ここは医務室、私はシャルムといいます」

ティエリアは自分のポケットに入れているデバイスの感触がなかったため、シャルムと名乗る白衣の女性にティエリアは問う。

「僕のデバイスは？」

「すみませんティエリアさん。勝手ながら、点検をさせてもらい、さらに寝ているときに、こちらの方であなたにリミッターをかけたさせてもらいました」

シャルムは申し訳なさそうに言う。

「いや、別に気してはいない。それより、僕はどれほど寝ていたんだい？」

「ずいぶん疲れていたみたいで、あれから1日は寝ていました」

「なっ、そんなに寝ていたのか？」

そう言われて窓の外を見ると日が昇っており、小鳥のさえずりも聞こえていた。

「・・・それで、なのは達は？」

「ついさつき、ティエリアさんのデバイスを届けに来て、そのまま早朝訓練に向いましたよ」

シャマルはポケットからティエリアのデバイスを出した。だがその形は前までティエリアが使っていたようなアクセサリーの形ではなく、リストバンドのような形になっていた。

「シャマル、これは？」

「シャーリーがティエリアさん用に改良したそうです。機能は何も変わっていないので、そのまま使ってくれたらいいそうですよ」

「後でお礼を言わなくてはいけないな」

どうやら気に入ったらしくティエリアがそう呟くとシャマルは「それよりも」と言いだし

「なのはちゃん達に起きたことを知らせた方がいいと思いますよ。シグナムもヴィータちゃんも、模擬戦とはいえやり過ぎたことを反省してたみたいだし」

「！そうだったか・・・なら、早速向かうとしよう」

と言ってその場を後にして訓練場へと向かった。

訓練場に着くとなのはとフォワードの4人が訓練をしており、それを見ている影が二つあった。

「おはよう。シグナム、ヴィータ」

テイエリアが挨拶をすると二人は振り返り

「む、テイエリアか。昨日はすまなかつたな…」

「リミッターをかけてたとはいえ熱くなりすぎた。すまねえ」

と謝ってきた。

「いいさ。それに、あの模擬戦は僕が受けたいと思ってやったものだし、僕もそれなりに本気を出していたんだ」

そう、それなりに。実際テイエリアは3つのブラックボックスどころか、6本の腕、バーストモードすら使っていない。

「そうか。だが、我らも負けたわけではない。いずれ決着はつけよう。こんどは、1対1でな」

シグナムがそれだけ言うとテイエリアは頷きフォワードの訓練を見だした。

「すごいな、彼女は」

ティエリアはおもわずそう呟いた。

「彼女にリミッターは？」

「付けられている」

「ついでに言うと、はやてと隊長陣はみんなリミッターを付けてる」

「ということは、君たちも？」

「ああ」

ティエリアは驚きを隠せなかった。

（2対1とはいえ、その状態で僕と戦い接戦したこの二人も凄いが、
・・・4対1でまだまだ余裕の彼女はさらに凄いな）

ティエリアもなのはと同じくS+から2.5ランクダウンはしている。だが、それでもなのは達とはこの世界での戦いのブランクの差というものもある。普通に戦えば互角か、

（負けるだろうな）

そんなことを考えていると訓練が終わったのでティエリアはなのは達の方へ向かった。

「さて、みんなもチーム戦にだいぶ慣れてきたみたいだね」

「「「「ありがとうございます！」「」「」」

なのはに褒められてフォワードの4人は素直に感謝する。

「ティアナの指示も筋がとおってきたよ。指揮官訓練、受けてみる？」

「い、いえ、そんなこと…」

ティアナが何か言いかけた時、

「謙遜する必要はないと思うぞ」

ティエリアがそう言う。

「ティエリア！起きても大丈夫なの？」

「ああ、少しここに来た時の疲れが出ただけだからもう大丈夫だ。心配をかけてすまなかった」

「そう。よかった」

なのはは、ほっと息をついたのを見てティエリアはティアナの方へ向く。

「ティアナ、先ほど見ていたが、君の指揮能力はたいしたものだ。指揮官訓練を受けても問題ないと思うのだが」

「いえ、あの、戦闘訓練だけでいい、いいですから」

「そうか。まあ、君が決めることだから、僕はこれ以上何も言わないが」

「ところで、ティエリアはどうする？訓練を受けるなら、手伝うけど」

「それはいいなと言いたいところだが、その前にスバル」

「は、はい!？」

呼ばれるとは思っていなかったのかスバルは驚いた感じだ。

「君のそのローラー、早く直した方がいいんじゃないか？」

「へ？ああっ!?!」

スバルはティエリアに言われローラーを見ると黒い煙が出ており、プスプスと音を立てて壊れていた。

「あっちゃー無理させちゃった」

「オーバーヒートかな？後でメンテスタッフに見てもらおう」

「はい…」

なのはに言われスバルは少し暗い顔をして頷いた。

「ティアナのアンカーガンもかなり厳しい？」

「はい、だましましたです…」

なのは「うん」と少しだけ考えた。

「みんな訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなー」

「新、デバイス？」

その後一旦4人はシャワーを使うため寮に戻った。テイエリアはというと、現在訓練を行っている。

「圧縮粒子、解放！」

「発射」

放たれた6つの光は、吸い込まれる様に訓練用ガジェットに命中した。

「GNフィールド展開」

「展開」

GNフィールドを展開してガジェットに向かうその合間に攻撃されるがまるで効いていない。

「GNフィールドには、こういう使い方もある…！」

ティエリアはスピードを上げてガジェットに体当たりをした。ガジェットはまるで猛スピードで走るトラックに撥ねられた人のように吹っ飛び、壁に激突して四散した。

「これで最後のようだな」

最後の一機を破壊してそう呟く。

「すごいよティエリア！！わずか20分で40機全部を倒すなんて！！」

「それでもない、AMFはどうやら僕のデバイスにとっては何の意味も無さないうのだが、それでも20分はかかった。それに、力で圧倒しただけだ」

56

ティエリアの攻撃と防御はGN粒子と魔力を複合したものだ。アンチマギック
フィールドAMFがあっても大丈夫である。ちなみに、そのことはすでに訓練開始前になのはに言っているがティエリアの世界のエネルギー機関ということだけで、GNドライブと粒子の詳しいことやトランザムなどの機密事項は何一つ喋ってはいない。

「だが、君なら15分以内でいけるんじゃないか？なのは」

「たとえそうだとしても、すごいよー！」

「……………褒めてもらえて感謝する」

ソレスタルビーイング内でティエリアがここまで褒められたことはなかったためか、少しだけ照れてそう言ったのだった。

その後、訓練を終えたティエリアはなのはとフォワードの4人とデバイスルームに向かった。

「あ、アーデさん！いらしゃいですー」

部屋に入るとリインがティエリアの方へ寄って来た。

「やあ、リイン。こんちは」

「あ、ティエリアさんも来たんですね」

「ああ、シャーリー。君にお礼が言いたくてね。僕はこのデバイスの形が気に入ったよ。感謝する」

ティエリアがお礼を言うと

「いえいえ、許可も取らずに色々やったのに・・・」

とシャーリーは謝ってきた。恐らく勝手にリミッターをかけたことと、デバイスの形を変えたことに謝罪したのだろう。

「その件は気にしていない。デバイスに関しては、セラヴィーとセラフィムも気に入っている」

「マイスターティエリアの言う通りです、Msシャーリー。自分はこの形が気に入っています」

「主のリミッターも主が望んだことです。気にしなくていいですよ。それと、この形はなかなかです。私も感謝してますよ、Msシャーリー」

「・・・どういたしまして、ティエリアさん、セラヴィーさんとセラフィムさんも」

「それじゃ、新デバイスのお披露目ですー」

リンがそう言うと4人に新デバイスが渡された。

「こ、これが私達の新デバイス」

スバルのデバイスはサファイアのよりも少し薄い青色の宝石で首にかけられるようになってる。デバイス名はマツハキャリバー。

ティアナのデバイスはランプのカードより少し大きめのカード型で、中央にはオレンジ色の宝石が付いている。デバイス名はクロスミラージュ。

「すごい！すごい！私達の新デバイス！」

スバルは子供のように喜んでいた

「よかつな、スバル」

「はい！どうもです！！ティエリアさん！！」

（本当にうれしそうだな・・・）

「あーもー落ち着きなさいスバル！ティエリアさんごめんなさい、ほんと」

と言ってきたティアナに

「謝る必要はないさ、ティアナ」

とちよつと苦笑してティエリアは言った。

「ストラーダとケリケイオンは変化なしかな」

「うん、そうなのかな」

エリオとキャロのデバイスは前と変わらず、ストラーダは腕時計型、ケリケイオンはブレスレット型だ。

「外見は変わってはいないが、中身は全く違うと言ったところだろう」

「その通りです、アーデさん。二人はまだちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、慣れるために最低限の機能しかつけてなかったんです」

「あ、あれで最低限！？」

「ほんとに？」

エリオとキャラロは驚いていた。まさか最低限の機能しかなかったとは思わなかったのだろう。

「まあ、各々の機能はこの後の訓練で……」

なのはが言い終わる前に突然アラートが鳴る。

「このアラートって」

「一級警戒態勢!!」

スバルとエリオがその意味を告げる。

「敵が出現したか……!」

テイエリアはこれから来る戦いに覚悟を入れていた。

????

そこはどこかも分からない場所、そこに4つの影がある。

「君たちの世界の技術は本当に凄いな、そそられる、研究心が疼くよ」

白衣を着た男は気味の悪い顔で言う。

「我々を救い、さらに協力もしてくださるのですから、当然のことです」

白衣を着た男の後ろにいる3つの影の一つが感謝しているのか、していないのか、微妙な声で言った。

「それで、私の研究心をさらに高ぶらせるものが、本当にあるのかね？」

「それは、あなたに見せたもらったあの男の戦闘映像見た時から決まっていることです。ですが、信用するためには今回の戦闘を見ればより分かるでしょう。」

「期待しておこう」

「では、我々はこれで」

3つの影は部屋を出る。

テイエリアはまだ知らない。自分の世界から来たのが他にも居て、それがこの世界の歪みと行動していることに……

5、アラート（後書き）

スカリエツティと行動してる者の正体はもうしばらくは出ませんが、なんとなく分かった人はいるとは思いますが・・・

戦闘描写とかうまく書ける自信はありませんが自分なりにやってみます

6、戦いの一角(前書き)

戦闘を多く書くつもりですが

うまくできてる保証はありません

文才がなくてすいません&文才欲しすぎorz

6、戦いの一角

ティエリアの機動六課に入っの初の戦闘。しかしティエリアは今まで何度も命を懸けた戦いを行ってきた。このくらいはどうということはない。

『ティエリアさん、ここに来ての初任務やけど…』

「問題はない。いつでも行ける、八神はやて」

通信映像で話しかけてきたはやてにティエリアは毅然に応えた。

『そつか。それと、はやてでええよ。ティエリアさん』

「了解した、はやて。・・・そのかわり、僕のこともティエリアと呼んでもらう」

につこりとした笑顔だが真剣な眼差しでティエリアが言つと少しだけ赤くなつたが誰も気付かなかつた。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みんなもOKか？』

「……はい！」「……」

4人がはっきりとした声で言う。

『うん、ええお返事や。ほんなら……機動六課フォワード部隊、出動！…』

はやてのその言葉を聞いたと同時に、皆が動き出す。

テイエリア達はヘリに乗り、目標地点へ急いでいた。ちなみに、現在ヘリを操縦しているヴァイスはテイエリアと会ってわずか30秒で既に打ち解けている。

（昔の僕の性格ではおそらくこうはいかなかったな）

とテイエリアは思っていた。……実際、昔のテイエリア性格とヴァイス性格では間違いなく馬が合わないどころか、会ってすぐに喧嘩になっていたかもしれない。テイエリアは自分の現在^{いま}を作ってくれた仲間達に心の中で感謝しながら、作戦を聞いていた。

「作戦は2つ、現在、ガジェットに制御を乗っ取られているリニアルールの制御の奪還とロストログアのレリックの回収、私とフェイト隊長が先に出るから、安全をほぼ確保したら……」

「僕も行かせてもらおう」

「テイエリアも？」

「ああ。敵の空中の敵の殲滅戦。なら、僕の装備は殲滅戦には向いているはずだ」

なのはは、最初に見た戦闘と模擬戦の時のことを考え決断した

「……わかったけど……無理はしないでね」

「分かっている」

「ヴァイス君、ハッチを開けて」

「了解つす、なのはさん」

「メインハッチ、オープン」

ハッチが開いて出撃しようとした時、ティエリアの眼に手が震えていて、何かに悩んでいるかの様な顔をしたキャラコ姿が見えた。

「……………キャラコ」

「は、はい？」

ティエリアはキャラコに近付き、話し始める。

「今の君が何かに悩んでいるのは見ればわかる。だが、それを僕が聞く権利はない。……………けど、1つだけ言いたいことがある。」

「「ティエリア？」」

なのはとヴァイスはティエリアが何を言うのかをじっと見いていた。

「昔、僕も君のようかどうか分からないが悩んだことがある。自分が大切にしている存在に見放され、自分のミスで人を傷つけてしまい、自分はどうすればいいのかも分からず、泣きたくなるくらい悩んだ時があった」

ティエリアの過去を聞いて皆が黙る。いつも笑って自分達に接して

くる人にそんな辛いことがあったとは思ってもよらなかったのだろう。

「そんな時、僕の恩人が来て言ってくれた……………四の五の言わずにやればいい、自分の思ったことをがむしゃらに…」

「自分の、思ったこと…」

「そうだ。君の力は、誰かを守る力だ。なら、それを自分がこうだと思つように使えば、いずれそれが誰かのためになっているはずだ」

「……………はい！」

キャロにはもう先ほどの不安や緊張感はなく、穏やかな顔をしていました。

「僕から言いたいことはそれだけだ……………そろそろ出撃する」

「アーデさん、戦果を期待しています！」

「了解したリイン」

偶然にもその言葉はティエリアの出撃の時にミレイナが言ったことと同じだった。だからティエリアはそれにいつものように答えたのだ。

ティエリアとなのはは、ほぼ同時にハッチから飛んだ。

「セラヴィー、セラフィム…」

「レイジングハート…」

「「セットアップ!!」」

そしてセットアップする。

「スターズ1、高町なのは、」

「セラヴィー、ティエリア・アーデ、」

「「行きます!!」」

二人はフェイトと合流、およびミッションのポイントへ向かった。

目標地点の上空へ着くとすでに大量のガジェットが空を飛んでいるのが見えていた。フェイトとも先ほど合流している

「フェイト、なのは、聞こえるか？」

(どうしたの、ティエリア?)

「今から敵の中央に遠距離砲撃を打ち込む。砲撃から逃れた敵を両サイドから攻撃してくれ！」

(砲撃?それって)

「見ていれば分かる!!」

フェイトが聞き終わる前にティエリアは砲撃の準備をしていた。二つのGNバズーカ?を両肩のGNキャノンに接続する。

「モード、ツインバスター」

「圧縮粒子、チャージ完了済みです主」

「分かった」

テイエリアのバリアジャケット内部の目の部分にロックオンマークのようなものが出る。それを敵の中央へと合わせる。

「ツインバスターキャノン」

背中の部分もフェイスバーストモードになる

「高濃度圧縮粒子、解放」

「「発射」」

引き金を引くと二筋の長く、巨大な魔力弾の光が敵へ向かっていく。

(す、すい)

(これが、テイエリアの力)

2人が驚くのも当然だ。放たれた一撃は中央に居たガジェット部隊に当たり爆発し、その爆発に巻き込まれてさらに敵を落とした。

たったの一撃で、何千機もいたガジェットの大群を4分の1は減らしたのだ。しかも、これでもリミッター付きなのだから。

「ミッションを続行する。両サイドの攻撃は任せた」

(OK、フェイトちゃん一気に行くよ！)

(うん！)

戦闘開始をして10経過していた。すでにトレインにはスバル達がレリック回収と、ガジェットの殲滅を行っており、空中の敵もすでに半分以下となっていた。

「GNフィールド！」

「展開」

四方からくる攻撃はティエリアには全く効かず、圧倒的な砲撃力で敵を殲滅していく。

「この程度で、セラヴィーに！！」

「発射」

6つの砲身から出てくる光に次々とガジェットは落とされていく。

「すごいよ、ティエリア」

近付いてきた、フェイトがそう言うのはティエリアの強さのことだけではない。

「それでもないさ、次は僕が防御を張って敵に向かう。その後ろに君は隠れ、タイミングを見計らって前に出て接近戦攻撃、合図ともした後退を」

「わかった」

「なのはは、僕が合図したと同時に攻撃を」

（わかったよ）

2人から確認をとった後、ティエリアはフィールドを張って敵に向かう、その後ろにフェイトが隠れるようについてくる。

敵の攻撃はフィールドの向こうのティエリアには全く届いていない。そして不意打ちを仕掛けるかのようにフェイトが前に出て敵を切り裂く。

「フェイト今だ下がれ！」

フェイトは敵を切り裂いてすぐに下がると敵が向かってくる。

「なのは今だ!!」

（うん、ディバインバスター!!）

「圧縮粒子、解放」

上と下からの同時砲撃で向かってきた敵は消滅した。フォーメーションS32、ティエリアがスローネ戦で刹那と使用した連携を少し変えてやったのだ。

「やっぱり凄いよティエリア。砲撃もだけど、そのフォーメーションも」

「うん、本当に」

「これは僕考えたものじゃない。僕はそれを使うタイミングを見てやっただけだ。それ言うなら、君たちもすぐに対応できるその力はたいしたものだ」

ティエリアは本当に驚いていた。いくら1つ、1つ指示を出しながらとはいえ、すぐに対応でき、完璧にフォーメーションが成り立っていることに。

「この調子で、敵を一掃する」

「うん」

もはや空中の敵が完全に殲滅されるのも時間の問題である。

ふと、戦闘中にトレインの方を見るとエリオとキャロが新型と思われるガジェットと戦闘を行っていた。

「まずいな」

ティエリアはそう呟いた。敵はどうやら強力なAMFを発生させて

いるらしく、攻撃は効いていない。

（今援護に行けば、敵はトレインに張り付いてくる…なら、速く眼の前の敵を）

倒して援護しようとする前に事態は動き出す。敵の攻撃で気絶したエリオが投げ飛ばされ、それを助けようとしてキャロもトレインから飛び降りたのだ

「なっ、まずい！なのは！！」

ティエリアは自分の機動性と距離ではたとえ隠しているトランザムを使っても間に合わないことを判断したため、すぐに一番近いなのはに念話をおくった。

（大丈夫だよ、ティエリア）

「なに？」

ティエリアはどういうことか分からなかった。

（発生源から離ればAMFも弱くなる）

「そっか！なら…」

（そう、フルパフォーマンスの魔法が使えるよ！だからティエリア、二人を、キャロとエリオを信じて）

ティエリアはその言葉を聞き、前にいる敵に集中しながらエリオとキャロを見ていた。

キャラ Side

(守りたい・・・！)

ただそれだけだった。

私の居場所などないと思っていた。私のしちやいけないことしかない。私の力は、人を傷つけるものでしかないと思っていた。

けど、そんな私を受け入れ、優しく微笑みかけてくれる人達がいる。

(優しい人を、私に笑いかけてくれる人達を・・・)

その時、ヘリでティエリアさんが言ってくれことが頭の中で再生される。

【四の五の言わずにやればいい、自分の思ったことをがむしゃらに・・・】

あの人も私と同じだったのかもしれない。

【君の力は、誰かを守る力だ。なら、それを自分がこうだと思いううに使えば、いずれそれが誰かのためになっているはずだ】

そう。私の思ったことを.....

(自分の力で、)

目の前にいる優しい人を、

「守りたい!!!」

手を伸ばし、エリオくんの手を握る。

「ドライブ、イグニッション」

ケリユケイオンが告げたと同時に、私達の周りをピンク色の魔力に包まれる。

「フリード、不自由な思いをさせてごめん」

けど、今の私なら

「私、ちゃんと制御するから」

だから、

「いくよ。竜魂召喚！」

さらに眩い光が包み込み、私の下には大きな魔方陣が現れる。

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を駆けよ」

私は唱える。守るために

「来こよ、我が竜フリードリヒ……竜魂召喚!!!」

キャラ Side 了

巨大な翼を広げ、先程までの小さな竜ではなく、強大な力を込めた白き竜だった

「あれが、キャラの力か？」

（そう、竜召喚、まだ力の一端だけどね）

「あれでか！？まったく、心配する必要はなかったか」

（そうでもないよ。ティエリアがキャラに言ってくれたことがあったから、出来たんだと思うよ）

「なら、いいんだが」

それだけ言うとティエリアは敵の完全殲滅に移る。

「エリオとキャラはもう大丈夫だな・・・こちらも決めるか」

ティエリアは2つのGNバズーカを合体させ、1つにまとめる

「バーストモード」

「ダブルバズーカ、バーストモード！！」

エネルギーチャージされた球体の魔力弾が敵を貫き、消滅させていく。

「敵部隊の殲滅を確認」

それと同時にエリオ達の方も終わったと連絡が来る。

(終わったね)

「ああ。ミッションコンプリート……!!!」

テイエリアは何かを感じて周囲を見渡す。

(どうしたのテイエリア?)

(何かありましたか?アーデさん)

「いやなんでもないこれより帰還する」

テイエリアはそうは言っが頭の中で考えていた。

(気のせい……なのか?)

????Slide

「ふーん、テイエリア・アーデもそうだけど、他の連中もたいしたことないわね」

先程まで命令を受けて監視をしていたけど、やはり無駄だった。

その後ろには残りの二人はいないがそのリーダー的存在がいた。

「ほう、あれでもか…本当に興味が沸くことばかりだ」

「ふふふ、そうだろうね」

「それであの光のオリジナルを手に入れればいいのだね」

「そうさ、あれはデバイスによってできたもらしいけど、それでもオリジナルとさして変わらない。手に入れば、間違いなく君の研究心にも役立つはずさ。まあ、出来ればいいけどね。彼は消さなきゃいけない存在だから」

それを聞いた白衣の男は心底嬉しそうな顔をしてモニターを見直す。

「君たちの存在もそうだが、あれも本当にすごい……そして、まさか生きたプロジェクトFの残滓とは……だが、」

白衣の男は後ろの少年を見る

「君たちほどじゃないようだが」

「それはそうさ、あんな出来損ないと同じに見られるのは心外だね」

「これは失礼した。だが、あれも研究の対象に使えるな」

「本当に君は凄い。その研究心は人間を超えているだろうね」

少年も不気味に笑う。

「君のような存在に褒められるのは嬉しいね。君の計画の成就是私は心から願っているよ。たとえ利用されていようとも」

「それは嬉しいな」

この世界の歪みと、ティエリアの世界の歪みは笑う。

この2つの歪みが何を生むか？それはまだ、誰にも分からなかった。

6、戦いの一角（後書き）

もうここまで書けばスカリエッティと行動している歪みの正体は分かると思いますが、まだ言いません（一応） 無意味

ちなみにヒ????についてはかませフラグを立ててみましたけどどうなるかは秘密です

7、訓練&フォーメーション(前書き)

まだテスト中ですが、休憩を兼ねて書きました。

7、訓練&フォーメーション

「テイエリア、準備は大丈夫？」

「問題ない。いけるか？セラヴィー、セラフイム」

「システムに問題はありません」

「ならいい。始めてくれ、なのは」

「うん。それじゃ、みんながんばってね」

「……はい！」「」「」

スバル達は声をそろえて言ったあと、武器を構える。

「一応先に言っておくが、生半端なことで成功させることはできない。集中して、昨日までで覚えた範囲でいい、試してみるんだ」

「……はい！」「」「」

「いい返事だ」

この発端は5日前、トレイン事件が解決して2日経った日のことだった。

「うおおおおりやああああ……！！！！」

スバルはリボルバーナックルをつけた右腕を思いっきり打ちこむ。

「GNフィールド！」

「展開」

フィールドを展開して防ぐティエリアだが

(これは……セラヴィー、セラフィム、出力上昇)

☆☆了解☆☆

格段に上がった防御によってダメージは通らず、スバルの攻撃は停止した。

「あー、やっぱり届かなかったー」

と落胆するスバルにティエリアは話しかける。

「そうでもない。実はあの時、途中から出力を上げて防御していたんだ。もう少し力をつけることができれば、今度は突破できるだろう」

「ほ、本当ですか!？」

ティエリアは頷いて肯定する。

「それに防御もなかなかです。さきほどMSヴィータの攻撃を防いだのを見て、自分はそう思えた」

「えへへへ」

「良いマスターの力になれてよかったですね。マツハキャリバー」

「ありがとうございます」

セラヴィーとセラフィムが褒めると近くにいたヴィータが

「おい、セラヴィー。あたしのことをMsって言うな。変な感じがする」

と少し照れているのか、怒っているのか分からない感じで言った。

「……………善処します」

「おう。って、わかったとは言わねーのかよ!!」

「私も善処しますよ、Msヴィータ」

「お前もか！セラフィム！」

などと漫才をしているのを見てティエリアが少しだけ笑っていたのは秘密だ。

ティエリアはポジションがどこかといわれるとフロントアタッカーの部類に入るのはないかとなのは達から言われ、ここでスバルと共に訓練を受けたり、または他の訓練を手伝ったりしている。

「やるじゃないか、ティアナ。その狙撃の腕はたいしたものだ」

「あ、ティエリアさん」

ティエリアは訓練を一端抜けてティアナの方へと来た。

「ティエリア、どうかな今のティアナは」

「今見始めたばかりだが、判断力は完璧と言っても良い。狙撃の方も僕の知ってる限りではあるが、2、3を争うほどの持ち主だ」

ティエリアがそう言うのとティアナが聞いてきた。

「あの、それじゃあ、1番は？」

「…この前、僕がへりの中で話していた恩人である、ニール・ディランディという男だ」

ティエリアは悲しい顔は一切見せずに、昔を懐かしむ顔で言った。

「そんなにすごかったの？」

今度はなのはが聞いてくる。

「ああ。命中率はいつも90%代をキープしていた。彼がシュミレーションで外したことは見たことない」

「ほ、ほんとにすごいね」

「ああ。僕の知る限りでは、彼を超える狙撃主はいない」

「そう、ですか」

ティアナは少しだけ落ち込んだ顔をした。

「とはいえ、もしかすると追い越すかもしれないな。この調子でいくと」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。自信を持つといいさ。それじゃあ、僕はエリオとキャラの方も見てくる」

そして訓練していた場所を離れたがティアナにはまだ歪みがあったことをティエリアは気付かなかった。

エリオとキャラは回避訓練をしていた。

「回避行動の訓練にしては、攻撃が少し遅すぎないか？」

訓練を見守っているフェイトに言った。

「あ、ティエリア。大丈夫だよ、最初はこんなもので。次第に速くして力をつければいいから」

「まあ、焦りは禁物というものだからな。……………」
僕が言うのもなんだが（ぼそっ）」

「え、何か言った？」

「いや、なんでもない」

そうしているうちに少しずつ攻撃も速くなり、二人ともそれに合わせる。

「ほお、やはり若いからか、成長スピードは速いな」

そうしてしばらく見ていると訓練が終わる。

「あ、ティエリアさん！」

エリオとキャラロが気づきティエリアとフェイトに寄ってくる。

「おつかれ。なかなかいい動きをしていたぞ」

「うん。この調子でいけば確実によくなるよ」

「はい！ありがとうございます！」

「あ、ありがとうございます。あ、えと」

とキャラロが何か言ったそうな感じだったためティエリアは聞いてみることにした。

「どうしたんだキャラロ？何か言ったそうだが」

「えと、この前は、励ましてくれてありがとうございます！」

「そのことなら別にいいさ。あれは君の力によるものなんだ。これからも自分に自信を持っていけばそれでいい」

「は、はい！」

その元気な声を聞いてティエリアは自分の訓練場へと戻った。

「はい。それじゃ、午前の訓練終了！」

ホイッスルの音と、なのはの声で訓練が終わる。4人ともハードになってきた訓練に疲れていた。

「有意義な訓練だった。午後の方も頼む」

ティエリアはまだまだ余裕そうだった。

「つ、つかれて、ないんですか？」

スバルが聞いてくる。

「いや、少し疲れてはいるが、顔に出さないようにしているだけだ」

「それって、実質、疲れてないってことじゃ……」

全員の思いはおそらくスバルと同じだろう。そもそもティエリアはイノベイドとはいえ、ガンダムマイスターとしてあらゆる訓練をやってきた。この程度では疲れもしない。

「さて、訓練は終わったけど………ティエリア」

「どうした、なのは？」

「この前の戦術、みんなに教えられないかな？」

「戦術フォーメーションをか？」

なのは頷く。

「もちろん、危険がないようにと、みんながいって言ったただけ
」ど

「私は構いません」

ティアナが答えると他の3人も頷く。

「だ、そうだよ」

ティエリアは少しだけ考えて…

「わかった。彼女達の現状で有効な戦術のいくつかを、後でデータ
にまとめておく」

「うん、ありがとう」

「なら僕はこれで失礼………」

「ちょっとまで」

ヴィータがいきなり真剣な、しかし怖い顔でティエリアを睨む。

スバル達は少しだけ脅えており、この状況を止められずに見ている。

「あたしは映像でしか見てないが、あの戦術はすごいぞ、あんなもんをそんなじよそらの奴が思いつくはずがねー」

「言っていないかったな。あの戦術は僕の世界の有名な戦術予報士が作ったものだ。僕はそれを応用したにすぎない」

嘘は言っていない。スメラギ・李・ノリエガこと、リーサ・クジヨウはAEUだけでなく、ユニオン、人革にも、いい意味でも、悪い意味でも知っている人間が多い。

「なら、何でお前がそんなもん知ってた？そう言うのは大抵、秘密にしておくもんだらう？」

ヴィータの言うことも正しい。こういう作戦関係のものは外に情報がいけないようにするため、大抵は秘密にするものなのだから。

「その件に関しては、悪いんだが喋れない」

「なっ、ふざけん……」

「どうしてもだ。………いや、いつか話す時が来るかもしれない」

いつまでも隠していることなどできないということはティエリアも理解していた。だが、今話せば、今まで共に戦ってきたソレスタルビーイングの仲間にも、機動六課の仲間への裏切りにもなるとティ

エリアは考えていた。

「その時が来るかは分からない。だが、その時まで待ってほしい」

テイエリアは自分の言っていることが無茶苦茶だということとは理解できている。だがそれでも、彼の意志は……いや、意地は固かった。

「そんなもんが……!!」

その先の言葉を言う前になのはの手が出てきて止めた。

「ヴィータちゃん、いいよ。…テイエリア、君が話してくれる時が来たらでいいから、その時は、ちゃんとお話を聞かせてね」

テイエリアはてつきりもう少し言いよられると踏んでいたが、なのはのその対応に驚きを隠せていなかった。

「……………感謝する」

そして立ち去ろうとしたが不意に振り向き

「これだけは覚えていてくれ。僕は、君達の味方だ」

「うん。私も、テイエリアの味方だよ」

「フェイトちゃんの言う通り、私達はテイエリアの味方だから」

テイエリアはフェイトとなのはにもう一度感謝してその場を去り、その日の夜にデータをまとめてなのはに渡した。

そして5日後、ティエリアはフォーメーションを見るため4人と訓練をすることとなった

「うむ、いい動きだ」

そう言いつつもGNバズーカ？を交互に撃つ。本来ならもう少し動いたり、両足、両肩のキャノンも使うのだが、今回ティエリアはあまり動かず、攻撃もそこまで強力な者は使っていない。あくまでも、今回の訓練はフォーメーションの確認。故に必要な最低限の攻撃をし、防御のGNフィールドも張っていない。

「マツハキャリバー！」

「プロテクション」

ウイングロード進みながら攻撃を防御を行うスバル。そして一定の距離まで近ずいた時、後ろに隠れていたエリオが攻撃をするため前に出た。

（…!!加速している……キャロの魔法支援か）

「うおおおおおお!!」

その攻撃を最小限の力でぎりぎり避ける。だが今度は

「バリアブルシュート!!」

（狙撃か!）

それにいち早く気付いたティエリアは砲撃を放ったが、当たった直後ティアナは消えた。

(幻影!? 罠か!)

すでに別方向からの狙撃が来ており、もはや回避することはできない。

「しかたがない………展開」

(はい、マイスター)

当たる直前にフィールド張って攻撃を防いだが、これで勝負ありだ。

「見事だな。負けを認めよう」

「……やったー!!」「……」

そう、今回はティエリアに防御を使わせれば4人の勝ちというルールだったのだ。

「動きはほぼ満点。この調子で頑張ればいい」

ティエリアは正直驚いていた。わずか数日で教えたフォーメーションを覚えたところか、ティアナの幻影や、スバルのウイングロード、キャロやエリオのコンビネーション攻撃。これらを巧みに使い、自分が知っている以上のフォーメーションを作り上げているのだ。だがなによりも

(それを瞬時に判断し、かつ的確な攻撃を選んでくるティアナ・ラ

ンスター……ふ、これは間違いなく、指揮官向けだな)

などと思いながら地上に降下してバリアジャケットを解いた。

「ありがとう、ティエリア。協力してくれて」

「構わないさ、なのは。彼女たちはこれから先、前回以上の戦いをするにもなるだろう。僕の教えたことで、彼女たちの助けができるのなら、僕も嬉しい」

それはティエリアの心からの本音である。

「うん。それじゃ、今日の午前の訓練はこれでおしまい。みんな、午後からも気合を入れていくよ！」

「……はい！」「……」

そんな4人の元気な声を聞き、ティエリアは満足そうな笑顔をしていた。

次なる戦いと、のちの悲劇のことも知らずに……

…

7、訓練&フォーメーション(後書き)

どうもです。

いきなりですがアンケートです。

既に出ること確実なあの3人ですが実はもう一人敵として

あの赤い悪魔^{サイシエス}

ブリング(もしくはデバイン)

リジエネ

この3人のうち、誰にしようか迷っておりますので意見をお願いします。

ちなみに、票の多い方ではなく皆さんの意見を聞いて考えます。

よろしくお願いします

……誰かに聞かなきゃできないとか、やっぱり文才欲しいIllior

Zllll(TAT)

番外、テイエリア殺害未遂事件（前書き）

今回ギャグに走りました。

ちやんとできていたら嬉しいです。

番外、ティエリア殺害未遂事件

「む、いないのか……」

ティエリアはとある人に用があつてこの部屋に来たというのにな
いのはどうしようもないなと思い、部屋を出ようとした。

「ん、これは」

そして机に置いてあるそれを見つけて、

「これだけあるし、1つ貰つても大丈夫だろう」

と思いバケツトに入ったそれを1つだけとった。

「さて、他のみんなに渡す前に、見晴らしがいい場所にも行くか」

その20分後、外傷こそないが、今にも死にかけのティエリアをキ
ヤロに発見された。

「さて、みんなよう集まってくれて、ありがとうな」

はやてが真剣な表情で皆を見る。

「シヤマル、それで、ティエリアの様子はどうなんだ？」

ヴィータが心配して聞く。

「外傷がなかったから、とりあえず大丈夫だけど……いまだうなされてるわ」

「一体、なにがあつたんだろう」

「うん。……あの強いティエリアがあんなことになるなんて」

なのはとフェイトもティエリアのことを心配していた。

「そやから、今からみんなに今日、ティエリアが見つかるまで何をしとったか事情徴収させてもらおうで」

とはやてがいい皆緊張する。

「それじゃ、まずは言いたしっぺ私から。その時間帯、ラインとシグナムとで、お茶をしたあと、隊長室に戻って書類整備をやったんやけど……そんなとき、キャロの悲鳴を聞いて駆け付けたんや」

「疑ってるわけじゃないけど本当？シグナムさん、ライン」

なのはが尋ねる。

「ああ。確かに主とラインとでお茶を飲んだ。そのあと私は訓練場に向かおうとしていたら途中でグランセニックと会い、供に向かつていたら悲鳴が」

「私はその時、はやてちゃんの書類整備のお手伝いをやっていたです」

「どうやらアリバイある。」

「それで、フェイトちゃんは、シャーリーと調べ物をしていたんだよね。」

「うん。」

「私もそんな感じですよ。」

フェイトとシャーリーが言う。

「スバルとティアナは、私が訓練をしていた。」

となのは。

「シャマルは、ザフィーラと買出し。あたしは訓練を見学してた。」

ヴィータは自分のことと自分が知っていることを言った。

「僕とキャロは、フェイトさんと呼ぶよう、なのはさんから言われ、一旦訓練を抜けて探していたらキャロが倒れたティエリアさんを見つけて。」

「俺はヘリの整備をした後、シグナム姉さんと会って一緒に歩いたな。」

エリオとヴァイスも話す。

「うーん。みんなアリバイがあるなあ。」

「そう言えば、ティエリアさんのデバイス達は？」

とスバルが聞く

「点検中だったから、その時の状況を知らないの」

「そうですか……」

みんなが落ち込んでいるのを見てシャーリーが思い出したかのように発言する

「そういえばセラフイムが、ティエリアさんが今日誰かに渡したいものがあるって言っていたような」

「なら仮説やけど、ティエリアが今日誰かとあそこで待ち合わせをし、その待っていた人に何かされたと考えるのが妥当やな」

「そうだね…となると、それが誰なのかだけど、誰か知ってる？」

となのはが聞くが全員首を振る。

「なぞやなー」

「ですねえ、みんなそれぞれアリバイがあるし、外部からとも考えにくいし」

皆「うーん」と唸りながら考えていると

「みなさん、ティエリアさんが目を覚ましました!」

扉を開けて先程までティエリアの様子を見ていたキャロが入ってきた。

「あ、ほんとに？」

「はい！フェイトさん」

「ほな、真相を聞きにいか」

「ふう、死ぬかと思った……」

目覚めたティエリアはキャロが出て行った後そう呟いた。

「いったい何が起こったんだ？」

ティエリアは自分でもわけが分からず、記憶を探ろうとしていると

「ティエリアさん！もう起きてもいいんですか」

「というより、かなりうなされてましたけど……」

といった感じにみんなぞろぞろと医務室へと入って来た。

「君達、いったいどうしたんだ？」

説明中

「つまり、なるほど……」

「それでティエリア、何があったの？」

なのは聞いてくる

「僕にも何がなんだかよくわからない。……みんなに渡したいものがあつて、最初にシャマルのいる医務室へ向かったんだが、いないみたいだから、他の人から先に探そうとしたんだが」

ティエリアの記憶は少しずつ蘇ってくる。

「その時、そのバケットに大量に入ったクッキーを見つけて、1つもらい、見晴らしがいいところで食べようと思い、外に出て、クッキーを食べたんだが……その瞬間いきなり視界が黒くなった……これではわからないな」

と、ティエリアは言い終わつたあと皆を見ると、フォワードの4人以外は全員1人の女性に視線が向けられていた。シャマルに向けられていた。

「しゃゝまゝるゝ」

顔は笑っているが内心は本気で怒っているだろうはやて。………だけではなかった

「シャマルさん、少し、頭冷やそうか」

「シャマル、話してーことが山ほどあんだが」

「シャマル、あれほど料理はやめろと言ったはずだが？」

「……………」

なのは、ヴィータ、シグナム、黙ってはいるがフェイトも笑顔で怒っていた。

「あ、あははははは。ちょっとは、練習しようかなーって」

「……………必要ありません（ない）！！！！」「……………」

「ふええええええん！」

と言った感じでとうとう泣き出してしまった。

その後、ティエリアはシャマルの料理のことを聞き、

「あれは毒とかそういうものでなく、1つの兵器に近いな……………」

と言って余計にシャマルの心を傷つけていた

ちなみにティエリアは皆に今までの感謝の意をこめて全員分のスイ

ーツを近くのお店で買ってきたらしく、それを渡すために1人1人探していたらしい。

そのスイーツは全員に行き渡ったが、罰としてシャマルには渡されず、先程のこともあり、シャマルは泣きながら壁の端で俯いていたという。

番外、ティエリア殺害未遂事件（後書き）

アンケートの方、どうもです。

もう少しだけ考えて次話に発表します。

ご意見、ありがとうございます！

8、ホテル・アグスタ防衛戦（前書き）

ようやくテスト終わったー！！！！

正直、赤点の可能性があるのが1つ……………

くよくよせずに結果を待ちます！！（ちなみに英語）

8、ホテル・アグスタ防衛戦

トレイン事件からすでに10日目、ティエリアはというと……

「これがええかな」

「いや、そこまで真剣に考えなくてもいいのだが」

次のミッションはオークションが開かれるホテル・アグスタの警護。どうやらそこでいくつか、取引許可の出ているロストログアが出品されるらしく、それをレリックと誤認したガジェットが来る可能性があると、その警護が言いわたされたのだが内部警備としてティエリア、なのは、フェイト、はやての4人は会場内に入るためドレスとスーツを買いに来ていたのだ

「そんなこと言っちゃだーめ。ちゃんとした良いものを選ばないと」

「そうだよ、身だしなみは大切なんだから」

と言ってくるのはとフェイトに何も言えなくなるティエリアは苦笑しているのだった。

「やれやれだ」

はやて達は自分のドレスを選ぶということで現在ティエリアとは別行動だ。

「君も大変だろう」

と、隣にいる青い毛をした狼、ザフィーラに言う。呼ばれた理由は

「犬にまで荷物運びをさせるとは」

そう荷物運び（ティエリアもだが）

「そこまで大変ではないさ」

と喋ったザフィーラ。普通の人なら驚くところだが、

「君は喋れたのか？」

ティエリアは案外落ち着いていた。

「あまり驚かんのだな」

「魔法という非科学的なものを見せられ、巨大な竜までみたんだ。今さら犬が喋るくらいではさほど驚かない」

「胆が据わっているようだな。……それと、犬ではない。狼だ」

「つと、それは失礼したな」

とそれだけ言ったあと2人？は、はやて達が戻るまでの間、ある程度の世間話をしていた。

そしてその翌日、現在ホテル・アグスタへと向かうためにティエリア達はヴァイスのヘリに乗っていた。そこでこの事件の黒幕のことをはやてが説明していた。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者およびリックの収集者は現状ではこの男」

モニターに白衣の男が映し出される

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者ジェル・スカリエツティの線を中心に捜査を進める」

モニターに映し出された男、スカリエツティの情報を見たティエリアは愕然とした。生態研究と言う名の人体改造、人造魔導師の形成、神の領域を侵してなおも続ける欲望、まさしく自分の世界にあった超人機関と瓜二つだ。次に見せた感情は苛立ちだった。

「ど、どうしたの？ティエリア」

それに気付いたフェイトが話しかける。

「いや、なぜ人はこうも歪んでしまうのかと思ったんだ」

それは昔からの思いである。

「どづいづいと？」

今度はなのはが聞いた

「人は、分かりあえる力を、平和を築くための心を持っているのに、どうしてこの男のような存在が生まれてしまうのか……そう思ったんだ」

それを聞き皆黙りこんでいた。

「だが、一つ確かなことがある」

そう言って再びモニターに移ったスカリエツティを見た。

「この男は、間違いなく、この世界の歪みだ。なら僕は……いや、僕達はこの歪みを破壊しなくてはならないということだけだ」

世界の歪み、それを破壊する。そう、ティエリアの思いは今も変わらない。そこに歪みがあるのなら破壊する。それだけである。

「ティエリアさん……」

「話の腰を折ってしまったな。すまない」

「ええよ。ともかく皆一応覚えといてな」

「……はい」「……」

その1時間後、ホテル・アグスタに到着した。

「しかし、このような服を着るのは初めてなんだが……」

アロウズの上層部が参加していたパーティーへ侵入した時はあの姿であったが、今回はちゃんとしたスーツを着たティエリアがそう咳いた。

「よく似合ってますよ、マイスター」

「ええ。とてもお似合いです。主」

「ありがとうございます。セラヴィー、セラフイム」

自分のデバイスに感謝し、ティエリアは、はやて達と待ち合わせをしているロビーに来ていた。

「さて、ここで待つように言われていたんだが」

と呟き待っている

「ティエリアー」

後ろからなのはの声を聞き、ティエリアは振り返る。

「どうかな？」

「似合つとるやろ？」

なのは、フェイト、はやてはそれぞれおもしろいドレスを着ていた。

「ああ。3人ともかわいいな」

「ぶー。綺麗じゃなくてかわいいですかー」

ティエリアの感想にはやては不満そうだった。

「む、すまない。こういうことはなにぶん初めてなものだから、よく分からずとも、思ったことを言ってみただが」

と謝罪した。実際ティエリアは女性関係のことはまったくもって今も昔も全然ないと言ってもいいほどののだ。

「にはは。いいよ、別に謝らなくても」

「そうだよ。ティエリアが思ってくれた通りに褒めてくれれば、私達も嬉しいから」

「そつやで。それと……そのスーツ姿、とってもかっこええよティエリア」

「……………感謝する」

その笑顔を見て3人とも顔が赤くなっていたのをティエリアは気付いてはいなかった。

ティアナSide

私は外回りの警護をしながら先程までスバルと隊長達の話していた。

それを聞いて私はやはり凡人なんだと理解した。

隊長は全員がオーバースで、副隊長もニアSランク。

他の隊員たちだってそうだ、みんな未来のエリートたちばかり。

あの歳で既にBランク魔導師のエリオに、竜召喚のレアスキルを持つキャラ。

色々と危ないところはあるけれど、潜在能力と可能性の塊があるスバル。

そして……………次元漂流者で民間協力者のティエリアさん。

なのはさん達と同じくオーバースランク、リミッターを付けていたとはいえ、二人の副隊長と互角か、それ以上の力で戦った。あのまま戦っていたらどちらが勝ってもおかしくなかった。

その後リミッターを付けられたというのに、それでも全く衰えた気がしない。

(あの時…)

私はこの前のフォーメーションの訓練を行った時の記憶を思い出していた。

(あの時の最後の狙撃はティエリアさんの防御を打ち破るつもりで結構本気で撃った)

なのにあの人はそれを軽々と防いだ。おそらくあれは力を全然出してない。しかもリミッター付き。

数日前までただの次元漂流者の民間人だった人が既にあそこまで強くなっている。

(なのに私は、全く強くなっていない)

ティエリアさんが言っていた狙撃主には遠く及ばないだろう。

(けど、そんなの関係ない)

そうだ。いつもそうだったんだ。

(私は、立ち止まるわけにはいかない)

そう、あの人、兄さんのためにも……………

ティアナSide 了

「オークション開始までもう少しだが、その間に攻撃される可能性が高いな」

「うん。そうだね」

ティエリアは現在フェイトと二人でホテル内警護を行っていた。

「ねえ、ティエリア」

不意にフェイトがティエリアに声をかける。

「どうした、フェイト？」

「へりの中で言っていたあの言葉の意味って……」

「安心してくれ。歪みを破壊するとは言ったが、殺しはしない。この世界のルールは守るさ。それに、その為の非殺傷設定というものだろう？」

とは言うてはいるがセラフイムの情報制御を使えばそんなものいても簡単に外せる。しかしそれをするつもりはティエリアはなかった。

「ならいいけど、何でいきなりあんなことを？」

「それは……………」

ティエリアは話すかどうか一瞬悩んだがアレルヤのことを話さないようにして話すことにした。

「僕のいた世界に4年前まで超人特務機関というものが存在していた」

「超人特務機関？」

「ああ。その機関では完全なる兵士を造るという目的の超兵計画というものを行っていた。… 肉体改造という行為が」

「肉体改造!？」

「そうだ。それもまだエリオやキャラ口位の子供を」

フェイトは「ひどい！」と言って怒りをあらわにしていた。

「失敗作 と言われた子供は、容赦なく 処分 という名の毒殺を行っていた」

「そんな…」

「しかもそれを、1つの国家が容認していたんだ」

もはやフェイトは何も言えなかった。そんな非人道的なことを国が認めているという行為に

「既にその機関は破棄された。だがスカリエッツィのしている行為はそれとほぼ同じだ」

故にテイエリアは怒った。そんな行為が、この世界でも行われていることに。

「……………1つだけ聞かせて」

「なんだ？」

「テイエリアは、そこで造られた人達のことをどう思ってる」

昔はそんなことを考えたこともなかったテイエリアだが、それでも今ならその質問に答えることができた。

「僕は、どんなことがあれ、そのので造られた者たちを人間だと思っっている」

フェイトは少しだけ黙っていたが

「……ありがとう」

と言った。

「なぜ感謝する？」

「うっん、別に。少し、嬉しかっただけ」

その言葉の意味をティエリアが知るのもう少し先の話である。なぜなら

「主、敵機が接近中、ガジェットです」

「わかった。僕も行く」

「え、でも内部の警護が……」

「敵が来ているのに、黙って見ているというのはできないんだ」

それだけ言うとティエリア外に向かって走り出した。

ティエリアが外に出てみるとすでに敵が近くまで来ていた。どうやらどこかの召喚師が転送したようだ。

「！あれは、セットアップ！！」

気付いたティエリアがすぐさまバリアジャケットを装備して、陰からティアナを狙っていたガジェットを粉碎した。

「全員無事のような」

「あ、ありがとうございますティエリアさん」

(ティエリアさん！中の警護してたんじゃない？)

シヤマルが念話通して通信をしてくる。

「敵が来ているのに、じつとしてはいられないさ。これより、防衛行動を開始する」

(わかりました。ヴィータちゃんも来ますから、協力して叩いてください)

「了解」

それだけ言うと正面のガジェットの方へ向き肩と膝の4つの砲門を前に向け、両手のバズーカも敵に向ける。

(ティエリアさん、どうやら、敵は自動操作から、有人操作に切り替わっています。今までは違う動きなので注意してください)

「わかった。セラヴィー、ティエリア・アーデ、防衛行動に入る」

大型と小型のガジェットから一斉攻撃が来る。

「GNフィールド！」

「展開」

しかしその攻撃はすべて弾かれる。

「ここは死守する！！てこでも動かんぞ！！！！」

すぐさま攻撃を開始する6つの砲撃が飛ぶ。敵はそれを避けるが畏である。

「くらええええええ！！！！」

前面にGNフィールドを展開させ、両肩と両膝の砲撃を同時に放つ。

「す、すごい」

スバルはたったの一撃で苦戦していたガジェットを倒したティエリアに驚いていた。

だが今度は大型がティエリアに体当たりをしてくる。

「その程度では！！！！」

近づいてきた敵に対して両膝のキャノンから腕を出し、魔力刃のビームサーベルで受け止め、切り裂く。

「私だって、負けられない！！！！」

ティアナは焦りを見せていた。するとシャマルから連絡が来る

（もうすぐヴィータ副隊長が合流します。それまで防衛ライン、持ちこたえて）

「守ってばっかじゃ息詰まります！ちゃんと全機落とします！！」

（ちょ、ティアナ、無茶しないで！）

「大丈夫です！スバルクロスシフトA！そこから、フォーメーションJ40！」

「おう！！」

スバルはウイングロード使って、敵を誘導し、敵を引き付ける。

（証明するんだ。特別な力がなくても、才能や、すごい魔力がなかったって・・・）

ティアナはカートリッジを4発もロードする。

「私は、ランスターの弾丸は、敵を撃ち抜けるんだって！」

ティアナの周りにオレンジ色の魔力弾がいくつも形成される。

（ティアナ、4発ロードなんて無茶だよ！）

「撃てます！………クロスファイヤー……シユート！！！！」

複数の魔力弾が一斉に敵へと飛んでいく。それらは敵にどんとどんと当たり破壊する。

「はあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

なおも撃ち続けるティアナ。しかしその一発がそれで、相棒であるスバルに向かっていった。

「！！！！」

二人とも気付いたがもう遅い。その弾丸はスバルに……………当たる前にティエリアが出てGNフィールドで防いだ。

そしてティエリアは何も言わずにその場を去ろうとした。

「あ、あの、ティエリアさん、今のはその、作戦で！私がミスしちゃって……………」

ティエリアはバリアジャケットを一端解き、スバルのウインググロ―ドに着地し、スバルの方へ向いた。

「ふざけたことをぬかすな！！！！！！！！」

ティエリアは激怒した。

「今のが作戦？君は、その違いにも気付かないのか！！」

「う、あああ」

今まで怒っていなかったティエリアが始めて怒ったの見たスバルは

…いや、フォワードの全員が脅えていた。

「ティアナ・ランスター！！！！」

「！！！！」

ティアナの方へ向く。

「今、もし僕が出ていなければ、間違いなくスバルは負傷していた！そうなっていれば、それはすべて君が原因だ！！君の愚かな判断が原因だ！！！！」

「わ、わたしは、わたしは…」

「く、もういい」

再びバリアジャケットを装備して前に出る

「全員、一端下がれ！！！！」

ティエリアは指示を出しながらGNバズーカを連結させる。

(ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、聞こえているか?)

(ああ。聞こえてるぜ)

(聞こえている)

(こちらもだ)

(今からこのポイントに敵を誘導してくれ！)

と言ってセラフィムを使い、情報データを渡す。

(なにするつもりだよ！)

(敵を殲滅させる。敵の誘導が済んだら、すぐにそのポイントから退いてくれ)

(……分かった)

(心得た)

(あたしもやるぜ)

(ありがとう)

念話が終わるとすぐに敵が集まってくるのが見えた。

「さすがだな」

テイエリアは感心しながら、ダブルバズーカを前に向ける。次に、両肩、両膝のキャノンも前に向ける。

「リミッターを付けられているが、どれだけの出力が出る、セラヴィー」

「現状では、最大でも68%、トランザムを使っても、76%が限界です」

「それだけあれば十分だ」

敵はすでに、ほとんどが一点に集中している。

「よし、ハイパーバーストモード」

「モード、ハイパーバーストモード」

高エネルギーの塊の球体がどんどん大きくなり、大型のガジェット
の2倍の大きさになる。

(敵を引き付けた。 退避も完了した)

(了解)

シグナムの報告を聞き、発射準備は整った。

「いくぞ、高濃度圧縮粒子、解放!!」

「「発射!」」

放たれたその光の球体は敵のAMFごと飲み込んでいく。そして光
が消えさり、巨大な爆発を起こし、敵を1機たりとも残さず殲滅し
た。

「敵部隊の殲滅を確認。 ミッションコンプリート」

それを見ていた者たちは皆、ティエリアの力に驚いていた。そして、
それがティアナにさらなる絶望も与えていた。

その後ティアナはヴィータにこつてりと絞られ、なのはからも注意を受けていた。

そして、それが悲劇へとつながる……

「すばらしい！これはなんとすばらしい！……」

「あれが、彼の力さ。とはいえ、リミッターを付けているようだけ
ど」

「ああ、本当に楽しみでしかたがない。君達の世界の技術が、私の知らない科学力が手に入るのが……」

（また、悪い癖が出ていますよ。ドクター）

「ああすまないね、ウーノ。でもこの感情は止められそうにもない
！」

白衣の男、ジェイルスカリエッティは体を震わせ狂喜の笑みを見せる。

「さて、それじゃあ、次は僕らの中から誰かを戦闘に向かわせよう。
きつと面白いものが見れるよ」

「ふふふ、楽しみだよ」

その笑みを見ていた男も笑いだす。同じく、狂喜に染まった顔で……

運命の 때가、今まさに、近付いてきていた

8、ホテル・アグスタ防衛戦（後書き）

どうもです。

敵キャラはサーシエスとブリングで最終的に悩みましたが、敵のバランスも考え、ブリングにしました。でもデバインもです。意見どうもでした。

また機会があればよろしくお願いします。

9、ティアナの過去とティエリアの想い（前書き）

どうもです。気付いたら番外も含めて10話目です。

これからも自分なりにやっていきます。

応援よろです。

9、ティアナの過去とティエリアの想い

ティエリアはホテル・アグスタから戻った後、自分の部屋に入り、ロックを掛ける

「セラフィム、ヴェーダへリンクする。フォローを頼む」

「了解」

ティエリアは眼鏡をとると赤い目は金色の目になる。

「ヴェーダと主ティエリアのリンク率、65%、レベル1から7の情報展開は可能、現状、完全リンク、および我々の世界のイノベイドとの通信不能」

「そうか……データベース、武装、GNHW/B（GNヘビーウェポンノビーム）」

出てきたデータは最終決戦で使用した装備

「了解。情報展開武装」

「情報をセラヴィー、セラフィムへ」

「了解。情報収集開始………
完了」

「ふう、リンク解除、通常モードへ」

テイエリアの目が元の赤い目に戻る。

「セラフイム、トライアルシステムの方は？」

あれから随分経ったので、そのことを聞いた。

「データ収集率43%、内データチェック率42.8%、エラー0.2%現在修復中」

「思ったよりも進んでいないな」

「申し訳ありません」

「いいさ、それより戦力は多い方がいい。いまはGNHW/BOIに集中してくれ」

「やはり、気になりますか？」

セラフイムが言う通り、テイエリアには気掛かりがあった。

「トレインの時もそうだが、今回の時も何かを感じた。いやな予感がする。使えるカードはそろえて損はないだろう」

「分かりました。それではセラヴィーと共に武装の製作に入ります」
それを聞きテイエリアは自分のベットに横になって眠りにつくこととする。

(気のせいなら、思い違いなら、それでいいんだが……)

そんな感情と供に……………

数日後、ティエリアは最近気になっていたことをなのは達に聞いていた

「最近、ティアナが過剰に自主錬をしている……………ミスショットが理由だけではなさそうだが、何があったんだ？」

「それは……………」

ティエリアはティアナの過去を教えてもらった。ティーダ・ランスター、ティアナ兄のことを

「一等空尉、十分エリートじゃないか」

モニターに映ったティアナの兄のデータを見て素直にそう言う。

「うん、でも、エリートだったから、なんだよね……………」

「どついうことだ？フェイト」

ティエリアはフェイトが言ったことがどついう意味かを聞いた。

「ティーダ一等空尉が最後の任務で逃走中の違法魔導師に手傷を負わせることは出来たけど取り逃がしちゃって。その時、犯人から受けた傷が原因で亡くなったの。その時の犯人は地上の陸士部隊の協力もあつたから、何とか捕まえることができたんだけど……………」

……………」

「どうかしたのか？」

「その件で、心無い上司がひどいコメントを言ったの」

「コメント？」

なのはとフェイトは頷く

「犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて局の魔道師としてあるまじき失態だ。たとえ死んでも取り押さえるべきだった、任務を失敗する役立たずは、死んで当然だって」

ティエリアはそれを聞いた後、

「教えてくれて、感謝する。失礼させてもらう」

そう言って逃げるようにその場を去った。

「ティエリア？」

フェイトとなのはは、ティエリアが去った場所を見つめていた。

ティエリアが先程の部屋を出て、廊下を歩いていると横からヴァイスが来た

「お、ティエリアじゃねーか」

「！ヴァイスか」

横から話しかけてきたヴァイスに応える。

「なあテイエリア、ティアナが自習錬をやり過ぎてることは、お前も知ってたんだろ？お前からティアナを止めてくれねーか？俺が言っても効果なしみてーだし」

「……………僕が、ティアナに何か言う資格や権利なんてものはないさ」

「なんでだよ？」

「…………ティアナの過去のこと？」

知っているかどうかを聞いた

「ああ、知ってるぜ」

「今から言うことは、まだなのは達には言っていない。だから秘密にしてくれるか？」

「??別にいいけどよ」

テイエリアは機動六課のメンバーは全員信用ができると思っている。それでもあまり自分のことは話したくはなかった。

「僕は、昔の僕なら、ティアナの兄を侮辱した上官と同じことを言っただかもしれない」

「お前が？信じられねーな」

ティエリアは過去の自分のことを思い出して言う。ヴァイスはそれを見ていないので、当然自分が知っているティエリアがそんなことを言うとは到底信じられないのだ。

「残念ながら、本当のことだ。だから、僕が言えることなんて……」

「そりゃ違うだろ」

「！！」

「昔のお前がどんな奴だったか知らねーが、今のお前とは違うだろ」

ティエリアは大切なことを忘れていた。過去は過去、今は今。過去がどうあるうとも、未来をどう生きていくことが大切なんだということ……

「ふっ、大切なことを忘れるところだった……ありがとう、ヴァイス」

「いってことよ。それより、ティアナの方は頼んだぜ」

「ああ。僕なりにやってみる」

その日の午後、ティエリアは最近ティアナが自習錬をしている場所に行く、既に夜遅くというのにティアナが練習をしていた。

「……あまり気負い過ぎても、力はつかないぞ」

「見ていたんですか？ ティエリアさん」

「ああ。1時間ほど前から見ていた」

ティエリアはティアナの近くに立ち、その訓練を見守る。

「力を手にするために努力するのは悪いとは言わないが、無茶をしすぎない方がいい」

「いえ、少しくらい、無茶しないと強くなれません。凡人なもので」

ティエリアは小さく「凡人か」と呟く。

「この前の任務の時、ああは言ったが、失敗なんて人間なんだから誰でもする。そこまで深く考える必要はない。ただ、そのミスをしてないように考えていけばいい」

「それもあります。だから、力を付けるんです」

ティアナはティエリアの言葉を聞きながら、自習錬を続ける。

「……なのは達から聞いた。兄のためでもあるのだろう。なおさらやめておいた方がいい」

ふと、動きを止めてティエリアを見る。

「あなたに、何が分かるんですか！」

とティアナは少し怒って言う。

「君の過去を知ったとはいえ、君の思いが分かるのかと言われれば、そんなもの他人の僕ではあまり分からないさ」

「だったら……何が言いたいんですか」

「……………僕から言いたいことは2つ、無茶をしないということ。そして…」

ティエリアはティアナに背を向け歩き出しながら言う

「あまり、兄のことで固執し過ぎない方がいい。それだけだ」

どちらもティエリアが4年前に後悔したことだ。

ティエリアはヴェーダに固執し過ぎたせいで、初代ロックオンこと、ニール・ディランディに傷を負わせてしまった。そのせいで、十分に戦えず、死んでしまったこと。そして、最後に交わした言葉の時の時、彼の無茶を止めていればという後悔。そう言う思いを他の人に味わってほしくないからこそ、経験しているからこそ出る言葉だ。

「君は今何も見えていない。自分の本当に見るべきものは、自分で確かめるべきだ」

そう言ってその場を去った。

ティアナSide

「自分の…見るべきもの……そんなもの決まっています！」

兄の汚名の払拭とその夢を叶える。そうだ！ちゃんと私は見えてい
る！

【あまり、兄のことで固執し過ぎない方がいい】

ティエリアさんが言った言葉が頭の中で再生される。それが自分の
思いをすべて否定された気がして怒りが出てくる。

「あなたに、あなたなんかには、何が分かるんですか！！」

大切な人を失ったこともなくせに！！

「そうだ！私は……あなたみたいに、幸せじゃない！！」

もう誰も失いたくない。大切な人を誰も……だから！！

「私は！！」

ティアナは兄のことにとらわれ過ぎており、ティエリアの過去も知
らない。故に、ティエリアの伝えた想いはまだ分からなかった。

ティアナSide了

そのさらに数日後

「まだ続けているのか？」

「ああ。しかも、スバルまで一緒になつてやってやがる」

ティエリアはヴァイスとヘリ調整を行いながら話していた。

「そうか…また、止めに行くさ。それにしても、スバルは……………」

「どうした？」

「いや、なんでもない」

ティエリアはそうは言いながらも若干怒ってはいた。

「そういや、今日はなのはさんがあいつらと模擬戦をする日のはずだ。それが終わった後にでも話せばいいんじゃないか」

「そうだな。ちょうどこちらも終わったし、見に行くとする」

「そうか…って早!!」

「こつこつという作業は元の世界でもやってきたから、慣れてるんだ」

本当のことではあるが、ティエリアの整備していたものはヘリの何十倍も整備の難しいガンダムである。この程度は造作もないのだ。

「じゃあ、こつこつも手伝ってくれよー」

「それは君の仕事だろう？さぼるのはよくない」

と言つてティエリアはその場を去つた。余談ではあるがティエリアが整備した部分はいつもよりよくできていたという。

ところ変わつて訓練場にて

ヴィータ、エリオ、キャロがビルの屋上でスターズとなのはの訓練を見ていた。そして、ちょうど、フェイトが来てすぐにティアナがクロス・ファイヤーを放とうとしていた。

「ん？いつもよりなんかキレがねーな」

「コントロールはいいみたいだけど」

と訓練を見てきたヴィータとフェイトが言う。今度はウイングロードを使つてスバルが特攻を仕掛ける。

（幻影じゃない。本物）

特攻してきたスバルを見て気付いたのははすぐに防御する。スバルは硬すぎる防御に逆に押され、ウイングロードに着地する。

「こらスバル！だめだよ、そんな危ない軌道」

後からくるクロスファイヤーを避けながら注意する。

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますから」

その答えはまったく答えにはなっていない。

(ティアナは？……)

なのはが周りを見渡すと、遠くのビルの屋上から狙撃態勢……いや、砲撃態勢をとっているティアナを見つけた。

「ティアナさんが、砲撃!？」

「うっんあれは……」

「ああ。幻影だ…本物は」

ティアナは幻影を囿にし、スバルの作ったウイングロードを走り、なのはの頭上から小さい魔力刃を使い突撃、スバルもなのはに正面から突っ込みリボルバーナックルを打ち付ける

「一撃必殺!」

ティアナは一気になのはへ向かう。

「レイジングハート、モードリリース」

「わかりました」

そしてティアナがぶつかつた瞬間、巨大な爆発が起こつた。そして爆煙が晴れるとそこには、スバルのリボルバーナツクルと、ティアナの魔力刃を手で受け止めたなのはがいた。

「おかしいな、ふたりとも、どうしちゃつたのかな？」

なのはの言葉を聞き二人は脅える。

「頑張つてるのは分かるけど、模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ・・・」

二人はないにも言わず、ただなのはの言葉を脅えながら聞いている。

「練習のときだけ言うこと聞いてるふりだけで、本番でこんな危険な無茶するんじゃ、練習の意味、ないじゃない」

ティアナは魔力刃をもつたなのはの手の血を見て、スバルは自分が知っているのはと違うのはを見て、それぞれの思考が混乱し始める。

「ねえ、私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる？」

その言葉の後、ティアナは魔力刃を解いて後退し、スバルのウイングロードへ着地する

「私は、もう誰も傷つけないから！！亡くしたくないから！！」

ティエリアはなのはをバリアジャケット内で睨んでいた。

そして、悲劇の戦いが、ティエリアの本気の怒りと戦いが、今始まるうとしていた。

9、ティアナの過去とティエリアの想い（後書き）

さて、次回はついに、なのはVSティエリアです。

正直アニメでこの回を見たとき、なのはがちょっとこえーと思いましたが、

では、次回も見てくださいね。

感想お待ちしております。

10、想いを込めし戦い(前編)(前書き)

どうもです。

タイトル通り前編です。

では行きまーす。

10、想いを込めし戦い（前編）

ティエリアはティアナに言いたいことがあった。

自分の過去を少しだけ話そうと……それでどう思われるか分からないが、それでも、今の彼女には必要なことだと思ったのだ。

「さて、そろそろ訓練場だな」

訓練場へ着くと既になのはとスターズの2人が訓練を始めていた。

「お、もう始まっていたか」

しばらく見ているとスバルがなのはへ、正面からの特攻を仕掛けた。

「……何をやっているんだスバル、あんな軌道では……」

ティエリアの思った通り、その攻撃は弾かれてしまう。もしこれが本当の戦闘なら、スバルはこの時点で死んでいるかとティエリアは思った。

「あれは、狙撃じゃない、砲撃か」

ティアナが遠くのビルから砲撃態勢をとり、なのはを狙うのが見えた。

「なるほど、スバルの正面攻撃はこの布石……いや、違う」

すると砲撃態勢をとっていたティアナが消える。

「幻影、本物は………なっ!!」

ティエリアさらに驚愕した。ティアナはスバルのウイングロードを使い、クロスミラージユからサバイバルナイフ程度の魔力刃をだし、なのはの頭上からの奇襲攻撃を仕掛ける。

「そんな攻撃が通用するはずがない!!」

元々ティアナのポジション的に、接近戦はあまり良くない。確かにどうしても接近戦や、白兵戦をしなくてはならない時もある。それはティエリアも知っている。2人のロックオンも、自分もやってきたことだからだ。

「今やる必要は……」

ないだろうと言う前にティアナが当たった瞬間爆発が起きる。

「おかしいな、ふたりとも、どうしちゃったのかな?」

爆煙が晴れると、そこには2人の攻撃を素手で受け止めたなのはがいた。

(なんだ、この感じは………)

瞬間、ティエリアは肌で感じ取った。いやな予感がすると

「くっ!!」

そしてすぐさま走り出す。すると

「私は、もう誰も傷つけないから！ー！亡くしたくないから！ー！」
ティアナの言葉を聞く。

(ティアナ……………しかし、だからって)

ティエリアにもその想いは分かる。そのために強くなりたいという
気持ちも。

「……………少し、頭冷やそうか」

なのはが攻撃態勢を取る。

(なのは、なにを！?)

もはやティエリアは我慢の限界だった。

「セラヴィー、セラフィム、セットアップと同時にトランザムだ！
！」

「「了解」」

バリアジャケットを装備し、一気にティアナ達の元へ向かう。これ
だけでは間に合わない、そのための

「トランザム！」

「「トランザム」」

本来セラヴィーのトランザムは他の機体と違い機動力ではなく、攻撃と防御に使われるもので機動力に関してはおまけのようなものだ。だが、現状ではそれ使うことで間に合わせられるくらいの機動力はある。

「トランザム解除、GNフィールド!!」

「了解」

ティアナの前に出ると、すぐさまトランザムを解除してGNフィールドを使い、なのはの撃った砲撃を防いだ。

(なんとかだな……)

「なんで、邪魔したのかな……ティアエリア」

なのははティアエリアを冷徹な目で睨み、警戒する。その目はまるで…

(まるで、昔の僕のようにだ)

ティアエリアもバリアジャケット内でなのはを睨んでいた。昔の自分を、否定した目で。だがそれをすぐにやめて、

「ティ、ティアエリアさ…!」

後ろで名前を言おうとしているティアナにバズーカを向ける。もちろん撃つ気は微塵もないが、模擬戦を見ていたフェイト達も、睨んでいたなのも驚愕の顔をする。

「ティアナ・ランスター!!君は自分がどれだけ愚かなことをした

か、分かっているのか？」

ティアナは震えながらティエリアを見る。

「君は目先のことばかりに集中し、周りを全く見ようとしてもいい。僕は言ったはずだ、自分の本当に見るべきものは、自分で確かめるべきだと……！」

ティアナはその言葉に反論する。

「私は見えています！！兄さんの汚名を……」

「それは単なる愚かな考えにすぎない」

それがさらにティアナを感情を逆なでする。

「あなたなんかは何が分かるんですか！！大事な人があなたにはいるんでしょうけど、私は……」

「言っていないかったか？君の過去を知ったとはいえ、君の思いが分かるのかと言われれば、そんなもの他人の僕ではあまり分からない」と

「だったら……！」

「だが、君が行った行動はどうだ？他人どころか、自分の命も見えないあの作戦、今とろうとした行動。もし、あのまま君が撃っていたらスバルも危なかったぞ」

「……！」

ティアナは何も答えられなくなる。

「時には無茶をするのは大事だ。そうでなければ、守る者も守れない。…だが、今は無茶をする時か？」

「私は……………」

「スバル・ナカジマ！」

もう片方に持ったバズーカを今度はスバルに向ける。

「君は、君は一番ティアナと近くにいなながら、なぜ彼女の無茶を止めなかった！気付いていなかったとは言わせないぞ！！」

「わ、私はただ…………ティアアの、パートナーだから……」

「なら、君はティアナが無茶をしすぎて、戦闘中に死んでもいいということか？」

「それは…………！！」

「違うのだろうか？なら、君はそこで止めるべきだったんだ。ティアナの行き過ぎた無茶を……」

ロックオンもまた、親の仇に集中し過ぎ、無茶をして死んでしまった。それを止めることができず、ただ見ていた自分を恨んだことも、ティエリアには一時期あった。

だがそれを乗り越え、今ティエリアはここにいる。その過去がある

からこそ、行き過ぎた無茶が何を生むか分かるのだ

「時には無茶をすこともある。だが、それで無茶をしすぎて自分が倒れるようなことになっては本末転倒だ。そう言うことを僕は言っているんだ」

「……………」

スバルは黙って話を聞いていた。どうやら分かったようだ。

「だが、それよりも僕が許せないことがある。それは……………高町なのは！…！」

今度はすべて武装をなのはに向けて叫ぶ。

「……………！」

なのは再び先程と同じ目をして、睨む。

「正直、僕はティアナのした行為は、今言ったように、君が思っているように、間違っていたと思える」

「ならどうして…止めただけじゃなく、私に武器を向けてるの？」

「そんなものは決まっている」

ティアエリアははっきりと言う。

「君のやり方が間違っているからだ」

「どこがかな？私は、二人の教官だから……間違ってることを正
しただけだよ？」

「……僕は、君のそのやり方を認めない。どれだけのことがあるう
とも、これだけは言える。今の君は、そこで間違ったことをしたス
バルとティアナ以下だと」

本来こんなことはティエリアが言えたセリフではない。ティエリア
は何度も自分の仲間を、自分の思うようにいかなかった、ふさわし
くなかったと理由で殺そうとした。機密保持と言う名目で。

なのはのした行為は、それによく似ている。自分の教え通りにしな
かった。だから撃墜した。

「君は、そんなことすら気付かないほど愚かなのか！！」

だからこそ、自分と同じようにだからこそ、今のティエリアがそれ
を見ると腹が立つのだ。

「てめえ！！さっきから言いたい放題言ってんじゃねえ！！」

観戦していたヴィータが急に大声を出した。

「おまえに、なのはの何が分かるんだ！なのはに何があったかもし
らねー癖に！」

「……彼女になにがあったかなど、見ていない僕が分かるはずもな
い」

「だったら！！！」

そこに容赦なくティエリアは言葉の剣を突き刺す。

「だが、君は、今なのはが行った行為が本当に正しかったと言い切れるのか？」

「!?!」

「言えないだろう？それが答えだ」

「けど・・・!」

「いいよ、ヴィータちゃん」

なのはがまだ何か言おうとしたヴィータを止めてレイジングハートをティエリアに向ける。

「……………どうやら、今の君に何を言っても無駄のようだな」

ならばとティエリアは武器を構えなおし、

「こちらも全力で君の相手をし、その歪んだ考えを消滅させる。…

…モード、GNHW/B)GNへビーウエポン/ビーム)」

「「了解」」

ティエリアが光に包まれる。それが消えると、両腰には2門のGNキャノンが追加され、さらに両肩と両足にはGNフィールド発生装置がある。

「まだ武装があんのかよ！」

「す、すこそう…」

ヴィータ達はその武装の数に驚きを隠せなかった。

(ティアナ、スバル、フェイト、ヴィータ、エリオ、キャロ、すぐ
にここから退避しろ)

ティエリアは念話を使い、呼びかける。

(近くにいて、巻き込まない自信がない)

「……………!!」「……………」

スバルはティアナと共にすぐに退避し、フェイト達が退避したのも
見て安堵した。

「さあ、いくぞー!!」

その言葉と同時に全砲門を同時発射した。

「なんて威力だ」

遠目で見ていたヴィータ達はそのすさまじい威力に呆然とする。

それもそのはず。たった一撃で、正面にあった廃ビルが消滅したの

だ。

GNHW/Bは戦艦をも一撃で破壊する武装、しかしこれでもまだまだリミッター付きだ。

テイエリア最初の一撃を放ったあとは強力な砲撃を行わず、それぞれの武装をタイミングをずらして交互に砲撃を行っている。

(速いな、全く当たらない)

砲撃は何度か当たりかけたがそのたび避けられ、あるいは防御され、直接的なダメージは与えられていない。

(かといって、チャージ攻撃をすれば隙が生まれる)

そう、故にこういう戦い方をすることしかない。

「デイバイン・シューター!!!」

「く、GNフィールド」

なのはの誘導型魔力弾を強化されたGNフィールドで防ぐ、この繰り返しだ。

「デイバイン・バスター!」

カートリッジを3発ロードして砲撃放つのは。

「ぐ、ぐああああ」

さすがにその攻撃には耐えられずGNフィールドを纏ったまま押しさ
れ壁に激突する

「やはり、強い」

今まで見てきた戦闘でもまったく無駄のない卓越した動きと砲撃の
タイムラグのなさで機動力。

ティエリアが勝てるのは防御と攻撃力くらいのものだ。

「これが、エースオブエースの力か」

GNバズーカ？は先ほどの衝撃で壊れてしまい、GNフィールドも
強化されたおかげで何とかカートリッジを使われても防げるが、勝
負は圧倒的になのはが有利である。

「なのは、君はまだ分からないのか？」

ティエリアは再びなのはに話しかける。

「君は、君が教えたかったことは、教えるべきことは、他にあった
んじゃないか？」

しかしその声はなのはには届かない。

（しかたがない、セラフィム、すべてのブラックボックスを使う）

「お待ちください。トリアルシステムはまだ未完成です。今使っ

ても、せいぜいプロテクションを消すくらいにしか使えませんが、使ったあとはしばらく使えなくなりますし、データも1からやり直します」

（構わない、やってくれ）

セラフィムは正直反対だったが……

「はあ、主の決めたことです。私はそれに従いますよ」

（ありがとう……なら、一気に行くー！！）

ティエリアはGNフィールド張り攻撃を防御しながらなのはに近づく。

「これで終わり。ティエリアも、少し、頭冷やそうよ」

なのはは、カートリッジを4発ロードする。それを止めようとティエリア攻撃をしようとするが、誘導型魔力弾を使われ、隙を作られない。

「デイベイン……」

（タイミングを僕に任せてくれ）

「了解」

そしてなのはは、とどめとしてティエリアの両腕と両膝をバインドで止める。両膝に関してはGNキャノンごと封じる。

「くっ!!」

これに関してはティエリアは予想外だった。だが同時に……

「バスター!!」

(いまだ!!)

勝利も確信していた。

10、想いを込めし戦い（前編）（後書き）

デイベイン・バスター（カートリッジ×4）

どう対処するのか？

では、次回もお楽しみに。

11、想いを込めし戦い(後編)(前書き)

どうもです。後篇です

テスト赤点なしでした＼(^O^)/

11、想いを込めし戦い（後編）

「デイバイン・バスター！！！！」

なのはの放ったカートリッジで強化されたデイバイン・バスターが
ティエリアに一直線で向かう。

「くっ！！」

バインドによつて動きを封じられ、武器に関してはGNバズーカ？
はなく、膝のキャノンは使えず合計4つの武器がない状態。

「圧縮粒子、解放！！」

「発射」

しかし黙って攻撃を受けるティエリアではない。前面にGNフィー
ルドを張り、残った肩と腰のGNキャノンを使い砲撃を集中させる。

「ぐ、ぐううう！！」

2つの砲撃は均衡を保たず、少しずつティエリアが押されていく。
そこにダメ押しとばかり、なのはがさらにカートリッジをロードす
る。これにより5発、ティエリアが放った砲撃を吹き飛ばす。

「GNフィールド全開！！」

「展開」

展開されたGNフィールドに止まるが、すぐにそれを突き抜けて命中する。

「ぐあああああ!!!!」

爆煙がティエリアの周りを覆う。それが晴れたとき、皆が見たのは白く巨大なフォルムのバリアジャケット、

.....

セラヴィーが地上へと落下していく姿だった。

「「「「「ティエリアさん!!」「」「」

訓練場から離れた場所で二人の戦いを見ていたフォワードの4人とヴィータとフェイトは、なのはが放った魔力弾がティエリアに当たったのを見て全員心配していた。

「なっ!まずいあいつ気絶してやがんだ、墜落してる!!」

ヴィータは焦り出し、周りも焦る。

「あれ?」

フェイトを除いて。

「どっしたんですかフェイトさん!ティエリアさんが!!」

エリオはボーっとしているように見たフェイトに言う。

「みんな、よく見て、あのバリアジャケット」

そう言われ全員モニターを確認する。

「「あ！」「」

それに最初に気付いたのはヴィータとティアナである。

「どうしたのティアナ？」

スバルは気付かないため聞く。

「よく見たなさい、ここ」

と言われてティアナが指した場所はセラヴィーの背中。

「あ、後ろの黒い部分がない！」

「！！ほんとだ、でも、どこに？」

皆が疑問に思う中、事態は大きく変わる。

「なっ、あれは！」

皆が見たものは………体のほとんどが黒い機械、いや、バリアジャケットがなのは後ろからプロテクションごと蹴り飛ばしている姿だった。

(ここだー！)

攻撃を受けるタイミングでティエリアはセラフィムの力を発揮する。トランザムを使い、セラヴィーから瞬時にセラフィムを切り離し、素早く変形する。

「バリアジャケットセラフィムに転送」

そしてティエリアの身体をセラフィムに転送させトランザムの力と爆発の勢いで一気にその場を離れる。

(今度はこちらの番だー！)

とばかりになのはの後ろに回り込み、粒子の温存のためトランザムを解いてなのはに蹴りを入れる。

「!?!」

いきなりなことだったがとっさにプロテクションを出すのは。しかし、一足遅く、プロテクションごと吹っ飛ばされ、壁に激突した。

「どうした？それで終わりではないのだろうか？なのは」

ティエリア出てきたのはをもう一度バリアジャケット内で睨んでいた。

「ど、どういふことだよ!?!」

ヴィータは訳が分からなくなっていた。

「そうか！」

フェイトは何かに気付く。

「分かったんですか？フェイトさん」

キャロが聞く。

「うん。私達は、今までティエリアが2つのデバイスを同時に起動していたから、あれは2つで1つなんだって勘違いをしていたんだよ」

そう、両方は最初から別々のデバイス。

「背中のあるは、ティエリアのもう1つのバリアジャケットだったんだよ」

皆が驚く。まさか2種類のバリアジャケットを使うとは思ってもよらなかったのだろう。

そしてそれはなのも同じだった。

しかも、確実にあの砲撃で仕留めるために持っていたカートリッジを全て使った攻撃だけに焦ってもいた。

「すごいね、2つのデバイスを持つてたのは知ってたけど」

なのはの褒め言葉にも反応せず、ティエリアはじつとなのはを見つめ、そして言う。

「君は、本当は分かっているんじゃないのか？」

ティエリアは戦っている内に分かった。

「自分の本当にやるべきことが何なのかを」

「黙って」

「そうやって自分の想いを無意識に、いや、もしかすると意識して黙り続けているから、わかりあえない」

「黙っ…！」

気付けばティエリアはなのはの目の前にいた。そしてその体は黒色から赤く輝いている。

「プロテクション」

レイジングハートが自動で防衛行動をとる。ティエリアはプロテクションに手を置く。

「君は今、力で押さえつけているのと同じだ！それでは何も変わらない！！」

「なら…！なにが必要だっていうの…！」

「分かっているんだろ、君にも！」

「!?!」

「終わらせる……セラフィム！」

「トリアルシステム起動」

セラフィムのバリアジャケットの胸の部分が動き出し、もう一つの顔を見せる。すると周囲に光が舞う。

「なんだありゃ？」

「綺麗……」

「す、すごい」

「……」

地上で見ていた6人もその光景に見とれる。そして

「なのはのプロテクションが……!?!」

フェイト達はなのはが自分から解いたとは思えなかった。

「あの力……なんなんだ？」

ヴィータはティエリアのトライアルシステムのことを見ていたためか、なのはの背後からくるものに気付くのに遅れる。

「どうしたの？ レイジングハート!!」

「わかりません、プロテクションのデータが……一瞬ですが、いきなり消えてしまい」

その事実には驚くがすぐにその場を離れようとする。しかし

「なっ!!」

既に遅かったいつの間にか先程落ちたセラヴィーが隠し腕も出し、なのはの両手両足をつかみ動けなくしていたのだ。

「これが、セラヴィーとセラフィムの力」

そしてティエリアの手がキャノンモードになる。

「僕の勝ちだ、なのは」

しかしそれを撃つてしまえば何の意味もない。故にティエリアは撃たずに言葉をかける。

「君が本当にすべきことは、自分の想いを相手に伝えることだ……想いは言葉にしなければ伝わらない。人は、僕らはみんな未完成だから」

人と人がわかりあう。その為には対話が必要だということは、今ま

で戦い続けてきたティエリアだから言えることなのかもしれない。

「ティエリア……………」

なのは唐突に泣きだした。

「うめ……………」

「謝る必要はないさ。…………昔の僕は、君以下の男だった」

「え?」

「いつか話すさ…………それより、君は先に、ティアナに言うべきことがあるんじゃないか?」

「…………うん」

それを聞きティエリアはほっとしセラヴィーになのはを離すよう命令する。それと同時に、

「ぐっ」

身体に痛みと疲れが生じる。

「ティエリア!」

なのはが駆け寄る。

無理もない。爆発のダメージは一応あるし、トランザムは魔力を大量に使い、トリアルシステムは未完成で使ったため使用する魔力

の調整もできなかったのだから。

「まったく、無茶をするなど言いながら、てめーが無茶してんじゃねーよ」

下から来たヴィータ支えられて言われるティエリア。

「まったくです。マイスターは他人のことに關しては敏感ですが、自分のことはあまり分かっていませんからね」

「主は、少しは自分自身のことも見えてほしいものです」

とデバイスにも言われさすがに苦笑するしかないティエリアだった。

「……それで、あれりゃ一体なんだったんだ」

あれと言うのはトライアルシステムのことだというのはすぐに分かることだ。

「……話すことはできない。と言いたいところだが……」

これは言い逃れができないと思ったのか、ブラックボックスの情報を教えようとすると、

「はあ、別におめーが喋りたくなくなってからでいいぞ」

予想外の言葉がきたので

「いいのか？」

とティエリアは聞いた。

「お前はなのはを止めてくれたからな、その借りだ。けど、一応はやてには連絡しとくからな」

「……………感謝する」

その後の話をしよう。

ティアナは疲れが出て眠り、起きた後はなのはが自分の過去を皆に教えた。

ただの小学生だったなのはが魔法にかかわり、ロストロギアを集めるため戦ったこと。

その際、なのはとフェイトが昔、フェイトの親の関係で2人が戦うことになったこと。

闇の書事件と言われる事件で、当時はまだ安全性がなかったカートリッジシステムを使っていたこと。

どんどん無茶をし8年前、任務中に謎の敵の襲撃をうけ、死にそうになったこと。

そんな悲劇を他の人にも味わってほしくないからこそ、無理をしない、基礎中心の訓練をしていたこと。

過去を教えた後、ティアナとなのはの2人が話していたのをティエ

リアは少し離れた木陰にもたれて聞いていた。

「……セラヴィー、セラフィム」

「どうなさいました？マイスターティエリア」

「何か気になることでも？」

ティエリアは悩みを自分のデバイスに言う。

「彼女の過去を聞いて、僕は何も喋ろうとはしない。それなのに彼女たちは僕を許す。…このままで、いいのだろうか？僕の過去も話すべきなんだろうか」

「私は、反対です。許されたいとは思いませんが……彼女たちが、我々のやってきたことを見て許すとは思いません」

「自分も反対です。しかし……最終的には、あなたが決めることです。マイスター」

セラフィムとセラヴィーは共に反対のようだが最終的にはティエリアが決めるようにと言う。

「僕は……」

しかしその考えを決める前にアラートが鳴る。

「考えるのは後にしよう。今は目の前の敵に集中する」

「「了解」」

東部海上付近にて2つの影があった。

「さーて、はじめるさね」

「……………」

1つは少女の声、もう1つは何も喋らない

「いつも思っけど無口よねー」

「……………任務に集中するだけだ」

その男の声を聞き「はいはい」と適当な返事をする

「さーて、後は獲物が来るのを待つばかり」

少女の顔は見えないが笑っているのは間違いない。

「まってなさい、テイエリア・アーデ……………」

憎しみが込められた言葉が発せられる。

「……………目的を忘れるな」

「分かってるわよ。でもどうせ、やることは最終的には変わらないんだから」

「……………まあ、いいが」

2つの影は複数のガジェットを連れて海の上を飛ぶ。オレンジ色の光を出しながら。

敵がついに動き出し、その姿を現そうとしている。

テイエリアの運命が、

彼らの計画が、

本格的に動き出そうとしていた。

11、想いを込めし戦い（後編）（後書き）

どうもです。

なのはの過去を教えるのと敵が出てくるのをずらしました。

その方が話ができやすいので。

さて、ついに次回、ティエリアが奴らと会うことに……

次回、お楽しみに

唐突ですが質問です。

TVにでたティエリアも含むイノベイドの名前の意味を知っていたら
教えてください。

よろしく願います。

12、現れし歪み（前書き）

用事が出来たのでこれからしばらく書くことが難しくなるかもしれませんが応援よろしくです。

では始めます。

12、現れし歪み

敵ガジェットドローン？型が3、40機程が東部海上で旋回しているとのこと。

しかし、その付近にはレリックの反応どころか何かしらの施設も、船もない。つまりはただの**圏扱**いだ。

「敵の目的は、僕たちの戦力を見ることが目的か」

ロングアーチからの情報と映像を見てティエリアはすぐに状況判断をする。

（だが、なんだ？この感じは……………）

それと同時に不可解な…いや、どこかで感じたことのある感覚を受けながらも、ティエリアはヘリポートに向かっていた。

ヘリポートに着くと既になのは、ヴィータ、フェイト、シグナム、そしてフォーワードの4人もほぼ同時に来た。

「今回は空戦だから、出撃は私と、フェイト隊長、ヴィータ副隊長、シグナム副隊長の4人で出るよ。みんなはロビーで待機。ティアナとティエリアは、今回は待機から外しておくから」

「ちょっと待ってくれ。僕は出られないのか？」

出撃する気満々だったためかその言葉に反応した。

「ティアナは疲れがまだ溜まっているだろうし、ティエリアの方も疲れてるんだし」

「いや、僕は……」

疲れてはいないと言おうとするとティエリアのデバイスが反応した。

「いえ、マイスター。Msなのは言う通りです」

「そうです。あなたの悪い所は他人のことに关しては敏感なのに、自分の無茶にはとことん鈍感なのところです。ですから、私が今回Msはやてに連絡してあなたを出撃させないように頼んだのです」

「いつの間に……」

しかしティエリアはデバイス達の心遣いには感謝した。

「……………分かった。今回は出ないでおく。それに、君たちだけでも充分に殲滅できるだろう」

「うん。それじゃ、出撃を……」

<こちら、ロングアーチ。ガジェットが旋回してる周辺に、未確認の敵を発見！数は2>

突然シャーリーから連絡が入る。

「未確認の敵？新型かな」

と眩くなのは。

<映像を出します>

と言い映像を映し出すと、

「なんだ、こりゃ？」

「ガジェットじゃ、なさそうだけど」

ヴィータとフェイトは今まで見たことのない敵の姿をまじまじと見る

そこに映し出されていたのは丸みをおびた両肩で、左側に関しては縦のようなものがあり、脚の先から手の先まではスリムなフォルムをした同方の緑と紫色のロボットであった。

「敵の新型でもなさそうだが……」

シグナムはそれをじっと見て眩く。

<いえ、少し調べましたが、生体反応があります。あれはロボットではありません。バリアジャケットかと思われます。>

「スカリエッティの方に魔導師の協力者がいてもおかしくないけど……」

なのはもその敵の姿を見る。

その映像に映し出されたものを皆まじまじと見ていた。……ただ一

人を除いて。

「セラヴィー、セラフィム……」

「仕方ありませんね」

「不本意ですが……」

どうやらティエリアのやりたいことを理解したのかセラヴィーとセラフィムは納得する。

「セットアップ」

「了解」

そしてすぐさまバリアジャケットを装備する。

「ちょ、ティエリア!？」

なのはや他のメンバーはいきなりティエリアがした行動に驚く。

「セラフィム」

「了解、変形後バリアジャケットセラフィムに転送します」

途端セラフィムユニットが動き出し、その形状を変えていく。

「すごい。あんな感じに変形してたんだ」

スバルはその変形を見てそう呟く。他のメンバーも何も言わないが

同じのようだ

「セラフィム、急いで行く、セラヴィーは後で追いついてくれ……
トランザム！」

「了解」

トランザムを使い目標地点へと飛ぶ。その時ティエリアはなのは達が何か言っていることは気付いていた。しかし、今は目の前にある現実をどうしても確かめたかったのだ。

「ティエリア、まって!!」

なのはが止めるがティエリアは無視して目標へと向かった。

「は、速すぎだろ」

ヴィータ達はトランザム状態の機動力とスピードに驚きを隠せないでいた。

「ともかく早く追いかけるよ、ヴァイス君！」

「了解です、なのはさん」

ヴァイスはすぐに飛ぶ準備をし、なのは達もへりに乗る。

「自分も行きます」

と言ってきたのはセラヴィーである

「おい、セラヴィー！お前らはいったい何なんだ！！何でティエリアはいきなり……」

「その質問には答えられませんMsヴィータ。しかし、今はマイスターを追いかける方が先かと」

「てめえ、もう我慢なんねえ……」

「まって、ヴィータちゃん。いまはセラヴィーの言う通りだよ」

なのはに止められてヴィータは下がる。

「でも、セラヴィー。これが終わったら話してくれないかな？」

「……………それは、自分に言われても困ります。マイスターティエリアに言ってください。自分の方からも一応言っておきます。」

「うん、わかったよ」

なのはは、いや、ここにいる全員がティエリアのことを気にし、心配していた。

しかし、セラヴィーはティエリアの命の心配もしていたが別の心配もあった。それは、ティエリアの正体が知られてしまうことだった。しかし、今はティエリア援護を最優先とした。

ティエリアはトランザムを使い猛スピードで目標地点に向かう。本来なら万全の状態としてセラヴィーで来るところだが、ティエリアはすぐに確かめたかった。故にセラヴィーよりも機動力のあるセラフィムを使うことにしたのだ。

(ティエリア、無茶しちゃあかん！それに、ティエリアに出撃命令は……)

「すまない、だがこれだけではどうしても確かめなくちゃいけないんだ」

(せやけどー！)

「後である程度説明する」

ティエリアは、はやての言葉も聞かず進む。

(本当に彼らなのか？)

疑問を持ちながら進んでいるとガジェットを発見する。

「このようなときに……！」

トランザムを解除し両腕をキャノンモードにして敵を攻撃する。

なん機かに当たったが、攻撃もせずガジェットは進んで行く。

「逃がすか……！」

敵が前にいるのなら、叩けるだけ叩くつもりだった。しかしそれを

テイエリアはしなかった。

「やはり……………」

何かを感じ取り、上を見上げると……………そこにいたのはテイエリアがよく知る機影。

イノベイド達が使っていたガラスゾの姿だった。

「まさか、君達は」

テイエリアは息をのむ。そして、

「そう、ヒリング・ケア」

「……………ブリング・スタビティ」

2つの声は夜空に響く。

「「イノベーターよ(だ)」「」

その映像はヘリの中のヴァイスも、管制室にいるはやて達も、テイエリアの見逃した敵を倒していたなのは達も、待機していたフォワードのスバル達も見ていた。

「……………まさか、本当に君たちがこの世界に来ているとは」

「まあね。あたしすら驚いたのよ、この世界に来た時は」

テイエリアはまったく殺気を殺さずに目の前にいる敵を睨んでいた。

「まあ、今はジェイル・スカリエッツィのやつと協力してはいるんだけどね」

ヒリングがスカリエッツィと行動していることを告げる。

「やはりスカリエッツィと………君達の目的はなんだ！」

「そんなの教えるわけじゃない。…と言いたいんだけど、特別に教えてあげるわ。ただし、」

と言ってティエリアを指さす。

「あんたが私達と手を組むことが条件よ」

「断る！」

即座に言い放った。

「即答ね」

「当然だ。スカリエッツィなどと言う歪みと行動する気などおさらさない。それに、君たちがここに居るのなら、彼も…」

一呼吸を入れ、その名を言う。

「リボンス・アルマークも、居るのだろうか？」

「……ええ、いるわよ」

「いいえ、ほんとうよ。なぜなら……プロジェクトF」フエイト

「フエイト……まさか!」

「そうさ、あなたが協力しているあの金髪の女こそが、その最初の人造生命体」

テイエリアはいまだに信じられないでいた。

「まあ、あたしから言わせてもらえば、単なる失敗作のゴミだけどね」

それを聞いた瞬間テイエリアは自分の怒りを止められなかった。

「貴様ああ!……!」

腕をキャノンモードにして攻撃を仕掛けるがそれを簡単に避けられる

「交渉は決裂ね……なら、遠慮なく殺さしてもらっわ!」

「もとより、そのつもりだろう!……!」

再び腕を出し、魔力刃のビームサーベルを出して接近戦を仕掛ける。

「甘いさ……!」

それを避け、後ろの左右からGNバルカンを連射してくる。

「ぐ、ぐああああ!……!」

防御機能がないセラフィムではそのダメージが直に入ってくる。

「終わりよ！！ティエリア・アーデー！！」

敵も接近戦をしようとする。……しかしそれは、横から来た魔力弾によって止められた。

「ち、いいところなのに」

その攻撃はガジェットを殲滅し終え、ティエリアを援護しにきたなのは達によるものだった。

「あちらは私一人でいい。十分だ」

ブリングはそれだけ言ってなのは達の元へ飛んだ。

「了解。任せたわよ、ブリング」

「やらせるか！」

ティエリアはそれを追いかけてようとすがヒリングに妨害される。

「あんたの相手はあたしだって！！」

「くう！」

状況はティエリアが圧倒的に不利だ。そこに、

「マイスター！」

セラヴィーが上からヒリングを蹴り飛ばしてティエリアに近づく。

「セラヴィー！よし、バリアジャケットセラヴィー！」

「了解、バリアジャケットセラヴィーに転送」

ティエリアの身体をセラヴィーに移し、セラフィムはもとの形となつてセラヴィーの背中とドッキングする。

「ここからが本番だ！」

ティエリアはGNバズーカを敵に放った。

一方なのは達は4対1の状況だというのにそれでも互角と言ったところだった

「く、強い！」

思わずそう愚痴をこぼしてしまうフェイト。そして敵の蹴りを喰らい海上へ落下する。

「フェイトちゃん！」

「大丈夫。それより、速く目の前の敵をなんとかしないと」

なのは達は正直驚いていた。目の前にいる相手はリミッターをつけ

ているとはいえ、4対1で戦っているのにまったく言っていないほど歯が立たない。

「レバンティン」

「カートリッジロード！」

シグナムがカートリッジをロードすると剣は炎に包まれる。

「紫電一閃！」

それを振り上げて切りかかる。しかしそれは、敵の右手の指から出た5つの魔力刃によって止められる。

「なに！！」

止められたことに驚くがそんな間もなく、まるで爪のような形状をしていた魔力刃が1つにまとまり一本の魔力刃となり……レバンティンを両断された

「！！」

敵が追撃にかける前にシグナムは下がる。

「もらったぞ！！」

ヴィータは後ろに回り込み、すでにカートリッジをロードしている。

「ラケーテン・ハンマー！！」

サイドに着いたブースターを使い、勢いと火力を高めて攻撃する。しかし、

「なっ！こいつは、ティエリアが使ってた！」

GNフィールドを展開されて防がれる。そして、そのまま押されて弾き飛ばされる。

「はあああああ！！！！」

フェイトがかさず近付いて攻撃するが避けられる

「デバイン・シューター！」

なのによって放たれた誘導弾は吸い込まれる様に手に命中するがこれもGNフィールドで防がれる。

「無駄だ、君達のような単なるデータと、人形、愚かな人間風情では我々には敵わん」

先程まで黙って攻撃していた敵が喋ったので皆驚くが、なのはがかさず聞く。

「あなたは、あなた達は何者なんですか！」

その質問にゆっくりとした感じで答えた

「イノベーター、人類を導くものだ」

ティエリアはセラヴィーを使い戦っているが状況は良い方ではない。

「くそ、強い！」

「ほらほら、遅いんだよ！」

GNバズーカ？はすでに切られており、現在は使えない。さらにヒリングは攻撃を続ける。

「ぐうう、そちらの方が、機動力があるからといって」

とは言うが実際この状況で不利なのはティエリアであるのは間違いない。なかった。

「だいたい、あんたおかしくない？何であんな人形ごときのことです怒ってるの？」

「だまれ！！！」

ティエリアすかさず肩のGNキャノンを使いながら離れる。

「それに、戦いながら教えたでしょ、あそこにいる奴らは人間ではなく単なるデータ。そんなもん守るなんて、どうかしてるわ」

攻撃を避けてながらティエリアに近付いて切りかかる。

「これでほんとに終わり」

そしてそれを振り下ろす前に、ティエリアの肩のGNキャノンから手が出てビームサーベルを握り防ぐ。

「隙あり！」

そして今度は両膝のキャノンから手を出してビームサーベルで切りさく

「ぐああ！くっ、こいつううう！！！！」

クリーンヒットしなかったもののダメージをヒリングは受けた。

「くそ……！！！」

ティエリアは知らないことだがこのときブリングから撤退指示が出たことを告げられていた。

ブリングは結局一撃もダメージというダメージを受けず、撤退をしようとしていた。

「命拾いしたな」

それだけ言うと猛スピードで撤退した。

「逃がすか！」

ヴィータは追いかけてようとする。

「追いかけないで！今はティエリアの方を！！」

「それにたとえ追いついても、今の私たちじゃ勝てないよ、ヴィー
タ」

しかし、なのはとフェイトに止められてそれをやめる。

「急ぐぞー！！」

「くそ、いったい何なんだよあいつらはー！！」

ティエリアと戦っていたヒリングはというと

「どつやら撤退命令が出たみたいだから、今回はここまでよ」

そして背を向けて去って行った。しかし、ティエリアは追うことは
しなかった。

（おそらく、奴らもトランザムは使えるはずだ。今追えばやられる）

現状ティエリアはトランザムの使い過ぎで疲弊しており、さらに切
り札のトライアルシステムはつかえない。何より…

「ティエリア！」

「……………」

敵が去って行った遙か彼方を見つめてはいるがティエリアはちゃんと気付いている。

「あの、ティエリア……」

「わかっている。……君達は別に何も言わなくても良い。だが、」

このとき、ティエリアはすでに決めていた。

「すべてを話そう。彼らが何なのか、僕が何をしてきたのか、彼らが何をしてきたか、そして……」

振り返りその後続く言葉を喋る。

「僕が、何者なのかを」

「いいものを見せてもらったよ。あれが、イノベーターの力」

ジェイル・スカリエッティはまるで純粋な子供のような眼で戦闘映像を何度も繰り返し見ていた。

「いえいえ、我々の力はあるなものではないですよ」

薄い董色をした少年が声をだす。

「あら、リバイブさんて随分自信過剰なんですね」

眼鏡をかけて、胸には？という数字が付いている少女いう。

「事実なのでから当然です。我タイノベーターは人類、いや、すべての生物の頂点に立つ存在なのでから」

何をいまさらという感じでリバイブ・リバイバルは答える。

「そう、僕たちは人類を導くために生み出された、言わば上位種だ」

薄い緑の少年、リボンス・アルマークが答える。

「そして僕は上位種の中でも最上位種、神そのものなんだ」

歪んだ瞳はすべてを見下しているかのようにである。

「……まあ、安心すればいいさ、君達も、いずれは上位種となれる」

眼鏡の少女は顔を歪ませリボンスを睨んだがその言葉を聞き、笑みが浮かぶ。

「ふふふ、楽しみだよ、本当に………そのためにも我々も協力をしよう」

スカリエッツィの言葉を聞いたリボンスは

「期待してるよ」

と心にもないことを言った。しかし、そんなことはスカリエッツィは気にもしていない。利用されていることなど最初からわかってい

るのだ。

彼にとって研究こそがすべて。そして自分の知らない技術で創られた存在を見た瞬間に彼の研究者としての歪んだ心をさらに高ぶらせているのだ。

もちろんそれはリボンスも気付いている。

互いの利害が一致している状況だからこそ、この関係は成り立ち、世界がさらに歪んでいくのだ……

「さて、次は君達の力も見せてもらおうよ」

「期待してくれてるなら、嬉しいよ」

2つの歪みの声は部屋に響き、闇の中へと消えて言った。

あるいはそれが、次なる歪みの合図なのかもしれない。

13、戦いの軌跡<罪編> (前書き)

どうもです。

今回からたぶん3話か2話使って

ティエリアの過去を話します。

そして最初のこの話は長いです。

それとティエリアの驚くべき事実が!!!

と言っ訳でござ

13、戦いの軌跡<罪編>

戻ってすぐにはやてにティエリアは怒られた。

出撃命令も出ていないのに出撃、しかも待機からも外れた状態で怒られる理由とすればもっとも過ぎるくらいだ。

とにかくティエリアは信用のためもあるが、もはやここまで来ると隠すのは無理と判断しブラックボックスの能力を教えた。

しかし、はやてはその情報はどこにも流さないという。

はやては、いや、六課のメンバーは信用できたためか、ティエリアはその言葉を信じることにした。

「それで、あのイノベーターというのは……」

「彼らは、イノベーターではない」

はやては首をかしげる。

「それって、どういうことなん？」

「……………それらもふまえて、僕の過去を話そうと思っている」

そしてブリーフィングルームで皆が集まる。

「本当によろしいのですか？マイスター」

「あなたのことも…」

「いずれは話すことだったんだ。それに彼らがいるのなら、皆に危害がいくのは目に見えている。その敵について教えなければ、混乱してしまうだろ」

テイエリアはみんなの方に向き直る。

「僕の過去を見る前に言いたい。…まず、僕は君達が思っているようないい人間ではない。最低の男だ」

皆驚いて黙る。しかしヴァイスは1度少しだけだが喋ったためか、何となくだが納得している。

「そんな、そんなことはありません!!」

大声を出して否定したのはキャラロである。

「キャラ、キャラ……」

フェイトは……いや、皆がキャラロを見て驚く。まさかキャラロがここまで大きな声を出すとは思わなかったのだらう。

「テイエリアさんは、とってもいい人です。私を励まして…」

「言ったはずだ、あの言葉は僕の言葉じゃない。僕の恩人の言葉だ」

「…でも、いつでもみんなを想ってくれて…」

「それも昔の僕ならしていない。むしろ……」

テイエリアは正直こんなことを仲間と言うのは辛い。しかし、過去のことを話すと決めた時から覚悟していたことだ。

「むしろ、君達を撃ち殺していたかもしれない」

『！？』

今度はヴァイスも含めて皆が信じられないと言いたそうな顔をする。

「僕の過去を見ればすべて分かるさ。……そしてもう一つ、なのは、
フェイト」

「な、なに、テイエリア」

少しだけ放心状態だったなのはが応える。

「僕が見つかる前の時、ロストロギア反応があったらしいな」

「うん。でも、結局それらしき物は見つからなかったけど……」

「おそらく、その原因は僕にある。……シャーリー」

「はい」

「ここ最近、レリック以外のロストロギアの反応が、この近くであったんじゃないか？」

「ええ！なんで！！」

シャーリーだけではなく、はやても驚いていた。

「なんでティエリアさんが知ってるんですか！？この情報は私とはやて部隊長しか知らないはずなのに」

それを聞きながらティエリアは確信した。

「それは……見てもらった方が早いな。セラフィム」

「了解。ヴェーダへのアクセスを開始してください」

セラフィムがそう言う。

「ティエリア、ヴェーダって……！！」

その時フェイトが変化に気付いた。それに続くように皆が気付く。
……ティエリアの目が赤から金色になっていることに。……そして

「！！ロストロギア反応！これは、そんな、でも………」

その反応がある地点は目の前。つまり

「やはり……僕自身が、ロストロギアだったか」

ロストロギアは異世界の超進化した科学や技術。なら、イノベイドであるティエリアに反応するのは自明の理というものだ。

（反応しなかったのは、僕がヴェーダへのアクセスをしていないた

めといったところか)

テイエリアは分かっていた。けれど、気付かないふりをした。今のこの仲間と過ごした期間が、あまりにも楽しかった。ソレスタルビーイングの仲間達と過ごした時と同じくらいに。けど、もしそうだとしたら、この関係は崩れるとテイエリアは思った。だから気付かないふりをしていた。

「この時点で君達が追い、封印するものが目の前にある。さあ、どうする」

テイエリアは別に封印されてもよかった。それが自分への罰なら受けるこ

「まだ、何も聞いてないよ。テイエリアのことを」

なのはの言葉を聞いて皆正気に戻る。

「分かった。セラフィム、ヴェーダに入った僕の記憶と皆の戦闘データ、それとプロレマイオスの映像データのいくつかを混ぜて編集していてくれ。その間に、簡単なことだけを話す」

「了解」

「さて、とりあえず、僕の世界のことをある程度だが教えよう」

皆しばらく黙って聞いていた。

イオリア・シユヘンベルク、軌道エレベーター、それを造りあげた3大勢力、半永久的なエネルギーを手に入れても、人々が様々な理由で戦争をやめられなかったこと、フェイトが気になったヴェーダのこと、そして…

「そして200年以上も前から世界の戦争が終わらないことを予測したイオリアは、先ほど言った量子型演算処理システムのヴェーダとある組織、そして動力源などを作り出す計画を立てた。それが僕が所属していた……いや、今でも所属している組織、ソレスタルビーイングの始まりだ」

「それで、その組織の目的はなんだ？」

シグナムが聞く。

「戦争根絶。その為に、いかなる理由も関係なく、戦争行為に対して武力による介入をし、根絶を目指した」

「それは……」

フェイトがたまらず声を出す。

「ああ、矛盾しているさ。それをも踏まえて僕は、僕らは戦った。だが戦争根絶と言う行為は計画の1部でしかなかった。本当の計画は映像を見ていればわかる。それと、それが終わった後の僕の対処は、君達に任せる。殺されても何の文句も言えないからな」

皆が押し黙る。

「主、終わりましたが……最終確認です。開始しますか？」

「くどいぞ、セラフィム」

「……………映像開始」

《サードフェイズ、終了》

最初に映し出されたのは軌道エレベーターにテロを仕掛けたMSヘリオンをGNバズーカで消滅させるヴァーチェとそれに乗ったパイロット、ティエリアの姿だった。

「これが、MS。これが、ガンダム。凄過ぎます……」

シャーリーはこんな空気の中だというのにMSやガンダムを見て興奮する。

「ティエリア、1つ聞いていいか？」

映像を見ていてシグナムが真剣で、信じられないものを見るような眼をして聞いてくる。

「この映像に映っている男は、本当にお前か？」

「???どういふことや、シグナム？」

シグナムの言っている意味が分からないのかはやてが聞く。他のメ

《……………あなたはどなの？》

去っていくティエリアに言葉をかけているスメラギだがその言葉はティエリアには聞こえていなかった。

「あの、どうして、人命救助をしたことを怒っているんですか」

エリオが疑問を聞く。

「当時の僕は、自分で言うのもなんだが完璧主義者だった。だから、ミッションを放棄する行為は許しがたいものだったんだ。それに、当時のソレスタルビーイングの理念は、目先の人間ではなく、戦争根絶によって救われる命のために行動をしていた」

そしてついに皆がシグナムと同じ考えになる瞬間が来る。

それは、ソレスタルビーイングの活動停止と武装解除をさせるために動いた無差別テロの時だ。

その前の刹那に銃を向ける場面でも六課の皆が驚くが、それよりもソレスタルビーイングのメンバーはそのテロ行為を聞いて怒りを灯すのに対してティエリアがとった反応の方がより驚いていた。

《ふっ、そのようなことで、我々が武力介入をやめると思っているのか》

《なんだと！》

ティエリアから発せられた言葉にロックオンが反応する。

《一般人が犠牲になっているというのに、なんとも思わんのか？》

情報を伝えたアイアン・ヴァステイも反応して聞く。

そして、今のティエリアしか知らない六課のメンバーにとっては信じられない冷酷で冷徹な言葉がティエリアから発せられる。

《なんとも思いません。そもそもこのような事態が起こることも、計画の中には入っているはずだ。一般人が犠牲になったことぐらいで信念をまげるほど、ソレスタルビーイングの理念は安くない》

《貴様！》

ロックオンがティエリアの胸倉を掴む。

《どうしました？いつも飄々としてるあなたらしくもない。そんなにテロが憎いですか？》

《うるせえぞこの野郎！》

胸倉を掴んだロックオンの手にさらに力が入っている。

《世間からみれば、我々も立派なテロリストだ》

間違いなくそれは正しいが、映像に映る者もそれを見ている六課のメンバーも賛同しがたいものがあった。

《悪いか？テロが憎くて悪いか！！》

怒りを爆散するように怒りを表に出すロックオン。

そして苦しくなってきたのか無理やりその手をどけるティエリア。

《あなたには失望しましたよ、ロックオン・ストラトス》

映像を見ていて全員がロックオンがソレスタルビーイングに入った理由がなんとなく分かっただろう。

キャラは映像の冷徹なティエリアを見ているがやはり信じられないようだ。

「ほんとに、ティエリアなの？」

「違います！！こんなアーデさんじゃありません！！」

なのはは疑問をリインは否定の感情をそのまま言葉に出す。

「残念だが、ここに映っているのは間違いなく僕だ」

「うそ、です。そんなのうそですよね？アーデさん」

最近ティエリアと仲が良かったリインは真実だと言われてもそう簡単に納得できなかった。

それは他のメンバーも同じである。

「こりゃ、お前があの時言ってたことが本当だったなって言えるぜ。ここまで最低な奴とは」

「ヴァイス、知ってたの？」

ヴァイスが呟いたことに対し、フェイトが聞く。

「いえ、ちょっと前にティエリアが言ってたんっすよ。昔のティエリアなら、ティアナの兄貴を侮辱した上官と同じことを言っただろうって」

皆が納得するが、それでも煮え切らない想いがある様子であった。

「それでは、次に移る」

次の映ったのは人革連軍によるガンダム鹵獲作戦の時の映像。

敵の策にまんまとはまってしまい、戦力を分断され、キュリオスが狙われた。

《敵輸送艦にキュリオスの反応！なんとと言う失態だ！！万死に値する！！！》

GNフィールドを展開し、GNバズーカを人革連の輸送艦にむける。もちろんキュリオスが、アレルヤが中にいるのは分かっている。それでも撃つのだ。助けるなどと言う感情はティエリアの中には微塵もない。

(ティエリア………)

なのはは、ティエリアが自分と戦ったあとに言っていた言葉を思い出していた。

(これが昔のティエリア………)

なのはと同じように仲間を撃とうとしたが、ティエリアにはなののような想いはない。

しかしそれを撃つ前にティエリアは敵に邪魔され、四肢の動きを止められる。そして、敵の新型がヴァーチェに攻撃をしてくる。

《くっ、やられる!!》

危険を感じ取ったのか、眼を金色にし、システムを変える。

すると重装甲の鎧を纏った戦士がその鎧を外すかのように装甲がパージされてく。

そして現れたのはヴァーチェとは反して細身の機体で、頭部パーツには長い髪を連想させるような無数の長いコードがある。

《ガンダムナドレ、》

その名を告げる。ヴァーチェの装甲で守られた特別な機体。

《目標を消滅させる!!》

パージしたGNキャノンを掴んで左右にいるティエレン6機を文字通り消滅させた。

残った敵はこれ以上の戦闘は危険と判断したのか撤退した。

ここまでピンチに陥り、生き残れば少しは喜びもするのが普通だが

《うおおおおおっ!!》

コンソールパネルを殴る。

《なんと言う失態だ!こんな早期に、ナドレの姿をさらしてしまうなんて……計画を歪めてしまった!》

顔を上げたティエリアの眼は涙があった。

《ああ、ヴェーダ……………俺は、僕は……………私は……………》

崇拜している神を裏切ったような気分になり、どこまでも深い闇に落ちるような眼をし、ティエリアは初めての涙を流していた。

「なぜあそこまで悲しんでいるのだ?」

「難しい質問だなシグナム。……………当時の僕にとって、ヴェーダは神のようなものだった。ナドレは、僕がヴェーダに直接リンクし特別な力を使うための機体だ。こんなに早く見せる機体じゃなかった故に、あの機体をさらすということは、ヴェーダへの裏切り行為だったんだ」

「直接リンク？それって……」

「あとですべて分かるさ、なのは」

続いて映し出されたのは超人特務機関開発施設をキュリオスが破壊する映像。

「あの施設は何なん？」

「あの施設は、肉体改造で完璧な兵、超兵を造り出している施設だ。フェイトには一度言ったがな」

そして再びその機関について説明をする。

「とんでもない組織だな……」

シグナムは落ち着いた声だが怒っている。

「ちょっと待って。だとしたら、あそこにはまだ子供がいたんじゃない？」

なのはが映像を見ていて言う

「ああ。そして、その施設ごと破壊したのは……他の誰でもない、あの施設で改造され、毒殺処分から逃げてキュリオスのガンダムマイスターとなった、アレルヤだ」

「……助けることはできなかったの？」

フエイトは悲しそうな顔をして他の皆が思っているだろうことを聞く。

「できなかつたさ。すべてを救うことなどできない。あの施設が、あそこで造られた者たちがある限り、再び超兵計画は作りだされる。そのような悪魔の連鎖を、自分の過去と共にアレルヤは消し去つたんだ」

映像には涙を流しながら自分の同類を殺すアレルヤが映り、みなそれをただ見ているだけだった。

「そして、世界がついに動き出す」

タクラマカン砂漠の濃縮ウラン埋設施設にテロの標的とした組織の情報がユニオンか人革連がリークした。その場所では、3国家軍による合同演習が行われる。

「これって、どう考えても……」

「ああ、畏だ。だがたとえ畏だとしても、行動するのがソレスタルビーイングだ」

テロを防ぎ、即座に撤退しようとするデユナメスとキュリオスだが見逃す敵ではない。

戦闘は開始された。3国家軍のMS合計832機VSガンダム4機の戦いが…

戦闘開始から15時間。圧倒的な物量で隙を与えず攻撃を仕掛け、

とうとうガンダムが鹵獲された。

「このままだと、ティエリアさん達が!!」

「この場は助かった…いや、助けられた。チームトリニティによって」

紅いGN粒子を放出して、ティエリア達を救ったのはチームトリニティの3機のガンダムスローネだった。

「その後、彼らはあれこれ構わず軍の基地を攻撃しだした。その時点で怒りはあつた。だが、彼らは遂にやってはならないことをやってしまった。……意味もなく、民間人を攻撃したんだ」

ティエリアの腕に力が入り、怒りをあらわにする。

「ひどい!!」

「なんでこんなことを平然と!!」

フェイトとなのはも怒りを声に出す。他の皆も同じくスローネの行動に怒る。

「そんな行動は、ソレスタルビーイングを汚す行為とし、彼らに武力介入を仕掛けた」

初めはエクシアだけで戦っていたが途中でヴァーチェも戦いに参加した。

《フォーマーシヨンS32》

《了解》

いつもは仲の悪い刹那とティエリアが完璧にフォーマーシヨンを行う。まったく微塵の狂いもない反応で直接的なダメージは与えられていないが、スローネを翻弄する。

《ふつ、まさか君とフォーマーシヨンを使う日が来るとは思ってもみなかった》

《俺もだ》

そっけない会話をする2人だがその間には1つの信頼関係があった。スローネは早々に決めるためかドッキングをして砲撃を放とうとするが、

《そのような時間が与えてもらえると思っているのか！》

ビームサーベルを振りそれを中断させるが2機に囲まれる状況になる。ヴァーチエの機動力では狭み撃ちにあうが、ティエリアが再びナドレを使う。そして、その真の力が解放される。

《ヴェーダとリンクする機体をすべて制御下におく…ガンダムマイスターへの裁判システム！君達はガンダムマイスターに相応しくない。そうとも、万死に値する！》

動けなくなった敵を攻撃するティエリアだったがトリアルシステムが強制解除される。

それに動揺してしまい後ろを取られるがデュナメスの遠距離攻撃で牽制をする。

状況的には3対3だが、フォーメーションや擬似GNドライブの活動限界のことも考えてか撤退をしようとする。

《逃げんのかい？》

ロックオンは逃げようとするスローネを挑発するように言う。

《君は私達よりも先に戦うべき相手がいるぞ。ロックオン・ストラトス……いや、》

スローネアインのパイロットのヨハン・トリニティが真実を告げる。

《ニール・ディランディ》

「あの人がニールさんだったんですか!？」

スバルは驚いている。

「そんなに驚くことなのか?というより、誰も気付いていなかったのか?」

テイエリアはニールの射撃の腕を一度教えている。だからうすうす気付いている者がいると思っていた。

「いえ、だって、あんなに仲が悪そうだったから……」

シヤマルも困惑して言う。六課のメンバーは全員もだ

「やっぱりあの人が、ティエリアの大切な恩人」

どうやらフェイトは気付いていた様子だ。

「まあ、とりあえず続きを映すそう」

ロックオンことニールの両親と妹はKPSAの自爆テロによって死亡した。そして、その組織の一員だったのが、

《刹那、おまえは本当にKPSAに所属していたのか？》

《ああ》

刹那・F・セイエイ。元ゲリラの少年兵で、KPSAの元メンバー。

ニールは刹那がKPSAに利用されていたことも、望んでない戦いをしていたことわかっていた。だが、それでも許せなかった。

《家族の仇を討たせる、恨みを晴らさせる》

そして、引き金がひかれた。

刹那の黒髪が数本舞い落ちる。わざと外したのだ、刹那の答えを聞くために。

刹那は、KPSAのリーダー、アリー・アル・サーシエスによって歪んだ宗教を教え込まれ、神の戦士とやらになるために両親を殺し、

そして戦っていく中で、神がないと理解した。

《生きているなら俺は戦う。ソラン・イブラヒムではなく、ソレスタルビーイングのガンダムマイスター、刹那・F・セイエイとして》

《ガンダムに乗ってか？》

《そうだ。俺が、ガンダムだ》

ティエリアはこの状況を見つめる。もう止めても2人も納得しないだろうからだ。

不意に、ニールは銃を下ろす。

《あほらしくて撃つ気にもなんねえ。まったくおまえはとんでもないガンダムバカだ》

《ありがとう》

刹那の言葉にニールは目を丸くする。

《最高の褒め言葉だ》

それを聞いた途端ニールは腹を押さえて笑いだす。先程まで険悪なムードはまるでなかったかのようだ。

《これが、人間か……》

《ああ。そうさティエリア。このどうしようもなく利己的で不完全な存在が、人間なんだよ》

ティエリアの呟いた言葉を聞き取ったニールが言った。

彼らの結束は固いものとなったのだった。

「うっうええ話やな」

「ほんとです」

はやてとリインはハンカチで涙を拭きながら言う。

他のみんなはヴァイス、ヴィータ、ザフィーラ、シグナムはうんうんと頷き、なのは達は涙は流してはいないが、笑みを見せていた。

「……だが、落ち着いてる暇は僕たちにはなかった。……組織の中に裏切り者が出てきた」

何者かが擬似GNドライブが搭載された機体を3勢力に渡し、唯一無二の国連軍が誕生し、スローネが敗走する。

そして、ティエリア達にもついに襲撃が来た。

裏切り者がプロレマイオスの場所を国連軍にリークしたのだ。

同じ技術だが数で劣るガンダム達は少しずつ追い込まれてくる。

《僕らの滅びは、計画に入っているのか？》

《そんなことが!》

アレルヤの言葉を全面否定してGNキャノンで応戦する。

ティエリアは否定した、否定しなければならなかった。そうしなければヴェーダを、自分の信じる神を信じることができないからだ。

《まだまだ!》

向かってくるMSジnkスにGNバズーカを発射しようとするしかし、ヴェーダからのバックアップがとれてしまい全ガンダム機能が停止してしまう。

《ぼくは……ヴェーダに見捨てられたのか?……》

崇拜している神に見放され、何もなくなったと思い、絶望に染まってしまい、文字通り動けなくなる。

すると他のガンダムは動き出す。スメラギがクリスたちにつくってもらった予備システムのおかげだ。

「おい、動かねーとやられるぞ!」

「あの時は、僕がヴェーダとリンク中だったから、予備システムの障害となってしまう動けなかったんだ」

《ティエリア、どうした!》

ニールの言葉はティエリアには入っていない。

《僕は……………》

そこへチャンスとばかりにジnkスの一機がビームサーベルを持って接近してくる。

絶望の淵に落ちてしまっているティエリアは見えていない。

《ティエリア！！》

横からデュナメスが来るまでは。

《ぐああああああ！！！！》

通信から流れてきた悲鳴を聞き取り、ティエリアは顔を上げる。

《ロックオン！どうした、ティエリア！！》

《あ、ああ、あああ》

意識が戻った瞬間に再び闇の底へと落とすかのような光景をティエリアは黙って見ている。

ラッセが乗ったGNアームズが来たことよって撤退したが

ロックオン負傷、ロックオン負傷！

ハ口が情報を伝える。ニールが負傷したことを

《そんな、僕をかばって…… ロックオン・ストラトス!!》

「あの負傷のせいで、彼の目がやられてしまった…… 僕の責任だ」

「ティエリア……」

「僕は… 暗い闇の中にいた。だが、そこから助け出し、僕を変えてくれたのも彼だ」

映像には展望室で泣きそうな顔をして自分を責めているティエリアが映し出される。

そこに現れたのはロックオン・ストラトスこと、ニールだった。

《ヴェーダは何者かに掌握された。ヴェーダがなければこの計画は、》

《できるぞ》

ティエリアが言葉を言いきる前にきつぱりと言いつつ

《だが、計画実現の可能性が…》

そして、いつもティエリアの心に囁いてくれたことを言う。

《四の五の言わずにやりゃいいんだよ。お手本になる奴ならすぐ近くにいないじゃねーか。自分の思ったことを、がむしゃらにやる馬鹿

がな》

ニールの言う馬鹿とはだれなのかはティエリアも、六課の皆もすぐに分かった。

《ロックオン……………悪かった》

それは今まで自分が行ってきた態度のことと先の戦闘のこと。

ニールは言う。

《Msスメラギも言ってだろ、失敗ぐらいするさ…人間なんだからな》

ニールが去って行った後、ティエリアはぼつりとつぶやく

《人間、か…………》

その言葉に疑問を感じたのはフェイトだけであった。

(なんでだろう。ニールって人も、ティエリアも、人間って言葉を強調しているような気がする)

その疑問の答えはすべてこの後で知ることとなる。

「世界が大きく変わる中、僕たちの機体に新たな力が付いた。それが……………」

刹那はエクシアに乗り、トリニティから奪った機体を使うサーシェスと対峙する。

そして止めが刺される瞬間、それは起こる。

トランスザム
TRANS-AM。一定時間出力を3倍にする、イオリア・シュヘンベルクが残した最後の切り札。

GNDドライブを有する者たちよ。君達が、私の意思を継ぐ者なのかはわからない。だが、私は最後希望を……GNDドライブの全機能を君達に託したいと思う

刹那だけでなく、プトレマイオスにいる皆もイオリアの映像を見ている

君達が真の平和を勝ち取るため。戦争根絶のために戦うことを祈る。ソレスタルビーイングのためではなく、君達の意味で、ガンダムと共に！

「僕たちはガンダムを、GNDドライブを託された」

「こうなることをイオリアは全部予測していたというのか？」

「そうだザフィール。だから僕たちは、戦う覚悟が出来た………だが、」

ティエリアが急に悲しい顔になる。

「どうしたんですか？ ティエリアさん」

キャラロが心配して聞く。

その答えを聞く前に映像が動き出す。

最初はいい感じで戦っていたが、スローネがファングを使い、ヴァーチエの粒子発生装置をいくつか破壊されてしまいピンチ陥る。

トランザムの力でヴァーチエの砲撃出力を上げて超極太の砲撃で敵を攻撃し、2機撃破、1機を離脱させた。

しかしまだ敵は残っている。残った敵は弱った敵を喰らいつこうとするかのように攻撃してくる。

その状況を助けたのは、

《GNアーマー、ロックオン・ストラトス！》

GNミサイルで敵を圧倒して対艦砲撃に入ろうとする。

《ロックオン、そんな体で》

《気遣い感謝するよ。だがな、今は戦う！！》

その言葉と共に敵艦へと向かって行った。

戦闘は敵が撤退したことによって終了した。

《ロックオンはどうなった？》

心配の声を出すティエリア。

《デユナメスを確認、トレミーへの帰還ルートに入りました》

フェルトの通信でティエリアはほっとする。

《良かった……………もどいたら、お帰りとても言つか》

しかしその言葉は永遠に届くことがなくなる。

ロックオン、ロックオン。ロックオン、ロックオン。ロックオン、

ロックオン……………

通信から八口の声が届く。

《どうしたの?!?!ハロ?!?!》

なにも返ってこない。ロックオンと言う名前以外は……

《そんな、嘘だ、ロックオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

!!!》

悲しみの慟哭は宇宙へと消えた。

「ニールさんは……」

なのはは分かっているが聞く。

「死んだよ。家族の仇をとるために、サーシエスと戦って……引き分けたんだ」

髪で眼を隠しているが、ティエリアの顔から涙が一筋ながれていた。ティアナはティエリアもまた、自分と同じく、大切な人を失ったのだと理解した。

「貴様だ！！貴様が地上に降りたばかりに、戦力が分断された！！」

刹那の胸ぐらを無理やり掴むティエリア。イアンが止めるが聞いていない。

《答える！なぜ彼が死ななければならぬ！……なぜ、彼が……》

その場はスメラギによって止められた。

なのは達もティエリアの気持ちがいかに分からなくもなかった。

特にフェイトは、自分を変えてくれた、救ってくれたなのはがもし居なくなったらと……想像するだけでも嫌なものだった。

「僕は自分をさらに責めた。あの時の傷がなければ、あの時に彼の無茶を止めていればと……」

映像には自分の部屋で自分を責め続けているティエリアがいた。

皆は沈黙してすべてを理解した。ティアナを止めた理由、固執し過ぎるなどということ、無茶をするなどということ、それらは失った大切な恩人の思いがあるからだ。

そして、4年前の戦いの最後が映る。

ティエリア達は戦うことを選び、戦闘を開始した。敵の擬似GNドライブ搭載型のMAモビルアーマの攻撃によってプトレマイオスが被弾してしま

う。

《くっ、よくも……！トランザム！》

粒子を温存するつもりでいたが熱くなり、切り札を使う。ヴァーチエとは違い、使っているのはナドレだ。超スピードで敵を圧倒する。

《残りは2機！ナドレ、目標を……》

そこにMAの砲撃が飛んできて被弾し、トランザムも限界時間を迎える。

いたぶるようにナドレが攻撃され虫の息となっていく。

《まだまだ、まだ死ねるか！》

だがここで死ぬわけにはいかない。敵は2機、撃つ回数たったの2回！

《計画のためにも　そして、》

志半ばで散っていった大切な恩人、

《ロックオンのためにも！！》

1つ目の攻撃は敵を貫き、2度目の攻撃は敵の攻撃と交わる。

ナドレはメインカメラをやられ、戦場をそのまま離脱していった。

少し時間が経ったあと、ティエリアの意識が戻るが、それでも一時的なものだ。

《ぐっ、まだ、計画は継続している》

ふと、モニターを見るとトレミーから切り離された強襲用コンテナが見えた。

《せめて、太陽炉を…》

最後の力を振り絞りGNドライブを切り離す。これで、計画は継続される、オリジナルの太陽炉さえあれば

《これで、やっといける、あなたの元へ、ロックオン……………》

再び意識は闇の中へと沈んでいった。

13、戦いの軌跡<罪編>（後書き）

どうもです。

この過去の話では刹那やアレルヤ、ロックオンの戦いのことも書きたかったんですが、

さすがにやりすぎですし、どう収めればいいのか文才ないので分かりませんので書けませんでした。

ほんとすいません……………あと文才欲しいllllorzzllll

14、戦いの軌跡<償い編>(前書き)

さて、00の映画もつづくですが、自分の地元では10月30日の件について

1110T1111

14、戦いの軌跡<償い編>

「これで終わりではなかった…その数日後、僕はソレストルビーイングに保護された」

ティエリアの映像はなおも続いていた。

《っ！！ここは……………》

眼が覚めるとそこは医務室のようだった。

《ティエリア！よかった無事で……………》

隣にはスメラギがいて、目覚めたティエリアを見てホツとしている。

《スメラギ・李・、ノリエガ……………！！他のみんなは！》

スメラギは悲しい表情をする。

《……………クリス、リヒティ、モレノさんは死んだわ》

《！！刹那とアレルヤは……………》

《キュリオスのGNドライブは回収されたそうだけど、アレルヤは行方不明。刹那は、敵との交戦後に、エクシアと共に行方不明よ》

《！そ、そんな……………》

その1週間後、スメラギがソレスタルビーイングから離れたことを聞かされたがティエリアにはそんな言葉は全然入らなかった。

この1週間の間ティエリアはまともに食事も睡眠もとっておらずに自分の部屋でただ俯いていた。

《僕が、僕のミスでロックオンが死に、そのせいで戦力が減ってしまい、このようなことに……》

涙と声が涸れるほど泣き、ただ自分自身を責め続けていた。

モニターが急に暗くなる。

「どうしたセラフィム？トラブルか？」

「いえ、これはあなたの夢の中の映像です」

暗い空間だった。そこにいるのはティエリアのみ。ただ立ち続けている。

「……ロックオン……」

そこに眼帯をつけ、最後に見たロックオン、ニールの姿だった。

「ロックオン……僕のせいで、君は、みんなは……」

「そうやって、自分にすべてを押し付けんなよ。誰のせいでもねえ

さ]

ニール優しく微笑み言う。

「なら、なぜ君は！！なぜ、死んでしまったんだ……………」

「……………さあな、俺は家族の仇をとりたかった。変わることができなかった。それだけだ…だが、お前は違うだろ？」

「！！」

「悩む必要はねえ。自分の思った通りに行動するんだ。ただがむしやらにな」

笑みを浮かべたまま背を向け、その場から消えていくニール。

《ロックオン！！》

手を伸ばしたがそこは医務室の天井、目が覚めたのだ。

《……………悩む必要はない。…ふっ、ああ、そうだ》

ベットから起き上がり、基地にある食道へと向かう。

《まったく、最近このメニューばかりだな》

イアンが愚痴をこぼす。

《しかたないですよ、物資が不足している状態ですから》
それをなだめるフェルトの隣に

《栄養管理ができるだけ、まだましと思うべきだ》
トレイを下ろしてティエリアは座る。

2人とも久々に顔を見せたティエリアに戸惑っている。

《フェルト、イアン。ソレスタルビーイングを再開する。そのため
にまずは……》

2人は息をのむ

《ソレスタルビーイング専用の、制服をつくってほしい》

《………はい？》

と間抜けな声を出したのはイアンで、フェルトのほうは鳩が豆鉄砲
を喰らったような顔をする。

《すべてを1からやり直すためだ。協力してくれ》

《お、おう。よし来た！！》

《さそつく製作に取り掛かります》

2人の姿を見てティエリアは初めて心の底から嬉しく思い、笑みをうかべていた。

その笑みはいつも六課の皆が見てきたティエリアの笑顔でもあった。

「何か柔らかくなつたてより、吹っ切れたって感じだな」

ヴァイスは映像を見てそういった。

「それで、まだ終わってはいないのだろうか？」

シグナムがそう言うと皆は再び真剣な眼差しでティエリアとモニタ―を見る。

その4年後、地球連邦が発足されたとはほぼ同時に、独立治安維持部隊アロウズが結成された。

世界は平和になったかと言われたら、そんなことはなかった。むしろ、国の貧富の差が大きく出てきた。

そして……

「そして非連邦参加国および組織は、アロウズによる虐殺という名の統制が始まった」

映し出されたのは非連邦参加国の人々がアロウズによって大量虐殺される映像。

「うっっ！！」

キヤロが顔を真っ青にし、口を押さえてうずくまる。

そこにあつたのはただの虐殺。男も女も大人も子供も赤ん坊も関係なく、容赦なく次々に殺されていく。

「こんな、こんなことが人間のやることなんか!!?!?」

「……恒久平和と統一のためと言われている」

「けど、こんな一方的な虐殺を、世界の人々はみとめてるの!」

「こんなことをして、本気で平和にできるはずがないよ!!」

はやてやフェイト、なのはだけでなく、みんな怒りに燃えている。

「こんなもの序の口にすぎない。それに、情報は敵がヴェーダの高い演算処理システムの力を使い、情報統制を行っていた。世界に知られることなく……」

「そんな……」

「だが、だからこそ、お前たちは動いたのだろうか?」

シグナムが気付いたのか言う。

「ああ。こんな世界を求めて僕らは戦ったんじゃない。だが、これは僕たちの原因だ」

「そんなこと……!」

なのはが反論の言葉を言おうとするが止まる。

「言えないだろう？僕たちがいなければ、こうもならなかった。だから、はじめを付けるために、世界を変えた罪を償うために、再び世界を変えるために、僕らは活動を再開した」

映し出された映像には4年後の刹那とティエリアが再会して話をしている場面。

「なんか、刹那さんの言う通り、アーデさんは中身以外は全く変わってませんね」

「たしかに、4年前の映像とも変わっていないな」

リンとヴィータは素直な感想を述べた。

「仲間達にもよく言われたよ」

いずればれるのは分かっているが、ティエリアははぐらかすような感じで言った。

その次に映ったのはOOガンダムが敵を倒した後の映像。

《スメラギ・李・ノリエガ。よく戻ってきてくれました》

《別に私は……》

《あなたの今回の戦術のおかげで、刹那がOOに乗る時間稼ぎもできた。ありがとうございます》

4年前とは違い、弱々しくなったスメラギと話していると後ろから新たな人物が出てきた。

その人物は…… ロックオン・ストラトスだった。

「ふええええええ！」

「いいいい生きとつたんかい！」

「いや、彼はニールじゃない。双子の弟の、ライル・ディランディ、2代目ロックオンだ」

《君はロックオンじゃないな。誰だ》

警戒した目を見せてライルを睨む。

《いや、今日から俺がロックオンだぜ》

《刹那、スメラギ・李・ノリエガ、どういうことだ？》

《ロックオンの、弟だ》

刹那は事実を淡々と語る。

《そういうことだ、よろしくな》

《よろしくするかはこちらが決める。失礼》

そう言っつてその場を去る。他のみんなはライルを見て、ニールが生きていたのかと考えたが、ティエリアだけは違った。

《違う、あの男は彼じゃない……………》

その言葉と眼には彼は別の人間だとはつきりとした、認識があった。

「今見た通り、彼はニールではなくライルだ。が、新たなロツクオンでもある」

「あの、1ついいですか？」

エリオが何か気掛かりなことがあったのか聞いてくる。

「あの人は、本当にニールさんの弟さんなんですか？」

「?ああ、まちがない」

エリオは何かほっとしたような顔をしていた。

アレルヤが捕まっている施設を攻撃するアレルヤ奪還作戦を始めた。

その時間はわずか300秒。そんな大胆な電撃作戦を思いつくスメラギのその技量は流石と言うもの。

3機のガンダムの連係攻撃も4年前と違い、通信を行わなくても息の合った連係で圧倒する。

これで、再び4機のガンダムがそろった。

それぞれの戦う理由を持って。

「戦いは続いていき、カタロンの基地が襲われた。そしてそのカタロンの人達が逃げるのを守るため、僕は海上で戦闘をしていたが、途中でアレルヤが、アリオスの反応がロストし搜索をしていた時に、ついに奴に出会った」

「奴って？」

「君達を襲った敵の仲間だった者……」

ティエリアはアレルヤの搜索中に何かに引き寄せられるかのような感じがあり、その場所に着陸したが何も無い場所だった。

辺りを搜索したが何も見つからなかったが、持っていた携帯端末にアレルヤを発見したとの通信が入ってくる。

《そうか、アレルヤ・ハプティズムは見つかったか》

安堵の声を出したその時だった。

《それは吉報だね》

《！？、誰だ！！》

テイエリアは拳銃を声のした方にある崖の上に向ける。朝日が昇る時だったので手で光を遮る。

《なぜここにいることが！？》

そう、テイエリアは偶然この場所に降りたにすぎない。しかしまるでそれが当り前かのように、決まっていたかのように現れた人物にその理由を問いただした。

《同類だからわかるのさ。それに、少し呼び寄せましたし》

太陽の位置が動きその顔が姿を現した。

《なっ！なぜだ…》

テイエリアは息を飲んだ。

「じ、これって……」

「まさか、そんなこと」

フェイトとエリオも……いや、六課のメンバーも驚くが、特に驚いていたのがフェイトとエリオだった。

それもそのはずだろう。映像に映し出された男は髪形こそ違つが、それ以外の眼も鼻も口も顔の形も髪の色もティエリアと全て同じなのだから。

動揺を隠せていないままティエリアは問う。

《なぜ、なぜ僕と同じ容姿をしている!?!》

前にいる少年は微笑みを向けて言う。

《それはDNAが同じだからさ。塩基配列パターン、09888タイプ》

《まさか、君は》

《そうさ。イノベーター、リジエネ・レジエッタ》

そう、ティエリアと同じく造られし生命体。

「ティエリ……」

「なにも言わなくていい。言いたいことはわかっている。」

なのは何か言ってくる前にそれを止める。

(イノベーター……私や、エリオと同じ、造られた命)

フェイトは複雑な気持ちで映像を見ていた。

《イノベーター……………》

そつさ

「セラフィム、この映像は脳量子波の声も聞こえるのか？」

「はい。そのように設定をしましたが、問題でも？」

「いや、好都合だ。みんなに知ってもらうには」

《頭に声が！！》

聞こえた。それは間違いなく目の前にいるリジエネの声に間違いないが、彼は口を開けていなかった。

GN粒子を触媒とした脳量子波領域での感応能力、それを使つてのヴェーダへの直接リンク、遺伝子操作とナノマシンによる老化抑制。僕たちは、イオリア・シュヘンベルクの計画に必要な存在だ。まさか自分と同類がいるとは思わなかったのかい？…どうやらガンダムマイスターの君には情報規制がかかっていただようだね

《そんな……………》

テイエリアは自分が見てきたレベル7までの情報がすべてではなく、しかも自分に情報規制があったことに驚く。レベル7までの情報は、全ての情報の一片でしかなかったのだ。

ならおしえてあげるよ

リジエネは崖の斜面をゆっくりとした足取りで降りてくる。

この計画の第1段階はソレスタルビーイングの武力介入による発端とする世界の統合。第2段階はアロウズによる人類意志の統一。そして第3段階は人類を外宇宙に進出させ、来るべき対話に備える。それが、イオリア計画の全貌

一步、また一步とテイエリアに近付いてくるリジエネをじっと見つめていたがすでにテイエリアの真横まで来ていた。

《そう、宇宙環境に適した僕らが、人類を新たなフロンティアに導くのだ》

耳元に囁くように言う。テイエリアはその感情を、その表情を知っている。かつての自分と同じ、歪んだ優越感によるもの。

《人類を新たなステージへ導くためには大きな波が必要だ。…そう、変革という波が》

その言葉に反応してテイエリアは振り向く。

《だから、アロウズの卑劣な行為を黙って見ているのか!?!》

《変革には痛みを伴う。君達もそうしてきたじゃないか》

リジエネの言葉を否定できなかった。それが真実だからだ。ティエリア達は戦争根絶を成すために数多くの軍事施設に攻撃し、多くの犠牲者をだしてきた。

《いま、君達はイオリア計画の障害となっている。……僕たちは計画のために生み出された。僕たちの存在意義は、計画を遂行し、それを完遂させること》

そう、それはかつてのティエリアの使命感でもあり、存在する理由だった。

《君は、自分の存在を、自分で否定している》

ティエリアの手の力が消え、持っていた銃が地面にあつた水溜りに落ちた。

するとリジエネが手を差し出してくる。

《ティエリア・アーデ、ともに人類を導こう。…同じイノベーターとして》

その手をとるか、とらないかでティエリアは一瞬悩んだ。…いや、4年前までのティエリアなら間違いなくその手をとつただろう。

しかし、今は様々な思いがあり、その手をとっていいのか悪いのか悩んでしまい、答えることができなかった。

それに気付いたのかりジエネは差し出してきた手を下した。

《答えは急がないよ。また会いに来る……君と僕は、いつでもつながっているのだから》

そう言っただけでリジエネは去っていった。

ティエリアはそれを止めることもできず、ただ棒立ちになっていただけだった。

「僕は悩んだ。どうすればいいのか、どうしたらいいのか、何が正しいのか、何が悪いのかも分からなかった。僕にとって、ヴェーダが、計画がすべてだったのは、紛れもない事実だったから。」

(ティエリア……………)

フェイトは自分と少しだけ似ていると思った。フェイトもまた、彼女の母、プレシア・テストロツサの存在がすべてであり、プレシアが望むがままに、その目的のためにジュエルシードを集め、なのはと戦ったが、結局自分はただの人形と言われ、捨てられた。しかし、

「だがそんなとき、ロツクオンの、ニールの声が聞こえた気がした……自分を型にはめるな、四の五の言わずにやればいい、自分の思ったことをがむしやりに、イオリアにガンダムを託されたのだから……その言葉のおかげで僕は少しだけ楽になれた」

そう。ティエリアにとってのニールのように、フェイトはなのはそのことから救ったことによって、今のフェイトの原点となった。

「だが、それでも僕はどうしても本当の敵を、アロウズを創った者を、この目で見たかった。そんな時、エージエントの王留美フン・リュウミからの

皆は再び真剣な表情に戻り、モニターを見る。が、そこに現れたのは「え、この人なん？」

若い、あまりにも若い顔の薄い緑の髪をした少年だった。

《1曲いかがですか？》

リジエネから もうすぐだよ という脳量子波が聞こえてすぐにその青年、リボンズ・アルマークは名を名のり現れ、その手を差し出してきた。

その挑発とも言っているいい行動にティエリアは乗った。

2人が踊り出すと他の客は踊るのも、話すのも止めて、2人の優雅な踊りを見る。

「アーデさん、綺麗です」

リインは思わず呟いていた。

しかし、踊っている2人が話している内容は優雅にはほど遠いものだった。

《まさかそのような恰好で現れるとは思ってもよらなかったよ》

《マイスターは男だと知られている。戦術予報に従ったまでだ》

可笑しそうな顔をして言うリボンズにティエリアは憮然として答えた。

そして、一番聞きかかった話題を聞いた。

《イオリア・シュヘンベルクの計画を実行していると聞いた》

《信じられないかい？ならいますぐ君に返してもいいよ》

リボンズはティエリアの耳元で小さく囁く

《ヴェーダへのアクセス権を》

《なっ！》

あまりのことに気が動転し、バランスを崩して転びそうになるティエリアをリボンズが完璧にフォローした。周囲にも不審を抱かせた様子もない。

《アクセス権、君が掌握しているというのか……》

リボンズは何も答えず微笑むだけだった。しかしそれが確信につながった。

リボンズに言われて場所を移し、VIPルームにティエリアはいた。

《ヴェーダを掌握しているというのは本当なのか？》

《身に覚えがあるはずだよ》

身に覚え、おそらくスローネに行ったトライアルシステムのことだ
というのはすぐに分かった

《ということは、疑似GNドライブを国連軍に渡したのも……なぜ
だ！》

《ソレスタルビーイングの壊滅は計画の中に入っていたからね。君
達は本来なら4年前に滅んでいた》

《そ、そんな》

信じられないという表情をするがりボンズは《事実だよ》と答える。
しかし、

《そんなはずがない！！》

ティエリアは真っ向からそれを否定した。

《僕たちはイオリアに託された。∴ガンダムを、GNドライブを、
トランザムシステムを》

そう、それが今の彼らの行動を支える基盤。

《イオリアにガンダムを託された僕は思う。君達は間違っていると》

そして、ティエリアを変えた者の存在が、ニールの想いが今のティ

エリアの行動の最大の基盤

《そうさ、僕は自分の信じた道を進む！愚かだと言われようが、がむしゃらなまでに！！》

だからこそ、ティエリアは高らかに叫んだ。するとリボンスの口元が歪み、

《ハハハハハハハハハハハハハハハハ》

笑いだした。先程までのリボンスからは想像できないほどの哄笑であった。

《君は思った以上に人間に感化されてるんだね》

その表情はすべてを見下した目に変貌する。

《あの男に心を許し過ぎた ロックオン・ストラトスに》

《くっ！！》

ティエリアは自分よりもニールが馬鹿にされた方に神経を逆撫でされた気分になり、カツとなっていた。

《計画遂行よりも家族の仇討ちを優先した、愚かな人間に！！》

もはやティエリアは自分の怒りを冷却できなかった。

《貴様ああああ！！》

ドレスに隠していた銃を構え、撃ち放とうとする。しかし横から拳銃を撃ち落とされた。その撃った相手を見ると白いスーツを着たりボンズと顔が瓜二つの少女

《ヒリング・ケア、イノベーターよ》

《くそ！！》

ティエリアは窓ガラスを突き破り、2階から飛び降りて脱出した。

「あいつらが、今回ティエリアを襲った奴とその黒幕か」

ヴィータはモニターに映ったりボンズを睨んで言った。

「黒幕のリボンズに関しては、昔のティエリア以下の最低な奴だということとは分かるな。昔のお前以上に目が腐っている」

シグナムもそう言って睨んでいた。

「……ああ。だが、敵はそれだけではなかった」

次映ったのは初代ロックオンことニールの家族の仇であり、そのニールを殺した張本人、アリー・アル・サーシエスとの戦闘映像。

《貴様が、ロックオンの仇か！

仇討ちをさせてもう

！》

《自業自得だ！》

《なにつ……！？》

《右目が見えねー癖に戦場に出てくるたあ！！》

《貴様あ！！》

両手をふさぎ、隠し腕を使った奇襲も効かず、00ガンダムとの連携でも勝てず、何とかアリオスとケルディムが加勢してくれたおかげで助かった。

「敵の正体は分かったが、僕は再び悩んだ。己の正義に殉じて生きることが、イノベーターに敵対することが本当の未来につながるかどうかを…だから、仲間のみんなにも話せなかった。なにせ、自分の正体のことも話すんだからな……」

そう自分は敵対する者の同類だと信頼する仲間教える。それができないのは当たり前だが、それを心の中で持ち続けるのは、かなりの重荷になる。

「だが、僕はついに打ち明ける決心をした。あることが切っ掛けで」

「あること？」

「それはなんなの？」

フェイトとなのはが聞いてくる

「……衛星兵器メメントモリの攻撃による、中東国家スーイルの消滅だ」

「なっ、衛星兵器やて!!」

「1つの国を破壊しただけじゃない。罪のない一般人も、その砲撃に巻き込まれている」

「そんなことで、世界が本当に平和になると思っているのか、アロウズの連中は!!」

初めてここまで冷静だったシグナムまでもが大きな声を出した。

「そう、完全に彼らを認めることができなくなった僕は話した。けど、みんな受け入れてくれた。悩む必要なんて、最初からなかったんだ……」

そして00ライザーを起動させ、ラグランジュ3の敵を退け、衛星兵器はガンダム全機の力で見事破壊に成功した。しかし、敵の奇襲攻撃で00ライザーとはぐれて地上に落下した。

そして、物語の終りの近付きを知らせるかのようなあの事件が起こることとなる。

14、戦いの軌跡<償い編>(後書き)

過去編ながっ!!

自分で言うのもなんだけどながっ!!

これでも収縮しているんですけどなかなか難しいです。

まあ、次回で終わりますが…ちなみにこの過去編が終わると2 / 3
話は、番外話となります。

15、戦いの軌跡<副へ編>(前書き)

ようやく過去編の最後です。

実はもう少し早く投稿するつもりでしたが、一回データを間違えて消してしまい始めから書き直していましたorz

PS、PV数が10万超えた!!!マジ嬉しい

15、戦いの軌跡<罰へ編>

地上に降りたプトレマイオス2の修復中に敵が迫ってきていた。

その相手はMSガラッゾ、イノベーターであった。

ティエリアは両腕のGNバズーカ?と両肩のGNキャノンをそれぞれ発射タイミングをずらして攻撃する。

しかし高い機動力を持つガラッゾは軽々と避けてGNバルカン攻撃してくる。

即座にGNフィールドを展開して防ぐがその衝撃はコックピットの中にまでくる。

《くっ！ヴェーダのバックアップがあるからと言って！》

すると突然通信が開いて相手が声を出してきた。

《ティエリア・アーデ……君は、イノベーターだ！》

爪型のビームサーベルを出し、突進してくる。ツインバスターキヤノンで応戦するが簡単に避けられてしまい、そのまま接近してきたGNバズーカ?を斬り裂いた。

《うわあああっっ！》

すぐに体勢を立て直すが敵は続けて両腕を振り上げそのまま斬りかかる。つとしてくる。

《我々と共に使命を果たせ!》

《断る!》

即座に、無意識に言い放った。しかし、偽りはない。

両肩のGNキャノンを発射するが避けられ、その細い機体とは思えないほどの力でセラヴィーを蹴り飛ばす。

《強い!これが、イノベーターの力》

「あの、ティエリアさん」

映像の途中でエリオが話しかけた。

「どうした?エリオ」

「ティエリアさんは、自分と同じ、同類のイノベーターと戦うことに、戸惑いはなかったんですか?」

そう聞かれるとティエリアは

「ふっ、確かに最初は少しあった。だけど僕は……」

《同類を討つとは忍びないが、やらねばならぬ使命がある!》

《譲れないものはこちらにもある!!》

意志と意志のぶつかり合い、1つは支配と言っている統一を目指す者。1つは戦争根絶と、支配の解放を目指す者。互いの想いは違いますが、どちらも強い意志ではあった。

ガラツゾは左腕の爪型のビームサーベルを1つにまとめてそれを突き出し、セラヴィーの右肩から先を斬り飛ばした。

しかし、それに敵は驚く。

《フィールドが!?!》

そう、ティエリアは今まで展開していたGNフィールドを解除してわざと攻撃を受けたのだ。敵を誘い込むために。

その一瞬のチャンス逃がさず、左手で相手の右腕を、両膝にあるGNキャノンから隠し腕をだして相手の両脚を拘束したのだ。さらに力を入れるためトランザムも使う。

《トランザムか!...その程度で.....!!》

動ける左腕を振り上げ、指のビームサーベルで切り裂こうとしたがその動きが止まる。おそらくその変化を見て呆然としているのだろう。

《ナドレの時とは違い、自らの意思で、その姿をさらそう》

セラヴィーの背にあった黒いパーツが分裂し両肩のGNキャノンが

ら手が出て腕となり、GN粒子排出口は脚となり、ガンダムフェイスの上に頭部が出てき、1体のMSとなった。

《セラフィムガンダム!》

それは過去の計画を順守する自分を捨て、自分の意志で行動していくのを示すものであった。

《GNフィールド!》

敵は危険を感じ取り、フィールドを展開するが、GNフィールドは実体物にはあまり効果がない。

ティエリアはフィールドにセラフィムの両手を押し付ける。するとトランザムの力もあり、GNフィールドの中に両手を潜り込ませた。

《くっ、討つというのか同類を!》

その声にティエリアは小さく《同類だと?》と呟いた後に怒鳴り、それを否定する。

《違う!……僕は人間だ

!……!》

自分の意志を相手に叫び、手をGNキャノンに戻して撃ち放ち、敵は爆散した。

後悔はティエリアの眼にはなく、意志と覚悟がある眼だった。それが、ティエリアの戦う理由だから……

「とういうわけだ。僕は自分の意志で、人間として生き、未来のために戦うことを選んだ」

エリオは少しだけなにか嬉しそうな眼をしていたがティエリアはそれについて詮索することはしないことにした。

「さて、続きと行こうか。その戦闘の後にアフリカにある軌道エレベーターが連邦のクーデター派によって占拠された」

「え、でもそれにイノベーターの奴らは気付かなかったのかよ」

ヴァイスが言う。

「気付いていて、わざと見逃したんだ。……………そして、まだ市民がいると言うのに、アロウズはメメントモリ2号機を使い、タワーを攻撃した」

そう言った瞬間全員が驚く。

「どうして！！ただの一般人なんでしょ？どうして……」

「一般市民がアロウズの正体に気付いたからだ。その瞬間に、そこにいた市民達も、反政府勢力とみなされたんだ」

00ライザーのライザーソードによってメメントモリは破壊できたが、破壊される寸前に発射されてしまい、直撃はしなかったものの、ワイヤーケーブルがはじけ飛び、脱出中の6万人もの人命は消えた。

しかしそれだけではなかった。安全装置が倒壊を防ぐため、ピラー

外装部がオートパージされたのだ。成層圏より上は空気加熱で燃え尽きる。しかし、それより下は地上に落下する。そして、その下にあるのは人口密集区域。そこにいる罪のない何万の人々を守るため、スメラギは自分の顔を出してまで、皆にピラーの破片を破壊するように頼んだ。

最初はガンダム3機で防いでいた。が途中にGN^{ガン}アーチャーが協力しだすと他の部隊も動き出した。ケルデймの近くにはカタロン部隊、セラヴィーの近くからはクーデター派の部隊も動き出した。しかしそれでも足りない時、なんと地球連邦軍が協力し、さらにカティ・マネキンの命令ではあるが、アロウズまでもが協力しだした。

「こんな状況だというのに、世界は1つになっている」

「ちがうよシグナム。こんな状況やからこそや」

はやては少しだけ嬉しそうにシグナムに言った。

「皮肉なもんだけどな」

「けど、いいじゃない」

「ああ。けして悪くない」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラはそう言ったあとその映像を凝視してみていた。

「そう、後に？ブレイクピラー？と呼ばれるこの事件を見て、ぼくは、人と人がわかりあうことができるのだと思ったんだ」

映像はブレイクピラーから四ヶ月となる。この四ヶ月の間にティエリア達は既にアロウズと20回以上もの戦闘を行ったが、体勢を立て直すために深入りはしなかったが、メメントモリ2号機の再建の情報を聞きいてこれを破壊した。

「それにしても、よくアロウズはプトレマイオスの位置が分かりますよね」

「それは違うさシャーリー。理由があった」

追い詰められたティエリア達は戦局打開のべく、イノベーターからヴェーダを奪還するため、所在を知っているであろうイノベーターの1人、リバイブ・リバイバル捕獲に成功した。

しかし、事態は思わぬ方向へと向かう。仲間の1人だったアニユール・リターナーはリバイブと同タイプのイノベーターだった。プトレマイオスの位置が把握できたのもこのためだ。ミレイナを人質にされ、リバイブはオライザーを奪って逃走した。

どうにかオライザーは奪還できたがゴックピット内部を破壊されてしまつて動けず、プトレマイオス2もデータを破壊されたり奪われたりしたせいで動けない状態になった。この状態を見逃す敵などいない。

セラヴィー、アリオス、GNアーチャーは新型のMAとイノベーターの機体2機と戦闘を開始。そして、

「そしてロックオン、ライルの相手は彼の恋人、アニューの乗る機体だった」

2人の関係を教えてなかったためか、皆が驚愕の顔をする。

悲劇の恋の戦いが始まった。

ライルはトランザムとシールドビットを使いガッデスを半壊にまで追い込んだが、ふいにGNピストル？を投げ捨てコックピットハッチにケルデイルの手をかけた。

《な、何を！？》

突然の行動に困惑するアニューにライルは言う

《決まってるだろ！もう一度お前を……………俺の女にする！！》

コックピットハッチをもぎ取りそう言った。

《嫌とは、言わせねえ！》

《ら、ライル…》

アニューは啞然として想い人の名を言う。ライルは想いを告げる。

《欲しいもんは奪う。たとえお前が、イノベーターだとしても》

ティエリアはふと見ると六課の女性陣が顔を赤くしていることに気

付いた。その理由がこの劇的な告白によるものだということとは分らなかったが。

《戻って来い、アニニュー》

ケルディムの手のひらをコックピットの前に見せた。

《ライル……私、私は……》

アニニューは立ち上がり、機体からゆっくりと離れようとした時、低く冷たい声で言った。

《愚かな人間だ》

《アニニュー？……ぐお！》

直後、ガツデスがケルディムを突き飛ばし、周囲にあったシールドピットを破壊して襲いかかって来た。

その映像を見ていた六課のメンバーはいきなりのもので驚いている。

「いったいどうして!？」

スバルが叫びながら言う。

「彼女、アニニューはリボンズに脳量子波を通して操られていたんだ」
「テイエリアがそう言った瞬間に皆、リボンズがどれ程残酷なことを

させる存在かということが改めて分かった。

アニューが止めを刺す前に、〇〇ライザーが横から粒子ビームを放ちそれを止めることはできた。

映像は恋人を討った刹那をライルが殴り続けている場面へとなる。

《貴様が、貴様が、貴様がアニューを！！》

《やめろ！！》

《黙れえっ！！》

ティエリアの制止にライルは怒鳴り返し、刹那の胸ぐらを掴んだ手にさらに力を入れる。

《あいつは戻ろうとしていた…イノベーターではなく、人間として、俺達の元に！！貴様のせいで！！！！》

そしてこれまででいちばん強い一撃の拳が入った。それが気力の最後の一撃だったのか、しだいに力は弱くなっていき、最後は恋人の名を呼んで泣き叫んでいた。

「助けることは、できなかつたの？」

「無理だつたらうさ。それに、あのままいけばライルの方が死んでいた」

聞いてきたフェイトにティエリアは残酷な現実を告げた。

「だが、このことがあって僕は分かった。人と人がわかりあえたように、僕たちも人とわかりあい、共に未来をつくることができること。そして、刹那が純粋なイノベーターに変革していることが」

そう。それがティエリアのある意味の変革であり、自分の本当の正体が分かったきっかけである。

「そして、アロウズとイノベーターの最後の戦いが始まる」

王留美からの情報でヴェーダの本体がある場所が月の裏側にあることが判明した。そこにアロウズの艦隊が集結していることも

ここにイノベーター達との決戦がはじまった。

108機ものMSに対し、ソレスタルビーイングは支援機のGNアーチャーも含めて5機。

しかしスメラギの戦術によって敵の陣形を崩して分断し、それぞれが各個撃破を行うことで数の差を性能で圧倒していたが、特攻してきた敵艦をOOライザーが破壊した直後にアンチフィールド発生して形勢は逆転する。

相手はミサイルポッドを使い、少しずつ粒子ビームの効力が半減されているガンダムが包囲されていく。

プロトマイオス2への防衛ラインも突破されてしまい絶体絶命の時、

カタロンが援軍に来た。

さらに敵の後方からはカティ・マネキン率いるクーデター派の部隊が来たことにより、敵は混乱をはじめ、なかには敵艦どうしでぶつかり自滅する艦もいた。再び形勢は逆転。もはや決まるかと思われたその時だった

全部隊に刹那からの有視界通信が入る。

《全部隊に告げる！即座に回避運動をとれ！…来るぞ！攻撃が来る、禍々しい光が！！》

その通信の後にメメントモリ以上の破壊力を持った粒子ビームによって中央にいたアロウズ艦隊はほぼ全滅。カタロンも艦を一隻失った。

「あの刹那という男、よく気付いたものだな」

「言ったはずだシグナム。彼は、刹那は純粋なイノベーターへと変革しようとしていると」

おそらくこの場にこの状態の刹那がいなければ間違いなくソレストアルビーイングも壊滅していただろう。

「けど、それを言うとティエリアさんも……」

「僕は、イノベーターじゃないさ」

そう言つと皆「ということだ」と言いたげな顔をしていたのでティ

エリアは

「あとでわかるさ」

とだけ言った。

ヴェーダ本体がある大型母艦に侵攻を開始した。母艦から放たれる
数多あまたの粒子ビーム砲を順調に破壊しながら進んでいくと新たな新型
MSガガ部隊が現れる。

そして敵もついにランザムシステムを使い、そのスピードを使い
ブトレマイオスに体当たり仕掛けた。

そう、ガガは特攻兵器なのだ。

「さっきのアロウズの時もそうですけど……リボンスってどうしてあ
んなことができるんですか!？」

「……ガガに乗っている者は自我は持っていない。与えられた命令
を迷い無く実行するだけのロボットに等しい存在だ。それにアロウ
ズは……いや、彼にとつて自分以外の存在は単なるチエスの駒としか
思っていないようやつだ。」

とテイエリアが言っても、聞いてきたエリオも他の皆も納得はして
いない様子だった。

カタロンとクーデター派の力もあってブトレマイオス2は侵入に成

功し、アリオスは艦の護衛、残りのガンダム3機は散開して別の進入ルート侵入ルートを探していた。

そこに朗報が入った。ヴェーダの位置が判明したのだ。

《よくやったフェルト!》

入ってきた通信を見て、ティエリアは高揚した。しかしその時間はすぐに切れることとなる。

後方からイノベーターの機体、ガラッゾとガデッサが来たのだ。

《邪魔をするな!!》

と言い放った瞬間に驚愕する。敵の2機がトランザムを使ったのだ。

《トランザム…くっ!》

ティエリアもトランザムを使い相手をするが機動力は敵の方が高く、あっという間にやられてしまい、岩塊部に激突した。

《くっ、まだだ!!》

幸い敵はこちら側に気付いていない。ならばとティエリアはセラフイムのコックピットハッチを開けて母艦内へ侵入した。

フェルトから送られてきた位置情報を元に進んでいくと、1つの扉を発見する。そこから聞き覚えのある声がする。

《人類は試されている。滅びか、それとも再生か》

扉が開き中央には巨大な球体のヴェーダがあり、周りは青色の光に満たされた部屋でその言葉に対しての反論をティエリアは銃を構えて言い放つ。

《だが、それを決めるのは君じゃない》

リボンスは一瞬驚いたようだが、すぐに冷酷な瞳に戻る。

《ティエリア・アーデ。君はイノベーターの分際で…》

その先のリボンスの言葉をティエリアは遮る。

《違う。僕たちはイノベーターではない》

そして自分の存在と言われた名を否定した。

《僕たちは、イノベーターの出現を促すために、人工的に生み出された存在、…イノベイドだ！》

それがティエリアの、ティエリア達の本当の真実^{しやうたい}

それは今まで間近で変化しようとしている者を見たからこそその核心である。

《ヴェーダを返してもらうぞ、リボンス・アルマーク》

しかし、リボンスはその言葉に冷笑をうかべている。

《そのイノベイドが、進化を果たしていたとしたら？》

《なに？》

《僕はイノベイドを超え、真のイノベイターすら凌ぐ存在となった》

何を……………

《世迷言を！！》

部屋に響く2つの銃声。しかし、血を流していたのはティエリアであつた。

《あ、ああ…………》

撃たれたことを確認すると、自分の弾丸は外れたのだとすぐに理解した。

《言ったはずだよ、僕は上位種であると》

リボンスは容赦なく撃ち続ける。

《ヴェーダは渡さない。そうさ、人を導くのはこの僕だ》

そう言ったあとに放った弾丸がティエリアの眉間を貫き、彼の後ろにある壁に血のアートを描いた。

さすがに目の前にいる人物が撃たれている映像を見て何人かは眼を逸らしたりしていた。

「ティエリア……………あなたは」

「ああ、そうだなのは。僕の体は死んだ」

「だが、終わりではないのだろうか？それに今お前は、体はと言っただけだ」

早速その言葉に気付いたシグナムが言う。

「ああ。その後、純粋なイノベーターへ完全に変革した刹那のOOライザーの光が母艦を包んだ」

OOライザーから膨大なGN粒子が発生し文字通り母艦を包みこむ。

《そうだ、未来を創るために……………俺達は変わるんだあああああああ
あ！！！！！！》

刹那の想いが、命の光が、未来を照らす光がすべてを変えていく。

「きれい」

そんな言葉を誰が言ったのかはティエリアは気付いていなかったが、まさしくその通りだ。

「刹那のおかげで、リボنزの脳量子波を乱し、ヴェーダのリンクを一時的に外した」

テイエリアは暗い空間の中で声が聞こえていた。

君もか、テイエリア

意識体だけの声が聞こえる。その声の持ち主は自分と同タイプのイノベイド

リジエネ…

意識体になって把握した。リジエネがリボンを裏切り、殺されたことが。

諦めるのはまだ早いよ。刹那・F・セイエイが……

進化を遂げたか

ああ

なら、今がチャンスだ。君に言うのも癪だが、協力してくれ

リジエネの生体データを使いヴェーダをリボンスから奪還した。

《ヴェーダが僕とのリンクを拒絶した！……まさかシステムを》

リボンス、君の思い通りにはさせない……そうだろ、テイエリア

テイエリアは何も言わないが心の中で その通りだ と叫んでいた。

そしてヴェーダを使い、遠隔操作でセラフィムを動かしてトライア

ルフィードを発生させた。

ヴェーダとリンクする機体はすべて停止し、一気に戦況は変わった。リボンスが部屋を去って少しした後、刹那が入ってきて、ティエリアの体を見て悲しみの声で言う

《…仇は討つ》

勝手に殺してもらっては困るな

不敵に笑っているかのように言う。刹那は突然聞こえたティエリアの声に驚き見回した。

いま僕の意識は、完全にヴェーダとリンクしている

《ヴェーダ……》

刹那はヴェーダの本体を見上げる。

僕はイノベーター……いや、イノベイドでよかったと思う。この能力で、君たちを救うことができたのだから

心から嬉しいと思ったことを告げる。

ヴェーダとつながったことで、僕はすべてを知ることができた。……いまこそ話そう、イオリア計画の全貌を

そして真実を語る。

我々の武力介入行動は、矛盾をはらみつつも、世界の統合を促し、たとえ滅びようとも、人類の意思を統一することにあつた

映像の刹那も、六課の皆も、その全貌を黙って聞いている。

それは、人類が争いの火種を抱えたまま、外宇宙へ進出するのを防ぐためだ。人類は、変わらなければ未来を紡ぐことはできない。いずれ巡りあう、異種との対話に備えるためにも。……そのために僕たちは、わかりあう必要がある

「それが、イオリア計画……」

「そう、たとえ滅びようとも、地上から戦争をなくすことが僕らの目的。来るべき対話、そのための礎石が僕たち、ソレスタルビーイングだ」

そしてリボンスとの最後の戦い。

OOライザーはリボンスの機体、リボンスガンダムに苦戦し、さらにバックアップから外れたイノベイドの機体2機が相手だったが、途中にケルディム、アリオスが援軍に来てイノベイドの機体2機を倒した。

そして刹那とリボンスも互いの機体を破壊され、OOガンダムのGNドライブの1つをOガンダムに、もう1つはエクシアにのせ、戦う。

互いの機体がぶつかりあう。そして、勝利を手にしたのは、刹那のエクシアだった。

その後、アロウズは解体され、世界が本当の意味で平和に向け、統一を目指し始めた。

しかし、争いはまた起こるかもしれない。だからこそ、ソレスタルビーイングは存在し続ける。未来のために。

そして、ティエリアは眠る、来るべき対話の時まで……ヴェーダの一部となり

さようなら、みんな……

また会えることを願って、でもそれは新たな戦いの始まりだから、会えないことも願って……

「そして、僕はこの世界に来ていた。新たな体と共に」

全てを話した後のティエリアに後悔はなかった。そして振り返ると複雑そうな顔をする者、泣いている者といった。

「これを見て、君達はどう思う？」

ティエリアはなにを言われてもよかった。自分の行ってきた行動はそういうものなのだから。

「……正直、どう言ったらええのか分からん」

「みんな過去に大切なものを失って、ティエリアも、大切な恩人を失って」

「だから、ティエリアがやってきたことをすべて否定はできない」

はやて、なのは、フェイトはそう言う。「優しいんだな」と心の中でティエリアは思っていた。

「だが、許される行為ではない」

とシグナムが言う

「わかっているさ。僕たちはいずれすべてを終わらせたあとに罰は受ける」

「お前は、もう罪は償っただろ！！」

ヴァイスが大きな声を上げる

「それは違うさ、僕たちが行ったのは世界を変えた罪に対する償い、人を殺めた罪は償いではなく罰によって受けるもの。たとえば体を失っても、意識は生きている。故に、僕も罰を受ける。それはもう義務と言ってもいい」

「けど、そじゃあ、ティエリアさん達が!!」

「誰かに認めてもらいたかったわけでも、許してほしくて行動したわけでもない」

ティエリアが真実と現実の言葉という剣を刺していく。

「最後だ。僕をどうするかは、部隊長のはやてが決めてくれ。ロス
トログアとして封印するも、犯罪者として捕まえるのも、殺すのも
自由だ」

ティエリアはそれを受ける覚悟はある。

「だが僕は生きているなら彼らを倒す！イノベイドでもソレスタル
ビーイングでもなく、僕の意味で」

ティエリアは背を向けて部屋を出ようとする。

「明日までに決めてくれ、……それと、セラフィム」

「はい。主」

「ガガシリーズとリボーンズガンダムの戦闘パターンデータのあ
とでみんなに渡してくれ。僕が消えることになっても、それがあれ
ば充分戦えるだろう」

「わかりました」

「少し僕は、風に当たってくる」

そう言ってティエリアは外に出て屋上に向かった。

ティエリアが外に出た後、皆少しだけ黙っていたが

「ティエリアさんは、どうなるんですか？」

キャロが聞くが誰も答えない。

「マイスターが罰を受けるなら、元々はガンダムだった我々も受ける義務があります」

「それに、もし何もしないにしても、主はあなたがたを守るために命懸けでリボンズ達と戦い、たとえこの世界のルールを破ってでもリボンズ達を殺すはずです。私の情報制御能力を使えば、非殺傷設定も外すことは可能ですから」

2つのデバイスからの言葉も聞いて、さらに皆が黙る。

「……………なら、決まりや」

そして、はやては決めた

屋上でティエリアは空を見上げていた。輝く星、それはとても綺麗で彼の心を少しだけ落ち着かせていた。

「こんなふうに星を見上げたことなんて、なかったのかな」

組織いる時はいつもミッションかその報告、機体の調整などで星を見る暇などなかった。いや、5年前のティエリアなら見ようとも思わなかっただろう。

「……………それで、僕の処遇はどうなるんだい？フェイト」

ティエリアの後ろにはフェイトと、エリオもいた。

フェイトとエリオは何も言わずティエリアの隣に来た。

「ティエリア……………私も……………私とエリオのことを話そうと思う」

そしてフェイトは語った。自分とエリオのことを、ブレシア・テストロッセPT事件で発覚するプロジェクトFのこと、フェイトは自分がその時に生まれたアリシアのクローンで母親に虐待を受けていたこと。自分の真実を告げられて絶望していた時、なのはに救われたこと。

エリオも同じくプロジェクトFによって生み出された人造生命体、モンディアル家の病死した一人息子のクローン。ある時両親と引き離されたが、その際に事実を突きつけられた途端に両親が抵抗をやめてしまったこと、また研究施設での非人道的な扱いから一時期重度の人間不信に陥って魔法を暴発させ思いつく限りの破壊を行ったこと。それをフェイトが身体を張って止めてくれたこと。

全てを話した

「僕たちは似ているところがあるのかもしれないな。……………違つとすれば、それを最初から知っていたところか」

「うん」

「だが、君達は君達だ。他の誰でもない、1人の人間。フェイトとエリオという立派な人間だ」

ティエリアは話を聞いてそう思っただけだ。しかし、同時にどこの世界でも歪みというものは存在するのだなとも改めて理解もしていた。

「ありがとうございます。ティエリアさん」

エリオが感謝の言葉を言う。

「礼を言われること言った覚えはないさ。思ったこと言ったただけだ」
少しだけ笑みを見せてそう言った後、真剣な表情に戻り

「それで、僕はこれからどうなるんだい？ここに来たということとは、そう言う意味だろうか？」

自分の罰を受ける覚悟を決めていた。

「ティエリアはここに残るよ。今日話してくれたことは本局には連絡しないし、封印もしない」

「なっ！！？」

あまりに予想外の答えだったのでさすがのティエリアも驚く

「君達は、あの映像見て僕が最低の男だとわからなかったのか!？」

「「「違います!!!!!」」」

それはエリオだけではなくキャロとリンも、それどころかいつの間にか全員が屋上に集まっていた。

「アーデさんはいい人です!誰がなんと云おうと!」

「そうです。他の人の言葉だとしても、そのおかげで私は大切な人を守れた!」

「僕が行った行為を見ても、そんなことが言えるのか!？」

自分は悪人。それをわかった上で行動している。故にそう言うものを裁く彼らのこの考えはティエリアにはわからない。

「確かにティエリアのやってきたことで多くの人が死んでいったのも事実だよ。昔のティエリアが、それになにも感じていなかったのも事実。…けど、今のティエリアとは違うでしょ!」

なのはが言う

「僕の罪が消えるわけじゃない。人を殺した罪は!」

「お前が、その罰を受ける覚悟はあるのはわかる。だが、それは我々が下すものではない!」

シグナムは戦士としてだけでなく、皆の想いを代弁して言う。

「たとえば君達が僕に対して何もしないにしても、僕は彼らの行動を黙って見ることはできない。それ故に、僕は彼らを殺すこととなる。それを考えても、君達にとって、僕は不安要素でしかない。それは君達が一番よく分かっているはずだ！」

「そんなことはさせへん！！ティエリアがそうする前にこちらが全部止める！！」

「それにティエリア、あなたも言ったし、私となのはも言ったはずだよ」

はやてが言った後にフェイトが続けて言う。

「私達はティエリアの味方だし、ティエリアも、私達の味方だって」

「！！」

ティエリアはさすがにどう言えいいのかわからなくなった

「……………僕は、」

「もういいだろ？自分に重荷を乗せるのは」

ヴァイスが言う。

「重荷…か……………」

その時、彼の恩人の声が再び聞こえた気がした

(ティエリア、素直になれよ。今のお前ならわかんדר？)

「！素直に、か……僕は、そうだ僕は、いまは機動六課の一員。あ、そうだな」

ティエリアは誰に言うでもなくそう呟く。

「すまない。また少し悩んでいたようだ……」

「悩む必要はないでしょ？」

なのはが笑顔を見せてそう言う。

「ふっ、ありがとう、皆」

笑みを見せながらティエリアは泣いた。こんな自分を認めてくれる、仲間達の存在を見て……

そして、彼らのために、彼らの未来を守るために、自分は戦つと再び決意したのだった。

15、戦いの軌跡<罰へ編>(後書き)

さて、前回言ったように次回から2話か3話は番外です。

ちよつと真剣なものもありますが少なくとも次回はギャグに走っていません。

楽しみしてくれたら幸せです。

番外2、ティエリアの厄日（前書き）

今回カオスです。

そう、皆さん待ってたあのティエリアです。

番外2、ティエリアの厄日

ティエリアが自分の過去を話した2日後

その日、ティエリアは何度もこう呟いたという。

「厄日だ」と

全ては数時間前

ティエリアははやてに呼ばれて部隊長室に来ていた。

「どうしたはやて？緊急を要すると聞いて来たんだが」

はやてはティエリアの世界で3世紀以上前のドラマのどこかの某刑事のように窓の外を見つめている。

「実はな、前回のあの戦闘の時の命令違反としてのペナルティを受けてもらうんやけど……」

「む、そうか。いかなる罰もつけよう」

とティエリアが言うと

「ふっ、ふふふふふ」

と不気味な笑い声を出していた。

「？はやて」

「言ったな、言ったないま、いかなる罰もつけると……………」

この瞬間、ティエリアはなにかいやな予感がした。

「は、はやて、すまないだが後にしてくれないか？まだ書類整理が……………」

「うん、あとでええよ」

「そ、そうだ、少し用事が……………」

「あ、と、で、え、え、や、ろ」

ものすごくいい笑顔だが、ティエリアはそれが何か恐ろしいと肌で感じていた。

（まずい。なんだかわからないが非常にまずい！）

「それじゃ、始めよか…シヤマル、シャーリー、リン」

「……………はい……………」

そしてどこから現れたのかリンとシヤマルとシャーリーがその手にある物を持ってティエリアに近付く。

もはや逃げられないとティエリアは観念した。

（今日は厄日かもしれない）

とティエリアは心の中で呟いていた。

その30分後、ところ変わって訓練場。

「うん。今日の早朝訓練はここまで」

「「「「ありがとうございます!」「「「「」

なのは達の訓練に随分と慣れてきたフォワードの4人は少しばかり疲れてはいるが、まだまだ大丈夫と言ったところだ。

「みなさん、随分良くなりましたね」

「うん、そ、う、だ、ね……………」

その声の主の女性を見てなのはは啞然とする。いや、なのはだけでなく、フェイト、ヴィータ、フォワードの4人もだ。

その女性は六課の服装で髪は薄い紫のロングヘアで、顔は一流のアイドルも顔負けの美人であり、しかも肌白でより美しさが輝いている。

「て、てめー誰だ!」

ヴィータは動揺しているが何とか声を出して聞いた。

「あら、お忘れですか？」

と女性は言う。

「えと、どちらさまでしょうか」

と、ティアナが言う。

「というより、私もあなたのことを見た覚えがないんですけど」

スバルの意見に皆が頷く。

「おわかりになりませんか？」

「ええ、まったく」

とフェイトが言うと「しかたありませんね」と女性は言ったあとに

「どうもみなさん。ティエリア・アーデです？」

とウインクして言った。

沈黙

静寂

停止

そして

「え、ティエリア？」

「はい。どうなさいました？」

しかし目の前にいる女性はそう口にしたので皆余計にわからなくなる。

（すまないんだが、今日1日は女性として生活し、会話もしてくれとはやてから言われたんだ。こっちの僕と話したいときは念話を使ってくれ）

とまたも念話を使って話しかけた。

（はやて部隊長に、ですか？）

（ああ。そつだスバル）

30分前

「これをどうしろと？」

ティエリアに渡されたのは六課の制服。それも女性用の。

「この前の映像で見たティエリアが綺麗やったから、本物を見てみた……」

「断る！」

はやてが言いきる前に即座に言った。

「なるほど、ティエリアさんは自分の言った意志を曲げるんですね」

「いや、シャマル。そう言うわけじゃないんだが……」

「なら、できますね。アーデさん」

そして4人は制服を着るようにせかしている。

その瞳は（早く見たい！）という感情が完全に表に出ている瞳だった。

「くっ、今回だけだぞ」

「あ、けっこう乗り気？」

「違う！！」

からかって来たはやての言葉を全力で否定した。

「あ、どうせですから化粧とかもしましよ。ちょうどいいタイミングに偶然にも化粧セットがありますし」

とどこからか化粧セットを取り出していうシャーリー。

「あ、偶然にもアーデさんの髪の色と同じようなかつらがありますし」

ティエリアの髪の色より少し色が薄めのロングヘアのかつらをこれまたどこからか出して言うリン。

「君達、絶対わざと言ってるだろ」

20分後

「「「お〜」」」

言われた通りどころかそれ以上に仕上がって4人とも大満足の様子だ。

「これでいいのさ？さてそれじゃあもう脱がせて…」

「今日1日そのかつこで女性を演じるのがペナルティやから」

「なっ、なんだ…」

「はい、今から女性っぽくすること。異論はなしや」

その言葉に反論しようとするがそれは無駄だとすぐに判断した。

眼の前にいるある意味邪悪な瞳を止めることは自分には不可能だと理解したからだ。

「厄日だ」

ついにそんな言葉を呟いたのだった

(というわけだ)

(1)、(2)愁傷様です)

説明を終えた後にティアナに苦笑されながら言われたのだった。

それから先はもう大変と言ってもいい。

男性局員 エリオの場合

食事中も普通の会話の時もなにか恥ずかしがっており、避けられた。

男性局員 ヴァイスの場合

この姿のティエリアを見た瞬間にナンパを始めた。

そしてティエリア本人だと分かった瞬間に灰になったように落ち込んでいた。

色々な意味でショックだったのだろう

男性局員 ザフィーラの場合

肩をたたき、「強く生きる」と言った。

女性局員 スバル・ティアナの場合

どちらもつらやましそうに見ていたとのこと

女性局員 フェイト・なのはの場合

ここは変わらずいつも通り。

ただし女の子どうしの会話にもティエリアがついていけたことに関して疑問を感じた様子

女性局員の場合 ヴィータ・シグナムの場合

冷めた眼でティエリアを見ていた。

女性局員 キャロの場合

今だ放心中

しかし、それだけでは終わらなかった。

「本気なのか、はやて？」

「うん。という訳でこれも着てみて」

そこにあったのは女性が着る服だということとは間違いないのだが

「拒否権は……ないんだろっな」

という訳で着せられたのは

「それじゃ、ここに書いてある通りに言ってください」

とシャーリーにメモを渡された。

(くっ、やるしかないのか！)

ティエリアが来ている服は主人に尽くす者の格好。とはいえバトラ
ーではなく……メイド服だった。

そして役作り

「おかえりなさいませ」

『うおおおおおおおおお……!!!!!!』

男性局員全員(先の3人を除く)が雄叫びをあげた。

いつの間にかティエリアのコスプレ会なるものが開かれてしまった。

その映像をデータに残すものなどもない一瞬パニックになったが、

さすがに悪乗りしすぎとはやて、リン、シャーリー、シャマルは
なのは達にきつい罰が下ったという。

その日の最後にティエリアはこう語った。

「地獄だ、生き地獄だ」

彼の思い出したくない悲惨な過去の思い出が1ページ増えた日であった。

ちなみにその映像データだけはすべて処分し、

「みんな、今日のごとは頼むから忘れてくれ」

と、念入りに何度も言っていたという。

番外2、ティエリアの厄日（後書き）

いやーカオスwww

さーて逃げるか…

「ハイパーバースト完全開放」

ズド

ンー！

じ、次回は、少し真面目な回です………（がく） 気絶

番外3、トランザム対策と新たなるシステム（前書き）

今回は短いですが後のふせんでもあります。

番外3、トランザム対策と新たなるシステム

そこはデバイスルーム。

ここではデバイスの調整、点検、強化、制作等を行っている部屋である。

「いやーなのはさん達には怒られちゃいましたけど、あのアーデさんは綺麗でしたねー」

「ですね。リン曹長はどのティエリアさんの格好が一番ですか？ちなみに、わたしはあのメイド服です」

「そうですねー私はウエディングドレスでしょうか」

と3日ほど前にあったティエリアのコスプレ会のことを思い出してリンとシャーリーは微笑み会話をしながら作業を行っている

「はあ、あまり主をいじめないでください」

「そうですね。あれは、あれでマイスターのトラウマなのですから」

と、メンテナンスチェック中のティエリアのデバイスであるセラフイムとセラヴィーは言うが

「「あははは」」

と二人は笑っただけだった。

「ところで、あのシステムの許可はMsはやてから得られましたか？」

「うーん、一応言っておきましたけど……とりあえず1回見てから考えるとのことで、使うかどうかはともかくとして、付ける許可はでたので」

真剣な表情に戻り、会話をする。

「でも、相当危険ですよ。アーテさんの気持ちもわかりますけど、前例もありませんから、どうなるかもわかりませんし」

「しかし、現状で私が行った計算では、主テイエリアがリボンズに勝てる可能性は3%です。トライアルシステムがあるとはいえ、今はMsなのはとの戦闘時に未完成のまま使ってしまったため、データの調整中で使えません」

セラフイムは冷静に分析した結果を報告する

「でも、こんなの……無茶過ぎますよ」

「確かにMsリインの言う通りですが、使いどころを見極めればいいですし。なにより、マイスターはそう言うことはよくわかっているはずですよ。それに……」

間を置いてセラヴィーは言う

「このシステムは、我々だからこそできる、唯一無二のシステム。対リボンズ戦を考えた結果によるものです」

「確かにアーデさんから渡されたこのガガシリーズとリボーンズガ
ンダムの戦闘パターンをデータを見た限り、今の私たちじゃ、ガガ
シリーズはリミッターを外して互角かどうか。リボーンズに関して
は、歯が立ちそうにもありませんけど……」

「だからこそマスターは昨日も……」

昨日、訓練場にて

その日はフォワードの4人だけでなく、隊長、副隊長も訓練に参加
していた。

その訓練は……

「レバンティン！」

「カートリッジ……」

「させはしない！……」

カートリッジを使われる前にシグナムにティエリアは蹴りを入れた。

「ぐっ！」

何とか防ぎ、次の攻撃に移ろうとするが

「速すぎる……ぐあっ……」

再び攻撃を受けてしまう。

「これで終了だな……トランザム解除」

「解除。チャージを開始します」

そして着地をすると同時にモードセラフィム状態のティエリアは膝をついた

「マイスター、少し休んでください。対トランザム訓練のためにはいえ、もうこれで10回目。限界時間にならないよう、解除してチャージを行っても、あなたの疲労は溜まっていくですよ」

「大丈夫だ。このくらい……」

そしてついに倒れた。

「ティエリア！」

なのは達は駆け寄る。

「魔力の使いすぎだよ！今日はもう……」

「いや、はあ、はあ、まだいける。……はあ、はあ、万が一、君達が彼らに襲われたときに僕がいなかったら……どうすることもできない。せめて、トランザムの対策だけでもしなくてはいけない」

「けど！」

「それに、いま無茶をしても、君達を守る可能性が少しでも上がるのなら、それに賭ける」

そう、それはティエリアの想い。自分のせいで仲間を失うのは嫌なのだ。イノベイド達の戦いに彼女たちを巻き込むことになったのならなおさらに……。

そしてその日の丸々使って訓練し、その翌日の今日は医務室で休養を取っている。

「トランザム対策のために昨日マイスターが行ったトランザム発動回数は20を超えています。それだけでも無茶をしています」

「確かに、今日は1日中寝ていますよね」

「アーデさん、どうしてあそこまで自分に重荷を乗せようとしているのでしょうか」

シャーリーとリインは不安そうな顔をする。

「……4年前、主はロックオン・ストラトス、ニールの死の原因が自分にあると、まだ心の中で思っています。だからこそ、自分を犠牲にしても仲間を失わないようにしているんです」

「それに、マイスターはソレスタルビーイングです。重荷を背負うことぐらいは承知済みでしょう」

「」
「」

2人は少し黙っていたが

「このシステム、正直付けるのは気が引けますが………なのはさん達が危険な目にあったら、ティエリアさんは悲しむと思います………不本意ですけど、やりましょう！」

「それに、アーデさんの無茶や勝手は、それをする前に私達が止めればいいだけです！」

2人は決意を決めて作業に取り掛かった。

「ありがとうございます。………それと、」

と間を置いてセラフィムは言う。

「あなた方が隠し持っている。主のあの映像は消去してもらいます
」
「よ」

「「あ、ばれてたんだ」「」

ということでした。2人はそのデータを消したのだった

番外3、トランザム対策と新たなるシステム（後書き）

さて、今回セラヴィーとセラフィムが言っていたシステムとは……

ヒントは、セラヴィーとセラフィムの2つだからこそできる。

まあ、頭のいい人はたぶんなんとなく分かるとは思いますけど……

答えは休日編で明らかに！！

16、休日と動き始める者（前編）（前書き）

〇〇の映画、それが自分の地元で放映すころにはもうその小説が出ている件について……orz

（T A T）

16、休日と動き始める者（前編）

テイエリアが過去を話して2週間が過ぎた。

この日の朝、フォワード陣の第2段階の見極めテストで4人とも見事に合格した。そのご褒美として、訓練は明日からとなり、今日は丸1日休み。テイエリアの訓練も皆だいぶ上達してきたので今日はテイエリアも休み……なのだが、

「はい、テイエリア、仕事はいいから休む」

「いや、しかし……」

書類整理をしようとしていたところをなのはに見つかり仕事はいいと言われてちよっと強引に部屋からだされた。

「むむむ……」

今朝からこんな感じである。仕事をしようとしたら皆が止めに入る。

「ということなんだが、どうすればいい？」

「で、何で俺に聞くんだよ？」

テイエリアはヴァイスに休みの過ごし方を聞いていた。

「聞けそうな人物が君しかいなかったからだ」

ヴァイスは深く溜息をついた。

「で、お前は休日をどう過ごしたらいいかだったな」

「ああ」

ソレストルビーイングにいた際は休息の時間もほとんどなかった。一度だけプロレマイオス内でスイーツパーティーがあったが、それだけ。5年前など休む行動すらしなかった。

故に、ティエリアはどのように休日というものを過ごせばいいのかわからなかった。

「あー、俺に頼るのは嬉しいんだが、そう言うのはやっぱり、自分で知るべきだと思うぜ」

「自分で知るべき、か……」

そう言われはしたがどうすればいいのかも分からなかった。そんなとき、

「あ、ティエリア」

「ん、フェイトか」

廊下を歩いているとフェイトとばったり会った。

「ティエリアは、どこかに遊びに行かないの？」

「遊んだことなどないからな。そもそも、丸1日休日というのがなかったからな」

テイエリアはたとえトランザム対策の訓練の次の日でも、医務室で半日は寝ていたが無理をしないように仕事はしていた。

「それじゃ、私と街に出てみる？」

「それはありがたい。是非頼もう」

ということと今日の予定は決まったが、実はこれには裏があった。

数分前、部隊長室にはやて、なのは、フェイト、リインが集まっていた。

「やっぱり、テイエリアはお休み与えても仕事モードか」

はやては、なのはから情報を聞くとそう呟いた。

「でも、たぶんテイエリアは知らないんだよ。休日にするかどうか遊ぶこととか」

フェイトがそう言うと4人は暗い顔をする。テイエリアは今までずっと闘い続けてきて、仲間を守るために皆に訓練もしていた。

「それじゃ、なのはちゃんかフェイトちゃんがテイエリアと街に行ってもらいたいんやけど、ええか？」

「うん。わかっ……」

「ストップです！」

なのはがわかったという前にリインが止める。

「どうしたのリイン？」

「何か問題があるの？」

となのはとフェイトが聞くと

「大あります。そんなことしたらアーデさんがなのはちゃんかフェイトちゃんを好きになるかもしれませんか！！」

「……………え、それって、まさか……………」

はやてが今にも信じられないなと言いたそうな顔をして言う。

「はい！私はアーデさんが好きです！ラブです！」

と胸を張ってリインは言った。

「ええと、リイン、あんな……………」

「止めても無駄です！恋に年齢も身長も性別も関係ありません！」

「いや堂々と言ってるけど、問題あるからな、全部！」

と冷静にツツコミを入れるはやて。

なのはは唾然とし、フェイトは何か言いたそうだが言えない様子であった。

「という訳で、今日は私がアーデさんを……」

とその先を言う前にドアが開いてシャーリーが入ってくる。

「失礼します。リイン曹長、メンテナンススチエクがあるので、デバイスルームに……って、私、何か場違いな時に来てしまいましたか？」

「いや、シャーリー、ナイスタイミング。グッジョブや！」

リインは泣きながらその場をあとにした。

「それで、なのはちゃんとフェイトちゃん、どっちがええかな？」

その結果、くじをやってフェイトに決まったのだが……

(これって、もしかして……デートなのかな?)

そう思うとしだいにフェイトの顔が赤くなった。

「どうしたフェイト？顔が赤いが、熱でもあるのか？」

しかし誘われた当の本人のティエリアはそれは分からないのでいた。

鈍感なのではなくて、そう言うのを知らないだけである。もしここでティエリアに「私と付き合ってください」と言っても「構わない

が、どこに行くんだ？」と普通に返すだろう。

「だ、大丈夫だから、行こう」

「？」

疑問は残っていたが、とりあえず今はフェイトについて行くことにしたのだった

2人は初めに衣服関係のお店に行くことにした。ティエリアはその時に一瞬体が「ビクッ！！」としていていた。まだこの前のことがトラウマらしい。

しかし入ってみるとすぐに落ち着き、ティエリアの衣服を選んでいく。

私服は持っていなかったからちょうどいいのでここで買おうということになったのだ。

「うん、これなんかいいんじゃないかな？」

「あまりこういうものを着たことがないから分からないが、似合ってるかどうか」

5年前はに着ていた服はどちらかというと地味なほうだった。というより、おしゃれというものをしようとは思わなかった。それは今日までそうだった。

そして今ティエリアが着ている服は先程お店で買ったもの。

どうやら随分気に入ったようである。

次に向かったのは本屋。ティエリアが別の世界の歴史、技術、考え方などを知りたいと言いだしたのがきっかけである。

「すげー、なんだあいつ」

「あんな読みかたのでよくわかるな……」

と周りがざわめくのも当然、ティエリアはパラ読みただけだと言うのに、その内容をこと細かく覚え、よくわからない部分に関してはフェイトに聞いているが、それでも本の中身を理解していなければ聞けないようなもばかりであった。

で、結局気に入った本をすべて買い、後で送るように頼んでいた。ちなみに買った本の数は20冊以上。その内容は全て記憶している。

続いて向かったのは喫茶店。

そこで向かい合ってお茶を楽しむ……はずだったのだが

(ど、どうしよう……ティエリアの顔が見れない)

フェイトは先程リンが言ったことを思い出し、どうしても意識してしまっていたのだった。

「やはり顔が少し赤いぞ。気分が優れないのなら、戻った方が……」

「ち、違うの！そういうのじゃないの！」

「そ、そうか。ならいいんだが……（わからないな。なにを焦っているんだ？）」

（ど、どうにか、話を、話題を……）

2人とも思考は違うが困っている様子であった。

「そ、そういえばティエリアって、リインのことどう思ってる？）
って、何で私こんなこと！？」

フェイトのそんな感情のことなど知らずティエリアは質問に答えた。

「リインはソレスタルビーイングの仲間の1人、ミレイナの性格によく似ている。あかるくて、みんなのムードメーカーのような……
大切な仲間だ」

「仲間……」

「もちろんそれは、なのはとはやて、守護騎士に、ロングアーチの
皆、フォワードの4人、そして君もだ」

フェイトはそれを聞いて少し複雑な気持ちになった。

（仲間……やっぱりティエリアは、1人の女性としては見てない
んだ）

「だからこそ、僕とリボンズ達イノベイドの戦いに巻き込んでしまったはじめをつけなくてはならない。…皆を、守るために……………」

その言葉を聞いてフェイトは思った。

(テイエリアは間違いなく私たちを守る。その為に、罪を上乗せしようとも、ルールを破ってでも、自分の命を捨てても……………)

その想いはわかるが、それはフェイトにとってはとてつもなく悲しく思えた。他人のために自分を犠牲にする行為は、結局悲しみを生むのだから……………

「あのね、テイエリア」

「どうした？」

だからこそ、その想いを少しでも変えたいと、

「じつは、私……………」

フェイトは自分が今何を言おうとしているのか分かっていて、しかしその言葉に偽りは無い。だから、言おうと、そう決めた。

「私は、テイエリアのことを、」

しかしその先の言葉を言う前にデバイスからアラームが鳴る

「これは、キャロからの全体通信？」

「なにがあつたんだろう」

2人は心配しながら通信を聞く。

<こちら、ライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します！>

キャロが少しあわてた感じで報告をする。

<サードアベニューF23区画の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見>

その報告を聞き、真剣な表情になるが次の報告でさらに驚く。

<ケースを持っていたらしい小さな女の子が1人……>

<女の子は、意識不明です>

キャロのあとにエリオが続けて言う。

「ティエリア」

「ああ。どうやら、休みはここまでのようだ。ここからさほど遠くもない。急いじ」

そして2人は早速現場に向かった。

(しかし、なぜそんな小さな女の子がレリックを……)

疑問を持ちながらティエリアは走る。その先にいる少女が、自分を

再び変革させるものとは知らずに…

そこはスカリエッティのアジトとも違う、別の場所。周囲の壁は白く、その壁から様々なデータが飛び交う。

「それにしても、いつ完成するのかしら。これ」

近くにあるソファーに横になっていたヒリングが言う。

「もうそろそろでしょうね。……それにしても、スカリエッティはなかなかの天才ですね。まさかあたえた情報だけでここまで」

と、珍しく人に感心しのかリバイブが言う。

「まあ、いずれは捨てる駒なんですよ……リボンス」

ヒリングは奥の白い部屋とは対照的な黒い椅子に座ったリボンスに言う。

「ああ、そうさ。けど、それまでは使うよ。ちょうど、新しい任務だよ」

「まっりました」

楽しみにヒリングは言う。が、

「今回は私とブリングだけですよ」

「えーなんでよ」

不満そうにヒリングはリバイブに言う。

「前回の戦闘の怪我はまだ完全に完治していない。それに、君のデバースも修復中。わかったかい？ヒリング」

「ちえ、まあいいわ」

リボンスに言われて残念そうにつぶやいた。

「では、行くとしましょうか。参戦するタイミングは？」

「向こうが失敗したり、危うくなったらこちらに任せるとのことだよ」

聞いてきたリバイブにリボンスは答える。

「そうですか……それは出番があるか不明ですね」

「まあ、あんな出来損ない共でも、そこらの人間よりは強いし。まあ、あたしらには劣るけどね」

「ああ。さて、僕らの計画のために、動くのでしょうか……」

どこまでも人を……いや、他者を見下すその眼。そして、無限の欲望のスカリエッティをも駒として扱う。それは、まるで変わっていない歪み。

歪みはただひたすら、狂喜の笑みをしていた

16、休日と動き始める者（前編）（後書き）

さて、次回ついにティエリアの新システム登場です。

ちなみに次回ティエリアもリミッターを解除しますが……

その新システムとトランザムをつかったことで大変なことに!!!

17、休日と動き始める者（中編）（前書き）

というわけで、今回新システムが出ます。

17、休日と動き始める者（中編）

ティエリアとフェイトが、キャロから送られてきた通信場所に着くと既にスバル、ティアナが来ていた。

状況を確認したところケースはもう一つあるらしい。話しているとなのは、シャマル、リンもヴァイスのヘリで来た。

「シャマル、その子の容体はどうだ？」

「バイタルは安定してるし、危険な反応もない。……心配ないわ」

ティエリアはそれを聞くととりあえずほっとした。他のメンバーもそうであった。

「ともかく、この子とケースはこのままヘリで搬送するから、皆はこっちの調査をお願い」

「……はい！」「……」

なのはがそう言うと4人とも力強く答えた。

「ティエリアさん。この子をヘリまで抱いていってもらえる？」

「ああ。わかった」

シャマルに頼まれて気を失っている女の子を背に抱いた。

（しかし、こんな幼い子までも………いつたいこの子は、何者なんだ

?)

そんなことを考えながらティエリアはへりに向かった。

白い部屋。そこに1つの影があった。……リボンス・アルマークである。

「ふむ、なるほど」

スカリエツティから送られてきた今回の目標の情報を見たリボンスは笑みを浮かべる。

「これは、使えるかもしれないね………デヴァイン」

「なんだ」

近くいたプリングと同タイプのイノベイド、デヴァインに話しかける。

「予定変更だ。君も出てくれ」

「?いきなりどうした」

リボンスがいきなり予定を変更したので理由を聞いた。

「……もしかすると、僕らの仲間になれるかもしれない逸材を見つけたのさ」

と笑みを浮かべてリボンスは言った。

レリックを狙いガジェットが地下水路と海上に現れた。

地下のほうはフォワードの四人にまかせ、ヴィータとリンは海上の南西方向の敵を、ティエリア、なのは、フェイトの3人は北西方向の海上の敵をそれぞれ倒すこととなった。

そしてビルの屋上で3人が並んでいる。

「それにしても、随分あの4人も立派になってきたな」

ティエリアは最近までのフォワード4人を見てきた感想を素直に言う。

「だいぶ頼れるようになった？」

それにつづいて、フェイトがなのはに聞く。

「ふふ、もっと頼れるようになってもらわなきゃ」

「手厳しいことを言うものだ」

となのはが言ったことにティエリアは苦笑しながら言った。

「それでは、行くとするか」

フェイトとなのはが頷く。

「……セットアップ」「」

3人はバリアジャケットを装備した。

「早く事件を終わらせて、また今度、休みの時に一緒に遊ぼう」

「ああ。その時は、みんなも一緒に」

「うん」

そんな会話をしながら、3人は北西の海上へ向かった。

戦闘が開始されるともう圧倒的だった。

「ツインバスターキャノン、高濃度圧縮粒子、解放」

引き金を引いた途端に2つの光が一直線に敵を消滅させる。

「プラズマランサー、ファイヤー!!」

「アクセル、シューター!!」

ティエリアの砲撃から逃れた敵は左右からくるフェイトとなのはの攻撃で破壊される。

(……妙だな)

戦況は有利にもかかわらず、ティエリアは疑問に感じていた。いや、

あまりにも有利に進み過ぎているからこそ感じたのだろう。

「だいぶ落としたね」

「うん。そうだ……ティエリア、どうしたの？」

フェイトはなのはに「そうだね」と言う時にティエリアの顔を見てそう言った。

「いや、考えすぎかもしれない。ともかく、今は目の前の……！！
あれは」

見つめる先にいたのは……

「敵の、増援？」

しかしその数はあまりにも多かった。

「数で押そうとも……！！」

GNバズーカ？を連結させてバーストモードとなる。

「圧縮粒子、解放」

球体型の砲撃は敵を全て破壊……せずに何機かは通り抜けて行った。

「！？これは……」

「幻影と実機の混成編隊」

ティエリアの疑問に対してフェイトが言う。

すると敵がミサイルを放って攻撃をしてくる。ティエリアはGNフィールドを広げて2人を包み込むように展開する。

「どうやら、敵の狙いは僕達の足止めだな」

ティエリアは冷静に状況を把握し、この幻影の目的の狙いを述べる。

「ということとは……」

「ああ。ヘリカ、それとも地下の方が、狙われる」

どうするか考えを練ろうとしたとき、

「2人はヴィータと一緒に……ここは私が」

フェイトがここに残りティエリア、なのはとでヴィータと合流してフォワードとヘリの護衛を頼んできた。

「限定解除して、広域殲滅でまとめて落とせるから……」

確かにその通りではあるが、この時、ティエリアはある策を考えていた。

「いや、ここは僕が残る」

「ティエリア……でも、」

「殲滅戦に関しては、僕の方が上だし、機動力のある君達が行った

方が得策だ。それに……」

そう、いまのティエリアには……

「新しい切り札もある」

そう言ったすぐ後、

<割り込み失礼>

はやてから通信が来た。

「はやて！」

「はやてちゃん！なんで騎士甲冑！？」

<たぶんフェイトちゃんと同じ。いやな予感を感じてな。クロノ君から私の限定解除許可を貰うことにした>

（クロノ？たしか、資料で見たが、フェイトの義理の兄、クロノ・ハラオウン提督のことか。しかし、随分と大物がかかわっているんだな……）

ティエリアの中に疑問点が浮かんだが、とりあえず今は任務に集中した。

<空の掃除は私が……「僕もやらせてもらおう」「ティエリア……まさか、あれを？>

はやての「あれ」という言葉に反応していたのは、はやての他には

ラインとシャーリーだった。

「ああそうだ。あのシステムを使う。まだ誰も使ったことのない、
新たなシステム」

「最強のカートリッジシステム」

「最強の、」

「カートリッジシステム？」

フェイトとなのは続けて言う

<せやけど、そのシステムは、>

「1回みてから、考えるのだろう？なら、その1回目が今回だ」

と、言うとはやては、「はあ」と溜息をついた。

<わかったけど、あんまり無茶はしないこと>

この忠告ともいえる命令にティエリアは

「……胆に免じておく」

とだけ言った。

<ともかく、空の敵は私とティエリアで掃除しておくから、なのはちゃんとフェイトちゃんはヘリの護衛。ヴィータとリインは、フォワード陣と合流。ケースの確保を手伝ってな>

<<了解>>

ヴィータとリインの2人はそう言ったあとにすぐさまフォワードのメンバーの元へ向かった。

「はやて、先に僕から行く」

「うん。私もすぐに攻撃に入るよ」

それを聞いた後、ティエリアは上昇していき、雲の上まで出る。

「いくぞセラヴィー、セラフィム！」

「了解」

ティエリアは大きく息を吸い、眼を閉じ、意識を集中させる。

「リミットリリース」

「解除」

ティエリアに付けられたリミッターが外れる。そして…

「…………モード、GNHW（GNヘビウエポン）／、」

その名を告げる。

「ビームプラスト
BB」

光がティエリアを包み込む。そして、そこにいたのは以前になのはと戦った時武装だが、セラヴィーの肩のGNフィールド発生装置とセラフィムの腕に当たる部分のキャノンに着いたバーニアは前とは違い、カートリッジの弾丸が詰まっている。

「見るがいい。これが新たなる力！セーフティロック解除」

「解除」

ガキンと言う鈍い音がする。

「いくぞ、カートリッジ、ツインロード」

「カートリッジロード」

2か所から葉莢が出てくる。

「ダブルバズーカ、ハイパーデリートモード!!」

「「ハイパーデリートモード」」

ハイパーバーストの上に行く砲撃。

「トランザム!」

「「トランザム始動」」

トランザムを起動し、さらに砲撃力を上げる。

「な、なにあれ?」

「すごい……!」

なのはやフェイトだけでなく、その光景を見ている者すべてがそう
眩く。

それもそのはずだろう。ホテル・アグスタ撃つた時の砲撃の200
倍は余裕で超えている大きさの持った球体型のエネルギー。それは
まるで、小さな太陽と言ってもいいのだ。

「出力200%までに上昇完了」

「ツインカートリッジシステム、現在安定中。超高濃度圧縮粒子、

チャージ完了まで、あと3秒…チャージ完了」

テイエリアは目標地点に狙いを定める。

「撃てます」

「ハイパーデリーター、完全開放！」

放たれた砲撃はまっすぐ敵へと猛スピードで向かっていくそれを避ける暇もなく敵は飲み込まれる。

そして、目標地点に到達した瞬間、周りの幻影も、実機も、周囲の雲も、『デリート』その名の通り、跡形もなく消えた。

「……………」

<<<……………>>>

誰もがその光景を黙って見ていたが、ロングアーチのシャーリーから連絡が来る。

<<< 敵、幻影も含め、60%が消失!!>>>

誰もがその破壊力に唾然となっていた。

「チャージモードに入る。後は頼んだぞ、はやて」

<う、うん。想像以上やな>

これが新たなテイエリアの力……ツインカートリッジ。

本来なら、普通のデバイスでは無理だ。だが、ティエリアは2つのデバイスを『同時に起動している』故に、2つのカートリッジシステムも同時に使える。

ツインドライブシステムの発想から、ティエリアが考え出したこの新システムは、もちろん反対が多かった。なにせ、カートリッジとは、限界を高めた魔力を引き出す、一種のドーピング。それをもし同時に使うのだとしたら……

たしかに、力は格段に上がる。しかし、使っている本人には凄まじい衝撃やら、疲労が一気に来る。

いや、前例がないからそれすらも分からないが、少なくともそのくらいリスクはあるのだ。しかし、

【リスクがあっても、現状を打開するだけの力は必要だ】

などティエリアが何度かはやてに頼みようやくとりつけることを認めたのである。

「まったく、私も負けてられんな……第一波いくで!!」

同じく雲の上にまで上がり、はやても砲撃を開始した。

そのころ地下では

スバルの姉ギンガと合流し、ともにガジェットと破壊しながらケ―

スのある地点につき、見事ケースを発見した。

しかし、召喚師のルーテシアとその四つ目の人型召喚獣のガリユールが襲い掛かりさらには烈火の剣精アギトと言う全長がリインと同じほど少女が駆けつけてきた。

なんとか応戦はしていたがそこにとんでもない者まで来た。

「はあ、はあ、何でこんな時に、こんな所に！」

ティアナは愚痴をこぼしながらも攻撃する。

「GNフィールド」

展開したフィールドによってティアナの攻撃は弾かれる。

「さて、君達に恨みはないが、ここで消えてもらおう」

5人はその相手、ブリングと呼ばれるイノベイドと対峙していた。

ツインカートリッジについて

セラヴィーのバリアジャケットを装備し、セラフィムが背中にある状態でのみ使える。

2つカートリッジによって魔力は通常のカートリッジよりも格段にアップする。

ツインドライブと同じ原理で、一時的に魔力は2乗化される。

使用面することによつてできるもの 砲撃 (デリートモード)、防御 (????)、機動面 (????)。

17、休日と動き始める者（中編）（後書き）

さあ、次回は機動六課とイノベイドの全面対決が……あるかもしれない

18、休日と動き始めた者（後編）（前書き）

どうもです

最近暑さでまいつてるKTです

今回はツインカートリッジを使った防御技が出ます

正直言います。

チートだろこれ！！（お前が言つな）

でも完全なチートではありません。そこん所の解説もあります。

18、休日と動き始めた者（後編）

「さあ、それを渡せ」

ブリングはケースを持ったティアナに言う。

「はああああああ！！！！！！」

隙をついてスバルとギンガが左右から攻撃を仕掛ける。しかし

「うそ！」

「なっ！」

その攻撃はGNフィールドで防ぐこともせず、素手で止め、

「ふん」

そのまま放り投げて壁に激突した。

「スバル、ギンガさん！！」

「むだだ、君達のような少しばかり人間の上を行った存在ごときが、我々に勝つなど不可能」

どこか機械的な感じでブリングは淡々と言う。

（…………こいつは、やべー。なんかがやべー！！）

アギトは呆然としていたが、それを見た瞬間に感じた。プリング達は普通ではないと。

一応、アギト達もある程度はスカリエツティのほうから彼らのことを聞いていた。しかし、それは次元漂流者ということくらいで、イノベーター（本当はイノベイド）のことは何一つ聞いていない。

「君達は人間は、我々イノベーターに従えばいい。そすれば、命くらいは見逃す」

「!!!」

それを聞いた瞬間ティアナは改めて理解した。

（本当にティエリアさんの言った通り、人を見下してる）

彼女の中に少しばかり怒りが出たがそれを抑える。怒りは人を強くするが、同時に冷静さも失うからだ。

「それに、君の武器は射撃型、勝ち目はゼロだ」

「!!!」

この時。ティアナは勝利をほぼ確信した。

同じくエリオはガリユと戦っていたが何度か攻撃をあてることに成功したものの、大ダメージには至らず、少しずつ追い込まれていた。

「くそ」

キャラは先ほどから、ルーテシアを止めるためフリードと共に戦っているが魔力の強さに、何とか防御しているが時間の問題だ。

「ぐっ、ぐうううう!!!」

ガリユーの猛攻を防ぐしかしそれもつあと数分も持ちそうにもなかった。

再びティアナとブリングの戦い。

「……あなたがたのことは、ティエリアさんから聞いていますよ」

「？」

ブリングは「なにが言いたい」と言いたげな顔をする。

(スバル、ギンガさん。もしかすると、こいつの動きを止められるかもしれない。合図と同時に攻撃して。ヴィータ副隊長が来るまでの時間稼ぎのために)

その際にティアナは念話を使い作戦を伝える。

「あなた方はイノベーターではなく、イノベイドだそうですね」

「ふん。何を言うかと思えば、我々こそが人を導く者、イノベーター革進者だ」

「そうやって人を見下してるから、自分のことすら分らないんですよ」

その言葉ブリングにとっては怒りを買う言葉だった

「そうか……戯れ言はもう終わりだ」

正面から一気にたたみかけるため、GNビームクローを出し、切り裂こうとする。

「終わりだ」

ブリングの失態は3つ。怒りに囚われて一直線で攻撃したこと。肩腕だけで攻撃したこと。もう1つは、

「なに!!」

ティアナが接近戦ができないと思ったことだ。

近接戦闘用のクロスミラージュモード2、『ダガーモード』で攻撃を防ぐ。

「その程度!!」

さらにここでもブリングはミスをしている。GNビームクローをすくにも1つにまとめて切り裂くべきだった。

「ギン姉、いくよおおお!!」

「ええ。スバル!!」

左右からスバルとギンガが再び攻撃してくる。

「しまった、GNフィールド！」

GNフィールドを展開するが、今回はかりはそれは無駄に終わる。

（確かに硬いけど、ティエリアさんのほどじゃない！！）

GNフィールドを突破してそのまま拳がブリングの顔に入り、数メートル吹っ飛ばされる。

（やった！ナイスティア！）

（喜んでる場合じゃないわよ！今のは相手が油断したからよかったものだし、このくらいでやられる相手なら、わけないわ。エリオとキャラの援護をして、早く撤退するわよ）

そう、目的はあくまでもケースの回収。

なにより、自分たちより強い者がいるのなら、戦闘は避けるのがいい。

ティアナがそう考えていると天井の壁を破壊して、ヴィータとリンが下りてくる。

「捕らえよ、凍てつく足枷……」

リンが呪文を唱えると魔方陣が展開される。するとアギトとルーテシアのまわりから水が渦巻き、囲むように出てくる。

「フリールフエッセルン!!」

その呪文を唱えた瞬間、それは一気に凍り、氷でできた檻となった。

「ぶつとべええええ!!」

壁を破壊した時と同じくギガントフォームのままでエリオと戦闘中のガリユーに攻撃をする。

ガリユーはそれを防ごうとなんとか左腕を出して防御するが、防ぎきれず、そのまま近くにあった柱に吹っ飛ばされ、それでも勢いは消えることなく、壁に激突しその壁も突き破ってその向こう側まで飛ばされた。

「……………」

先程まで苦戦していた相手をあつという間に倒したヴィータに全員啞然としていた。

「ティアナ、イノベイドと接敵したみてーだが、大丈夫だったか」

「向こうが油断してくれたおかげで、なんとか……………」

それを聞いて安堵した後ヴィータはガリユーが吹っ飛んだ壁の向こうを見たが既に逃げられており、舌打ちをした。

「……………逃げられた……………」

リンの作った檻の下に穴ができていた。そこから逃げたのだろう。

「！！イノベイドも消えてる」

ここにいるものは知らないがブリングはすでにリボンスから別の命令を受けて移動していた。

すると今度は地面が揺れ出す。

「な、なんだ」

「大型召喚の、気配があります、たぶんそれが原因で」

ヴィータの疑問にルーテシアと同じく召喚師のキャロが答える。

「ともかく脱出すんぞ！スバル！！」

「はい！」

スバルのウイングロードを使い皆脱出していった。

一方、時空管理局 ミットチルダ首都地上本部の展望台にて

レジラス・ゲイズがこの空中戦闘のリアルタイム映像を見て、撃っているのが過去に闇の書事件のはやてを見て苛立っていると

「もう1人撃っているようだが、顔が隠れてわからん。何者だ？」

隣にいる自分の娘であり、副官でもあるオーリス・ゲイズに聞いた
「たしか、つい最近に機動六課に民間協力者として入った次元漂流者。名前は……ティエリア・アーデ」

モニターにティエリアの顔が表示される

「なんだと！？こいつがあの男が言っていた」

「はい。おそらく」

苛立ちを見せているレジアスに対し、オーリスは淡々と述べる

「こんなやつが我々に協力すると思えん！！」

「しかし、あの男が言っていたことが事実とは限りませんし、その証拠もありません」

「ちっ！」

舌打ちをした後、改めてモニターに映ったティエリアを睨み、

「イノベーターか……」

そう呟いていた……

そしてそのティエリアとはやては砲撃に専念していた。既に敵機は95%以上撃墜されている

「テイエリア、大丈夫なん？」

「問題はない。チャージしながら撃っている。それに他のシステムは使っていないからな」

「ならええけど……けど」

その先の言葉を言う前にロングアーチから連絡が来る。

<未確認物体接近！大きいです。それに速い！！>

「！！！」

2人は警戒する。

<真下です！！>

そう言われてすぐに2人はその場を離れる。すると雲を払いのけて、巨大な物体が現れる。

「この機体は！」

それは以前戦った、デヴァインの使うMAエンプラスである。

「これ以上はやらせん」

デヴァインはそう言ったあと、左のアームからワイヤーにつながれた突起のようなものを出す。

「!!」

それを見たはやては、すぐに防御魔法を展開したが、

「はやてだめだ、逃げる!」

テイエリアが初めてこの機体と戦った時のことを思い出して言う。
しかし一歩遅かった。

「なっ!?!」

突起は、はやての防御魔法の内部にねじ込まれるように入っていく、
その中から新たなワイヤーが出てきてはやての手足に絡み付き、同
時に電撃も与える。

「きゃあああああああああああ!!!!!!」

「はやて!!」

テイエリアが止めるためにビームサーベルを持ちワイヤーを切断し
ようと攻撃する。しかし、もう片方からワイヤーが射出される。そ
れをかわそうとしたが、

「なに!!」

驚いたことに、エンプラスの腕に当たる部分が倍の4つに増えた。
リボズがあたえた情報にスカリエツティがひと工夫加えたものだ。
そこから当然の如くワイヤーは射出される。その1つは何とか避け
たがもう1つは避けきれず、絡み付き、電撃を放ってくる。

「ぐあああああああ！！！！」

動こうともがくが、完全に絡み付き動けない。

（僕はともかく、このままだとはやてが…いや、皆も危ない！だが僕は、また、何もできないのか！？）

その時、ティエリアの脳裏にロックオン、ニールの時の映像がスロームーションのように流れる。

（ああ。そうだ、守るさ。僕は！！）

そう決めて反撃に出ようとしたときだった

（ティエリア、はやてちゃん！！）

（今すぐそっちに…）

はやてとティエリアの危機に反応したなのはとフェイトが念波で向かってくることを伝えようとした。

（来るな！ここは僕が何とかする！君達は早くへりに！！）

（けど！！）

「（行けえええええええええ！！）」

念波と共に声に出す。

((! !))

それに何かを感じ取ったのか、2人はへりの方へ向かった。

(まったく、無茶をするなど言われたばかりだが……)

と心の中で呟いていた。

「カートリッジ、ツインロード!!」

「「……カートリッジロード」」

カートリッジがロードされるが、その数はセラヴィーとセラフイムから5発ずつ、合計10発のカートリッジがロードされる。

「あ、あかん。ティエ、リ、ア」

はやては、必至でそれを止めようとする。

それもそのはず、ティエリアのツインカートリッジは使う本人に強力な力を与える代わり、その膨大な魔力を抑える体にも負担がかかる、諸刃の剣。故に1回使うごとに(ロードした弾の数によって変わるが)チャージ時間が必要となる。

今回の場合はこれでもまだ最大出力で撃っていなかったが、合計2発でも約10分のチャージは必要となる。しかし、そのチャージが終わっていない場合では使えはするが、体の負担は最初より大きくなる。

さらに、今回ティエリアロードした数は合計10発。ツインドライ

ブと同様であり、魔力は2文化される。

つまり、今ティエリアは、100発分のカートリッジをロードした
と同じなのである。

もちろんそんなことを普通にすれば体がもつはずもない。セラフィ
ムの魔力調整を行うことでどうにか暴走を抑えている。

（体が、ちぎれそうだ……これが、力の代償か）

だがそれでも限界がある。ティエリアは今、己の体の中の魔力に殺
されようとしていた。

「なにをするつもりかは知らんが……消えろ、ティエリア・アーデ
ー！」

危険を感じたデヴァインは一気にしとめるため、中央部を開き、大
型ビーム砲で攻撃する。元来のセラヴィーなら防ぎきることはでき
ない。だが、今の力なら、

「GNフィールド、前方全面展開！」

正面にGNフィールドが展開される。

「なんだと!？」

デヴァインはその光景を見て驚く。ティエリアは攻撃を防いだ。し
かし、ただ防ぐだけではなかった。いや、防いでるとも言い難かつ
た。なぜなら、デヴァインのはなった攻撃は、まるで吸収される様
に、GNフィールドに吸い込まれていっていた。

「GNフィールドリフレクト……。貴様の攻撃、数倍にして返すぞ！」

その瞬間、デヴァインが放った時の10倍の威力はありそうな砲撃が、GNフィールド内から放出される。すぐにデヴァインはGNフィールドを展開する。

「!!こんな、ことが、ばかな……」

だが、それすらも飲み込み、デヴァインはその光景を信じられないまま、エンプラスと共に消滅した。

「はあ、はあ、はあ……」

はやてに絡み付いたワイヤーは取れ、ダメージを随分喰らったが何とか動ける力も攻撃する力も残っていた。

(くっ、止められへんかった! テイエリアの無茶も、行動も!)
だがそんなことよりも、はやては自分たちで決めたことを実行できなかつたことに対しての想いの方が強かった。さらにそこに追い打ちが掛けるように通信が来る。

<市街地に砲撃のチャージ反応! 物理破壊型、推定Sランク! >

「こんな、時に!」

「セラフィム!!」

テイエリアはセラフィムモードになりすぐにその場所へ全速力で向

かう。

「ティエリア…ぐっ！」

「ダメージが深い。しばらく動かない方がいいです。MSはやて」

「けど…！」

今止めなければティエリアが危ないと思ったのだらう。

「今はマイスターより、自分のことを優先してください」

「けど、それならティエリアも…！」

その先を言う前にはやては思い出した。ティエリアが無茶をしても、命を賭けてでも、仲間を守るうとする性格のことを

「そう言うことです。あの方は、今はああいう性格ですから」

セラヴィーの言葉を聞き、さまざまな悲しみが一気にのしかかり、はやては涙を流していた

謎の敵からの砲撃をギリギリのところではがリミッターを外し、エクシードモードに限定解除してヘリを守ったという報告が来たことにより、ティエリアは安堵した。

「セラフィム、トライアルシステムは？」

「現状、79・6完了済みです。……今なら完全ではないとはいえ、8秒ほど、1人を対象になら使えます」

「よし」

「警告します。これ以上の魔力消費とエネルギーの放出は体に異常をきたす可能性大。無理をすれば……」

「やってくれ」

「……………了解」

セラフィムの警告のことはわかってはいる。しかし、今はこれを使うのが一番だと言うティエリアの判断も間違っではなかった。

一方フェイトは砲撃を行った者たちを追っていた。

「止まりなさい！市街地での危険魔法の使用および、殺人未遂の現行犯で逮捕します！」

「今日は遠慮しときます」

フェイトの言ったことに対し、眼鏡をかけた女性、クアットロが小馬鹿にしたように言いながら、隣で砲撃を行ったデイエチと逃げている。

「IS発動、シルバーカーテン」

クアットロがISインヒューレントシステムと呼ばれるものを発動した瞬間、クアットロとデイエチの姿が消える

(まずい！)

フェイト達は先ほどはやてが現在敵との交戦で動けないことを聞いていた。故にこの状況をどうするか一瞬だけ悩んでいたが

「トライアルシステム!!」

直後、光の空間ができる。

「テイエリア!?!」

フェイトはすぐに理解した。テイエリアが無茶をしていることに……

「彼らの動きは封じた!今がチャンスだ!」

言いたいことは色々あったがともかく今は目の前のことに集中したのだった

「クアットロ、どうした!?!」

デイエチは空中で急に動きを停止し、IS解除したクアットロにのそばに来ていた

「わっかんないけど、たぶんこれが、あの人たちが言ってた力……」

クアットロは空中で苦しそうに胸を押さえている。

ISが魔法では動いていない。なら何が起こったか？ティエリアの現在のトリアルシステムは魔力で動く者の動きを止める。つまり、クアットロのリンカーコアそのものが消失し、そのシヨックによって解除してしまった。ただ、このことは当の本人のティエリアは知らないことだが。

「！まずい」

いつのまにか2人は既にチャージが終わったのはとフェイトに囲まれていた。

「トライデント・スマシャー！！」

3つの電撃の砲撃がトライデントの形のように放たれる。

「エクセリオン・バスター！！」

こちらもなのはの十八番と言っていい超砲撃を放つ。

2つの砲撃は同時に命中し、大爆発を起こした。しかし、

「逃げられた」

そう、当たる瞬間に第三者の救援でよけられた。そして、すぐさまロングアーチに頼み場所を特定することとした時だった。

＜先ほどとは逆方向より、新たなエネルギー反応！こちらも推定S

ランク！>

「しまった!!」

もう1人敵はいた。ティエリアは的には砲撃型のガデッサの存在を忘れていた。

すぐさま防ぐため移動しようとしたが

(なんだ?体が……おも、い)

そこで意識は飛び、ティエリアは落下した。

リバイブSide

「チャージ完了」

まったく、リボンスも面倒なことをするものです。こんなことをせ
ずとも、全員でかかれば、あつという間のを……

まあ、我らの力をスカリエツティに見せすぎるもあれですし、今回
はティエリアの力も知れたましたから、デヴァイン1人ぐらいの犠
牲でも十分すぎますが……

ブリングの方も、そのデータをとって既に撤退したでしょうし。

「それにしても、先ほどの砲撃、なんとも軟弱。まあ、所詮はあの
程度ですかね」

私達とは力の差が格段にあるのは仕方ないとはいえ、不甲斐ない。

「敵の位置はおよそ15?以上……」

あの方たちには無理な距離ですが

「……この私とガデッサには容易いこと……!」

私は引き金を引き、飛んでいるへりにを狙い撃った。

「命中……いや、防がれましたか」

煙が晴れるとそこには濃い桃色の髪をし、剣を持った女がシールドを使い防いでいた。

「データか……ここで倒すこともできますが……」

今は1人、トランザムを使うにも距離がある。砲撃もした。

「ここは撤退しましょう。こちらの目的は果しましたし」

相手もこの距離なら追ってこないでしょうし、なにより、防いだとはいえ相当ダメージがあったはず。

「まあ、いずれはやることになるでしょう。それまで、せいぜい生きるといいですよ」

リバイブSide了

歪みは去り、ティエリアは意識不明となった。そして、ある意味、ティエリアは変革していた……

ツインカートリッジによってできる技、防御GNフィールドリフレクトR
砲撃のような攻撃を吸収し、数倍にして跳ね返す。

ただし、使用には必ずカートリッジを合計5発以上は必要とする（ツインカートリッジのため、ほぼ25発分）
また、使った後は防御力は0になり、その日は防御ができず無防備となる。

さらに、防ぎきれないエネルギーだと逆に自分の方に数倍のエネルギーとなってくる

ちなみに今回ティエリアがデヴァインを殺した瞬間を見たのは、はやてとロングアーチのみなのでティエリアが捕まることはありません。あしからず……

18、休日と動き始めた者（後編）（後書き）

力の代償に倒れるティエリア、

セラフィムに現実を告げられる六課メンバー、

目覚めた王の器とそれと対面するティエリア、

そして、変革し、新たな変革がティエリアにいずれ訪れる…

次回、「命と戦う覚悟の理由」

次なる力の代償、それは命か？

てな感じで今回は趣向を変えて予告風にしましたが、どうでしょう
か？

ではまた次回！

19、命と戦う覚悟の理由（前書き）

劇場版00が始まりましたが何度も言うようですがこっちは10月30日です。

でもTVで新しいCMをみてもう興奮しました

楽しみでもう今から眠れません！

とっ、そんなことはいいですね。それじゃ、始まります。

19、命と戦う覚悟の理由

デバイスルームにて、なのは、フェイト、はやて、シャーリーがいた。

セラヴィーとセラフィムは魔力の大量の魔力放出によってオーバーヒートを起こし、ここで修復と調整が行われていた。特に、セラヴィーは直に砲撃を流していたため、そのダメージも大きく今にも碎けそうなくらいにボロボロだった。

「もう、し、わけありません、んMs、シャー、リー」

セラヴィーは修復を受けながら、かたことでそう言う。

「別にいいですけど……修復がすんでも、しばらくはチャージ系の攻撃はしないでください」

「了、解。マイ、スターが、目覚めた後、そう、伝え、ておきます」

そう、ティエリアは魔力の使い過ぎで1日たったと言うのに目覚めていない。

「それにしても私達で止めようと決めたのに、結局止められなかった……」

「しかし、あの場で主があしななければ、間違いなくMsはやては死んでいました」

なのはの言葉に対して修復中のセラフィムが言う。

「けど、あの時私やなのはも向かって…」

フェイトが意見を言おうとするが

「あの距離では間に合いませんでしたし、たとえ間に合っても勝てる確率は低く、さらにヘリの防御もできていません」

現実を冷たく伝えていく。

なのは達は何も言わない……いや、言えないのだ。それが事実だから。

「せやけど殺す必要は!！」

「非殺傷設定付きでは、倒せてもあの電撃が続いています。あの場で打開策は敵の消滅。それしかありません」

「!ならば、テイエリアがああなることをしつとたんなら、どうして……」

「「止めなかったのか?」ですか?」

「!!!」

言う前に先に言われてはやては黙る。

「我々にとって主は大切な存在。ガンダムするときにはなかった感情をもった今でも、それは同じ。だからこそ、我々はその方に警告はしますが、そこから先はあの方の意思を尊重する。それが我々の存

在理由だから」

「そんな……」

4人は暗い顔をする。

「主がいる前では言えませんでした……いま、正直に言います。
あなた方は甘すぎる」

「……！！」「」「」

「それにあなた方は、主がこうするとわかっただけで主が過去を話しても何もしなかったのでは？」

セラフィムは言葉の剣で心を抉っていく

「本当に主にこんなことをさせたくないなら、あの場で封印でも逮捕でもするべきだったのでは？」

「……」「……」「……」

勿論セラフィムはそんなことは望んでなどいない。ただ事実を言っているだけだ。

「結局、あなた方は主を頼りにしている反面、無意識に主を否定し、利用しているにすぎない」

「そんなことは」

「違つても？なら、なぜ主になにもしなかった？それは自分たち

ではリボンズ達にかなわないとわかったからではないですか？どう
なのですか？Msはやて」

フェイトは何も言えなかった。

はやても黙って聞いていた。そして質問をされ、ゆっくりと言葉を
出す。

「確かに、私達だけじゃ勝てへんのは事実やし、そう思われてもし
かたないかもしれへん……けど、」

眼を開く。その眼は覚悟と大きな想いをもった瞳だった。

「私は、私達はティエリアことを利用はしとらんし、否定もしとら
んよ」

「そう言える証拠は、理由は、なんですか？」

すかさずセラフィムは聞く

「証拠なんてないよ……けど、理由はある……」

はやて達は一息置いて言う。

「……私達はティエリアの味方だから、仲間だから……」

なのは、フェイト、はやてが同時に言う。

仲間とは利用するしないではなく、信頼するもの。

仲間は否定するものではなく、信じあうもの。

理由と言う理由でもないかもしれない。しかし、その想いは決して偽りではない。

だからこそ、3人はこう答えた

しばらくセラフィムは黙ったが

「はあ、どうやら私も自我を持ったせいかな、少し甘くなっているのでしょうか？あなた方を根拠もないのに信用している……」

セラフィムは彼女たちの想いと覚悟が本物だとなんとなくわかった。だからこそ、彼女たちを、再び信じることにした。

「ありがとうセラフィム」

「別にいいですよMsなのは。それと、あなた方が主を止めたい理由も、なんとなくわかりました」

「「「???」」」

3人が首をかしげる

「好きなのでしょ？」

「「「!!!」」」

直後、3人は顔をりんごのように真っ赤にした

直球のどストレートだった……

そう、好きだからこそ、ティエリアの進んでいるその茨の道どころか、不毛の荒野と言っていていいところから救いだしたいのだ。

（ほ〜〜これは、ティエリアさんも罪な人ですね）

（マイスターが恋をするとは思いませんが……）

この状況をシャーリーは楽しみながら、セラヴィーは半分どうでもよく、半分あきれていた。

「それと、1つ伝えることがあります。主が気絶して数秒後に気付いたのですが、おそらく……」

セラフィムはティエリアに起った異常を伝えた

時間と場所は変わり、聖王病院の病室にて

目覚めたティエリアの気分は最悪だった。

「うっ……ここはどこだ……」

見るとベットに横になっており、近くには医療機械もあり、服は病院などで患者が着る服に似たものを着ており、個室なともみて、ティエリアはここが病院の病室だと冷静に判断した。

「そうか……僕は魔力の使い過ぎで……！そうだ、ヘリはどうなったんだ!？」

意識が失う前に見たものを思い出す。テイエリアは焦る気持ちを抑えつつ、とりあえず近くにいる人に聞くため、病室から出た。

その5分後。とあることが理由で患者を安全な場所へ避難させるため、看護師が来たが、いないことを見たが、すでに避難した後だと思っただろうだ

そんな状況だと言うのにテイエリアは運悪く人に会わなかった。

そして全員が避難したとも知らずに人を探していたが見つからず、庭の方まで来ていた。

「ここにもいないのか……人がいないにしても、あまりにも静かすぎる」

そんなことを呟きながら庭を歩いていると近くの草木がガサガサと音を立てる

「だれだ!！」

テイエリアは（癖でもあるが）少しだけ警戒してその場所を覗む。が、テイエリアが頭の中で考えた予想とはすべて違い、出てきたのは赤と緑のオッドアイをし、小さなウサギのぬいぐるみをもった小さな少女だった。

（！この子は確か、あの時の……！ということは、へりは無事だったということか）

すぐにその子がこの前の保護した少女だとわかり、それがへりや仲間の無事を確かめることもでき、ティエリアは少しだけ安堵した。

少女は少し脅えたようにティエリアを見る。

（つと、恐がらせてしまったかな？先程まで睨んでいたのだから、当然か）

とりあえずティエリアは近付き

「恐がらせてしまったようだが、心配ない。君の味方だ」

と言って少女の頭をそつとなでる。

「……………」

少女は一瞬びくつとしたが、頭をなでられて目の前にいる人物が怖い人ではないと理解したのか、ほんの少しだけ笑みを見せた。

「僕はティエリア。ティエリア・アーデ。君の名は？」

「……………ヴィヴィオ」

とりあえず自分の名をおしえた後に少女の名前を聞いた。

「君は、なぜここに？」

その後この辺りにいた理由を聞いてみた。

「ママ、パパ、いないの」

「！」

それを聞いてティエリアはそこから先をどうするかを少し悩んだ。

(こづついう場合、どうしていいかわからないが……とりあえず……)

「なら、僕も探す手伝いをしよう」

そう言って手を差し出そうとした時だった。

「……！」

ティエリアは殺気を感じ取ると同時に現れたのはバリアジャケットを身につけ、両手にトンファアの形をした武器を持っているショートカットの女性だった。

「……何者だ？」

ヴィヴィオは持っていたぬいぐるみを落としておびえだす。

ティエリアはヴィヴィオを守るように前に出て、殺気を殺さず現れた女性を睨みつける。

「そこをどいてください。その子は危険です」

「僕から見れば、武器を持った君の方が遥かに危険だと思うのだが」

テイエリアはそうは言うが内心焦っていた。

(さて、どうするか……僕のデバイスは今はないし、この状況で逃げれるとは思えない)

ともかくテイエリアは話を長引かせて時間を稼ぐことにした

「その子は人造魔導師です。どんな潜在的な危険性を持っているか……」

(人造魔導師……資料で少し読んだことはあるが……この子が)

「だとしても、この子は何もしてはいない。それに、君が僕にとつて味方だという証拠もない以上、君を信用することもできない」

2人はたがいを睨み、動かない。

「シスターシャツハ、まってください！」

この動かない状況を動かしたのは横から現れたのはだった。

「高町教導官」

「なのは」

するとなのはは、ゆっくりとヴィヴィオに近づく。

「ごめんね、びっくりしたよね」

落とした人形の汚れを手で払い、ヴィヴィオに返す。

「はじめまして、高町なのはっていいいます。お名前、言える?」

ヴィヴィオは名前を聞かれると怖がる様子も見せず答えた

「……………ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ。いいね、かわいい名前だ」

となのはが話しているとシャツハと言う女性の後ろからシグナムが来た。

(ティエリア、もういいのか?)

(ああ。体には異常はないようだ。それより、あのあとどうなった?みんなは無事だったのか?)

(詳しくは後で説明するが、全員無事だ)

ようやくティエリアは肩の荷が下りた気がした。

「ヴィヴィオ、どこか行きたかった?」

「ママとパパ、いないの」

「!…:…そっか、それは大変だね。じゃあ、一緒に探そっか」

ティエリアが先ほどヴィヴィオに聞いたことと同じことを聞き、そして答えたあと、ヴィヴィオはゆっくりとうなずく。

「?どうした」

するとヴィヴィオがなのはと移動しようとしたとき、ティエリアの方を向いてさびしそうな顔をする

「きっと、ティエリアにも来てほしいんだよ」

「…そうなのか？」

ティエリアが尋ねるとヴィヴィオはうなずく。

「……………わかった。僕も一緒に探すと言ったんだ。約束は守らないと」

そう言っつてヴィヴィオの隣へ来ると、ヴィヴィオはティエリアの手をとった。

特に問題はないのでティエリアは何も言わず、その小さな手をつないでなのはと共に歩きだした。

その数時間後、機動六課のデバイスルームにて

「やれやれ、さっきはどうなるかと思った」

テイエリアの言うさつきとは、帰って来てからのことである。

検査の結果テイエリアの体に異常は見つからなかったため、すぐに戻れた。

が、戻った後になのはがセラフイム達のいるデバイスルームに来てくれと言われ、フォワード陣にヴィヴィをまかせて去ろうとしたが、ヴィヴィオが隊舎全体に響き渡るかのような大声で泣き出した。

さすがにもうどうするかもテイエリアには判断できず、困り果てていたが、そこにはやてとフェイトが来て、フェイトの説得でヴィヴィオはどうにかなったが…

「まさか、僕があそこまで懐かれるとは思わなかった」

「どうして？」

「いや、僕は悪人顔だと思うし、と言うより実際犯罪者だから、もう少し脅えると思ったんだが」

フェイトが聞いてきたことに対して答えたあと、そこにいる全員がこう思った。

『少なくとも悪人顔ではない』と

「まあそれは今はいいとして……セラフイム、僕の体の異常とはなんだ？検査では、異常は見当たらなかったそうだが」

「結論から言います。今の主は魔力の大量放出、および長時間の内

部蓄積によって、」

セラフィムはなのは達に伝えたことと同じことを伝えた。

「おそらく、血液中のナノマシンが異常を起こし、すでに今の主の体では正常作動していないと思われます」

ティエリアのある意味での変革を伝えた。

「そして、次に今回と同じことをすれば……」

つまりは今回はナノマシンがあつたから、体は大丈夫であつたが…

「今度は……いや、今度こそ、自分の魔力にやられて死ぬか」

「……………はい」

皆、暗い顔をしている。だがティエリアは

「そうか……だが、使う時が来たら使う」

「主、しかし!!」

「そもそも、僕は死ぬ覚悟はある。僕が死んでみんなが守れるならそれで……」

スパアン！スパアン！ビシッ！

言い終わる前に、まずなのはがティエリアの頬を叩き、次にがフェイトが反対側を、最後にはやてが強烈なでこピンをティエリアにく

らわせた。

「?、??、???」

テイエリアは何が起こったのか一瞬理解できなかった。一度こういうことがあったが、その時は錯乱しながらも状況を把握できたし、叩かれた理由も理解できた。しかし、今回はかりはテイエリアもどういうことか理解できなかった。

「そうやって、残った人たちのことも考えないで自分ばかりが犠牲になるうとして」

「それで、テイエリアはええんかもしれん。けど、他の人達を守るからって、」

「その後に残った人たちの悲しみとか、つらい気持ちとかも考えて!もう少し……自分を大切にしよう」

「!!!」

3人の言葉を聞いて「はっ」とする。

自分が昔、初代ロックオンこと、ニール・デイルランディの時に味わったあの気持ちを思い出す

(ああ、そつだ。僕もあの時……)

自分にはなかった他人を思う気持ち。それによって生まれた死の悲しみ。

それがどれだけ酷く、つらく、そして悲しいか嫌と言うほど味わった。

だから、もう誰も失わないように、自分を犠牲にしようとしたが、結局それは他の人を悲しませるだけ。

（はあ、僕は本当に愚かだ……今頃思い出して、今頃気付くなんて）
「すまなかった」

そう言うと3人は笑顔になる。

（ああ、そうだ。僕は彼女たちを守る。けど、僕も生きなきゃいけない……生きるために戦う。そうだろ？ ロックオン、刹那）

この気持ちを忘れずティエリアは進むと決めた守るために、生きるために、そして……未来のために……

それが、ティエリアの新たな命を懸け、戦う理由となった。

19、命と戦う覚悟の理由（後書き）

一応、今回ティエリアパパプラグを立てたのですが……

ごめんなさい。正直まだどうするか決めてません。

まあ、今回書いたようにナノマシンがないのでこっちのティエリアの体は、もう人間同様なを取りますし……でもどうしよ

皆さんの方で意見があったら言ってください。

それじゃ、今回は番外で、その次は「告げられる預言」です
楽しみにしてくれたら嬉しいです。

番外4、歪みの見る夢（前書き）

しばらくの間スランプで死んでいたKTです

本日この番外ともう1話ほぼ同時に出しました。

あとがきはそちらに書いています

番外4、歪みの見る夢

ここはどこだ、なにもない……しるく、本当に何も無い。

そこに1つの人影があった……

【きみは……】

そうだ。間違いない……刹那・F・セイエイ。

僕が助けた、僕が導いた、そして、僕を1度殺した男。

【おまえが……俺が……。あの……おまえに……】

なんだ？何を言っている？

【俺が……】

人間風情が……何を言っているんだ！！

白い空間。この場所は僕達の計画に必要な存在。そこに

「リボンス、次の任務は、私だけでやらせていただきたい」

突然プリングが僕の前に来て、そう言った。

「唐突ね。もしかして、デヴァインの仇？」

ソファーで寝ていたヒリングがからかうかのように聞いた。

「違う。私は、証明するだけだ。デヴァインは無能だが、私と同じ遺伝子を持っている。だから証明する。自分の遺伝子パターンは無能ではないと」

それは本心なんだろうけど、もう1つの目的もみえみえだよ。

「ふ、まあ、いいさ。好きにするといい」

「では、少しだけ別行動させてもらうが、そちらの命令には従う」
そう言ってブリングは去って行った。

「ほんと、デヴァインもそうだったけど、ブリングも素直じゃないわね」

「まったくです。ところで、よかったのですか？ブリングにレグナントのデバイスを渡して」

リバイブが聞いてくる。

「いいさ。それに、レグナントをも超えるデバイスは、いますかりエッティに創作してもらっている」

「これも、ですよ。この世界の技術がどれほどのものかは知りませんが、まさかできるとは思いませんでした」

「駒にしては、いい者じゃない」

そう、駒にしてはいい人材だ。まあ、駒と言うのなら、君達も同じなんだけどね。

「さて、僕らの計画の要はもうすぐ出来上がる」

そうさ。あと少しだ。その為にもティエリアや邪魔者の君には消えてもらわないと……

「それにしても、リボンス……先ほど言っていた夢とは何ですか？」

「そうそう、私も気になった」

2人が聞いてくる。この2人には先ほどの夢の内容は教えてはいないが、夢を見たことは教えた。

「別になんでもないさ。不愉快な夢だよ」

そうさ。刹那・F・セイエイ、純粹種。あんなものなど認めない。

せっかく新たな体を手にし、チャンスが来た。

天はまだ僕に味方している。

幸いこの世界のトップには繋がっている……そろそろ動く時……彼らには消えてもらおう……

そして僕こそが、人類を導き、支配する。

そつだ。これが僕だ。再生の名を持つ者

イノベイドなどと言うものではなく、イノベーター。

いや、神だ！！

「さあ、始めよう。終焉の宴を！！」

歪みは動き始める。そしてそれは、この世界の存亡を意味するものでもあったことを……まだ誰も気付いていない。

計画は継続されていく。崩壊と滅亡までのカウントダウンは……着々と進んでいた

20、告げられる預言

その日、ティエリアは久しぶりにヴェーダへアクセスした。ナノマシンが失われたこの体で正常なリンクができるか試すためだ。

「これは……」

「どうしたんですか？アーデさん」

と、リインが聞いてくる。

ティエリアがヴェーダとアクセスする際、ロストログアの反応がしては六課に危害いつか来ると思ったティエリアはロストログアの反応を遮断するこの特別な部屋でリンクをすることにし、はやてもそれを認めた。

「ヴェーダとのリンク率が上がっている」

リインの聞いてきたことに対し、ティエリアは答える。

「現状リンク率71.1%いまだに我々との世界のイノベイドとの通信は不可」

その理由はわからないが、ティエリアのリンク率は上がった、いや、回復したのかもしれない。

「完全リンクすると、どうなるんですか？」

リインの隣にいるシャーリーが聞く。

「完全リンクすれば、この体がなくても、ヴェーダの一部となって
そこで生きられる」

そう、かつて自分のいた場所、元の世界に帰れるということだ。

「……………」

リインが少しさみしそうな顔をする。

(リイン曹長、ティエリアさんのこと好きって言ってましたし……
どういえばいいか、わからないんですね)

シャーリーは心の中でそう呟いていた。

「この調子なら、そのうち完全リンクができる。そうすれば、」

とその先の言葉を言う前に放送が入る。

<ティエリア・アーデ、部隊長室までお願いします。繰り返します

……………>

「おっと、もう時間か」

「あ、今日でしたね」

そう。この日ティエリアははやて、なのは、フェイトの3人と聖王
教会と呼ばれる場所でこの機動六課の後援者、カリム・グラシアと
クロノ・ハラウンという人物と会うことになっている。

その理由は機動六課の創立の理由と今後のことについてだそうだが

(なぜはやては、僕も呼んだのだろう)

テイエリアは協力はしているとはいえ、民間協力でしかない。そんな人物に、六課のことや今後のことまで話す理由はほとんどない。

あるとすれば、リボنز達のことだが、それも口で説明したり、データを見ればわかるはずなのだ。

「まあ、考えるのは後にしよう(それじゃ、行ってくる)」

そう言ってその場を去ろうとしたとき

「あ、あの、アーデさん！」

「?どうしたリン。何か用事があるのか？」

「いえ、その……なんでもないです」

「?」

リンは顔を赤くして、身体をもじもじさせながらそういった。その行動がテイエリアにはわからなかった。

(鈍いのは分かりますけど、ここまで鈍いものでしょうか……)

シャーリーは心の中で苦笑しながら呟いたのだった……

聖王教会にて

「ここが、聖王教会……」

テイエリアは宗教になど興味はないし、協会にも言ったことなどないため、この場所を少しだけまじまじと見つめる。

そして、教会内に入ると

「おまちしていました」

「！君は、あのときの」

そう、聖王病院で会ったシャツハと言う女性だったのだ

「あのときは、もうしわけありませんでした」

「いや、あの時の状況聞いたが、納得したよ。あの場での君の判断は間違つてもいない。むしろ、信用できる人物に殺気をむけた僕があやまりたい」

そんな会話をして少し空気が重くなった所に、

「まあ、そのことはいまはおいといて、ともかくカリムのところへ行くか」

はやての意見でとりあえずその場の重い空気はなくなり、シャツハは4人を案内した。

そして1つの扉の前に来てノックをする。

「どうぞ」

静かで流れるような女性の声がし、4人は中へ入る。

そこにはシャツハと同じくシスター服を着たロングヘアの金髪で穏やかな笑みをした女性が立っており、その奥には白いテーブルとイスがおかれ、そこに管理局の服装だろうか黒い服を着た男が座っている。

「はじめまして。教会騎士団騎士、カリム・グラシアといいます」

カリムと名乗ったその女性のあとにはとフェイトは敬礼をする

「高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン執務官です」

2人がそう言ったあとティエリアも自分の自己紹介をする。

「…機動六課で民間協力者をやっている、ティエリア・アーデです」

「はい。はやてからある程度は聞いていますよ」

ティエリアはここに来る少し前に、はやてがカリムにある程度ティエリアのことについて教えたと言っていたのを思い出す。

「そうか…君ははやての親友でもあるそうだし、信用に足る人物だと言つのもこちらでも聞いています」

「はい。……あなたの過去については、我々にも言わないことをお約束します」

カリムの言葉だけの約束ではあるが、その言葉は信じられるほどの優しさに満ち溢れていた。

（昔の僕なら、ありえないことだな）

ティエリアは人を結構簡単に信じた自分に自分で少しばかり驚き、心の中でそう呟いたのだった。

「どうぞ、こちらに」

カリムに案内され、男が座っている白いテーブルの前まで来ると

「時空管理局 次元航行部隊提督、クロノ・ハラオウンだ」

黒服の管理局の服を着たクロノがティエリアに言う。

「よろしく」

そう言ってティエリアは隣の椅子に座る。

「クロノ提督、少し、お久しぶりです」

「ああフェイト執務官」

兄妹関係とはいえ、2人とも固い表情と声で言う。

「ふふふ。皆さん、そんなに固くならないで。私達は個人的にも友人です。普段通りでかまいません。それに、ティエリアさんもそんなに硬くならなくてもいいですよ」

カリムがそう言うと

「じゃあ、久しぶりクロノ君」

「お兄ちゃん、元気だった？」

なのはの後にフェイトが言うとクロノは顔少し赤くする。

「！それはもうよせ。お互いもういい年だぞ」

「兄弟関係に年齢は関係ないよクロノ」

「……………」

ティエリアはその光景を呆然と見ていた

「どうしたの、ティエリア」

「いや、いきなりだったから……」

そう、いきなりさっきまでのかたーい感じから今の状況にティエリアはついていけてなかった。

と言うより、こういう会議では普通硬いのが当たり前なのだが、知り合いとはいえこんなふうに会話をしているのが驚きだったのだ。

「まあ、私達はこういう関係やから、公の場所以外では」

「…なんとなくは理解した」

はやてに言われ本当になんとかは理解したティエリアだった。

「さて…ほな、機動六課の設立の真の理由とこれからのこと……それと」

はやてはティエリアの方へ向き言う。

「たぶん、ティエリアのことに關してや」

「僕、の？」

はやて達が言うには機動六課の後見人はクロノ、カリム、クロノとフェイトの母親リンディ。

さらに非公式だが伝説の三提督と言う者たちもこれを認めている。

「ここまで上層の人達が関わっていて、これほど強力な部隊ということは、それだけ重大な何かをするということか？」

ティエリアは自分の考えを問う。

「うーん。正確には何かが起こるかも、かな」

「???どういうことだはやて」

まるで、そうなるかもしれないことがわかっているかのようにはやては言う。テイエリアはそれがどういうことかわからず再度聞くと

「それは、私の能力が関係しています」

はやての隣にいるカリムが答える。

カリムの能力、プロフェーティン・シユリフテン。

これは2つの月の魔力が上手く揃わないと使えないが、世界に起こる事件をランダムに書き写す予言書の作成。しかし、あくまでもランダム。的中率や実用性はよく当たる占い程度とはいえ、信用するにしろしないにしろ有職者の予測情報の1つとしてそれなりに目が通される。

「そんな騎士カリムの予言書に数年前から、ある予言が書き出されている」

クロノがそう言うときカリムは書き出された予言書の1つを読み上げる。

「古い結晶と無限の欲望が交わる地、死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。死者達は踊り、中つ大地の法の塔は、虚しく焼け落ちそれを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる」

「それって」

「まさか!」

なのはとフェイトはそれを聞いたとたん、はっとする。

「ロストロギアを切欠に始まる管理局地上本部の壊滅そして、管理局システムの崩壊…そして、」

カリムはティエリアの方へ向く。

「つい最近、あなたのものと思われる予言も出ました」

「僕の？」

カリムはこくりとうなずき、それを読む

「翼滅びし時、再生の革新者と共に大天使があらわれん。大天使は再生の革新者を神とすべく、大地を消し去らんとす。蒼き星の名の革新者、これ防がんと傷つき戦い、敗北せし時、大地消え去り、勝利しとき、未来^{とき}待ちて眠る…これがあなたの予言と思われるものです」

「……………」

ティエリアはそれをじつと聞いていた。普通ならこのような予言のようなものは信じない。だがここはその幻想^{ファンタジー}が信じられる世界であることは理解できていた。

「再生の革新者これはリボンスだ。蒼き星の名の革新者と言うのは僕だろう。大天使と言うのはわからないが……………少なくとも、僕はリボンスと戦い、勝つにしても、負けるにしても……………」

その存在が消える。言葉にしなくとも皆が理解できた。

「「「……………」」」

とくにティエリアのことを想っている3人にとってその予言は耐えがたいものでもあった。

「だが、当たるかどうかはわからないし、当たるにしても、それをさせなければいいだけの話だ」

ただ目の前にある問題を解決する。そう、ただそれだけ。あまりにもシンプルな発言に皆別の意味で黙った。

「違うのか？それを防ぐための、機動六課じゃないのか？」

「……………うん、ティエリアの言う通りや」

だがシンプルだからこそ、それは大切なこと。

「我々も、できるかぎりのバックアップをします。しかし、華々しくもなく、危険も伴う任務ですが……………協力をしていただけますか？」

それはなのは達に向けられたものでもあるが、この場で唯一の民間協力者であるティエリアに言ったものでもある

「非才の身ですが、全力にて」

「承ります」

なのはとフェイトはうなずき、覚悟がこもった眼をして言った。

「……正直に言うと、僕はこの世界のあり方に疑問を持つところもあるが、この平和な世界を守りたいという想いもある……僕にできることがあるなら、よろこんで協力しよう」

テイエリアも覚悟を決めた。だがそれは、決して自己犠牲をすること
いう眼ではなく、【生きて未来^{あす}を得る】と言う覚悟だった……

20、告げられる預言（後書き）

さて、ここまでできましたが、……………正直、まだパパにしようかなやんでいます。

皆さんはどう思いますか？

よかったら感想の方へ……………やっぱ文才欲しい（泣）

番外5、災厄で最悪な日（前書き）

本日、ティエリアが切れます……と言っか壊れます

番外5、災厄で最悪な日

それは、ヴィヴィオが来て数日が経った日に起こった。

訓練場

「よし、終了だ」

テイエリアの一言でその訓練は終わる。

「皆なかなか上達したな。まさか、チームでとはいえ、トランザム状態の僕に一撃を与えるなんて」

そう、この日も通常の訓練とは別に、対トランザムの訓練を行った。その結果、フォワードの連係で見事トランザム状態のセラフィムのバリアジャケットを着けたテイエリアに一撃攻撃与えることに成功した。

「いえいえ、たったの一撃ですし、それに当てたと言ってもかすっただけですし……」

4人とも通常の訓練には慣れたが、この訓練はいまだに息を荒げていた。

「謙遜は必要ない。それに、当てた本人が言う言葉じゃないぞ、テイアナ。……みんなも、よく頑張った」

テイエリアがそう言うと、皆笑みを見せて喜ぶ。

「それじゃ、朝練はここまで。今日は目立ったミスもなかったから、次もこの調子でがんばってね」

なのはも心底嬉しそうにそう言ったのだった。

しかし、彼らは知らない。この後に起こることを……

フォワードの4人が隊舎に戻って少し経ったあと、ティエリアとなのはも隊舎に戻り、朝食をとろうとしていた。

その途中、フェイトとヴィヴィオが手をつないで歩いているところみたので近付き、声をかける。

ヴィヴィオはなのはもそうだが、特にティエリアを見つけると、少し笑みを浮かべる

「ヴィヴィオ、フェイトちゃんおはよう」

「うん。おようなのは、ティエリア」

「ああ、おはよう」

3人が挨拶を交わす

「ヴィヴィオ、なのはさんとティエリアさんに、おはようって」

フェイトがヴィヴィオにそう言いつたのは「おはよう」といっ。

……「ここまでではよかった

」
「おねいさんもおはよう」

「ああ、おは……よ、う」

テイエリアは一瞬呼吸するのを忘れた。

「すまないヴィヴィオ。今よく聞こえなかったんだが」

恐る恐る、されども、笑顔で聞く

「???おねいさんどうしたの?」

純粹な瞳を向けてヴィヴィオはそう言った。

ふと、ヴィヴィオのスカートのポケットから何かが出てくる。それ

を見た瞬間、そこにいたヴィヴィオを除く全員が凍りついた。

それはいつぞやのティエリアの負の遺産が映った写真だった。

「……………ヴィヴィオ、これはどこで？」（ここにここ）

ティエリアは笑顔で聞く。

「はやてのお姉ちゃんがくれたの」

「そうか……………ならそこに映ったものはすべて忘れるんだ」（ここにここ）

「う、うん」

「それと、ぼくは女じゃなくて男だから、お姉ちゃんではなく、せめてお兄ちゃんと呼んでくれ」（ここにここ）

いい笑みを見せながらヴィヴィオに言い聞かせる。

「うん、わかった」

それに応えるように無邪気に笑顔で言う。

「さて…なのは、フェイト」（ここにここ）

「「な、なな、なに」」

しかし、その笑みを見せているティエリアから凄まじいまでのどす黒い殺気と殺意を2人は感じ取っていた。

「少し僕は、よるところがあるから、先に朝食を取っておいてくれ」
(ここにこ)

「コクコク!!」

2人は反射的に首を縦に振る。

「それじゃ行くか…」(ここにこ)

「またねーお兄ちゃん」

「ああ、またあとで」(ここにこ)

最後までにこにことした笑顔のまま、ティエリアは悪の権化たぬきの元へと向かった。

なのはとフェイトはその後ろ姿を止めようにも、あまりの恐さになにも言えなかった。

「はあ」

はやては部隊長の仕事の合間の休憩としてコーヒーを飲んでいた。

「のどかやな」

「はいですー」

リインもそれに賛同する。

「いいお天気やし、なにかええことがおきそうな……」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アン！！

「な、なんや！？」

「なにごとですかー！？」

突然優雅な雰囲気を部隊長室の扉ごと破壊して、バリアジャケットを装備したティエリアがそこにいた。

「さて、はやく、僕は先ほどヴィヴィオにとあるものを見せてもらったんだが……何かいいわけは？」

「あ、あははは、あれはちょーとちゃめっけというか」

「で、ですよね」

と白を切るが、それがティエリアの押しではならないスイッチを押した

「そうか、その言いかたを聞けば、リイン関わっていたと言つてことか」(かちゃり)

砲身を2人に向ける。

「ちょ、話せばわかる！わかりあう必要が…」

「少なくとも、君達には」

一息置いて言い放つ。彼らはその顔をバリアジャケットで覆われているため見てはいないが、ティエリアはいい笑顔をしている

「必要ない」(きっぱりとした顔でにこにこ)

そのとき、はやてとリンの世界は光に包まれたという

余談ではあるがあの負の遺産が手違いで危うく世界中にばらまかれるところだったらしいが、それを死に物狂いで止めた人物がいたとかいないとか

番外5、災厄で最悪な日（後書き）

ふうーおわったー

さーて殺されるぞー

ズド
ン!!!

ですよねー（がく）

21、新戦力、家族、そして……（前書き）

どうもです。

最近、うちの近くで泥棒が捕まりました。

つか、捕まえたの自分と友人3人です。（ だからどうした！ ）

21、新戦力、家族、そして……

ヴィヴィオが来て数日。

なのはヴィヴィオの保護責任者。フェイトはその後見人と言う形でまとまった。

ヴィヴィオに分かるように言うと彼女たちはヴィヴィオの母親代わりになったということだ。

それを聞いたティエリアは嬉しく思った。「彼女たちが母親なら、ヴィヴィオも幸せだろう」と。

だが、それとは別に、ティエリアは羨ましくも思っていた。

自分にはない、家族と言うものに、少しだけ憧れていた。

だが同時に、そんなものは得られないことも理解している。自分と
言う存在は……あの幸福よしほは、絶対に手に入れることができないのだからと……

その日、六課に新しい仲間が加わった。

1人はスバルの姉で陸士108部隊のギンガ・ナカジマ。

もう1人は10年前からなのは達隊長陣のデバイスを見てきている

メカニック。マリエル・アテンザだ。

「108部隊より機動六課に出向しました、ギンガ・ナカジマです。はじめての方も、知っている方もどうぞよろしくお願いします」

「マリエル・アテンザです。気軽に話しかけて来てください」

2人が自己紹介を終えると、早速訓練に入る。

「それじゃ、ギンガ、スバル」

「はい？」

「二人には一対一の模擬戦もいいかと思ったんだけど……ティエリア」

「ああ」

なのはに呼ばれてティエリアは前に出る。

「二人でタッグを組んでティエリアと模擬戦。ティエリアはハンデとして、トランザムと砲撃は使わないから」

「ずいぶんと無理を言う。いまのスバルでは、そこまで手加減をしないとこっちがやられる」

ティエリアは少しだけ溜息を吐いて言うが

「だからこそ、訓練になるでしょ」

となのはに言われた。

「やれやれ、人は見かけによらないな」

綺麗な顔をしてそんなこと言ったなのはをみてティエリアはそう呟いた。

ギンガSide

スバルからティエリアさんのことは聞いていた。

どういう人か、どのようなデバイスか、どのように戦っているのか、そして…どのような過去かも。

ティエリアさん自身が話しても構わないと言ったらしい。

そのことを聞いて私は……いえ、スバルも思っただろう。フェイトさんやエリオにも似ているが、ある意味、私たちとも似ていると。

「ギン姉、ティエリアさんが手加減してくれたとしても、ものすごく大変だから、気を付けて」

「了解」

ともかく今は目の前にいるティエリアさんの相手をすることに集中する。

「」「」「」

互いに息をのむ。そして、

「それじゃ、はじめ！」

なのはさんの合図で試合が開始される。

「いくわよ、スバル！」

「うん！！！」

ギンガSide了

試合開始直後、スバルとギンガの2人は左右に別れて、拳を放つ

「！」

ぎりぎりの位置でかわし、上昇する。それを追うように2人はウイングロードを形成し、向かってくる。

「GNフィールド！」

「展開」

フィールドを展開し、防御態勢に入る。

「「うおおおおおお！！！」」

そして左右からくる攻撃が当たる瞬間…フィールドを解除する。

「え？」

「なっ！」

そのまま、ティエリアは下へ下降する。

GNフィールドを1度みて、そして相手にした2人は勢いをつけ1点集中の攻撃をすれば突破できることを理解した。そのため、今回もそうする作戦に出たが、その裏を取られた。

2人の拳は互いを……打ち合わず、瞬時に手を広げて、互いの手と手を握り、瞬時に左右にはなれる。

「さすがに一筋縄ではいかないか」

下からビームサーベルを振り上げながら突進したが避けられてしま
う。

本来なら、あそこで同士討ちをしたところを狙っていたが、失敗して
しまった。

だがこれによって、スバルと、ギンガはここから先も警戒をしながら
戦わなくてはならない。

「行くぞ！」

その掛け声と共に、ティエリアはGNフィールド展開し、さらに膝と肩のGNキャノンから隠し腕を出し、ビームサーベルを計6本持つて再び突進する。

(スバル………でいくわ)

(OKギン姉)

ウイングロードを使い突撃を仕掛けてくる。

「はぁぁー!」

両肩と両腕のビームサーベルを振り下ろした。が、そこで急にギンガが急停止し、後ろに1歩下がり、スバルは野球のフォークボールの如く、いきなり斜めに下降する。

「しまっ!」

そして下からはスバル、前からは下がった勢いをつけて前に飛び出すギンガ。さらに近接攻撃をするために今はGNフィールドは解除している。

(この距離では再展開は間に合わない)

このハンデで、スバルとギンガを2対1では勝てない。そう、2対1なら

「セラフィム!」

変形し、セラフィムのバリアジャケットに移動し、スバルの攻撃を防ぐ。

「セラヴィー、カートリッジ」

「ロード」

元来ならこの状態では魔法は使えないはずのセラヴィーだが、カートリッジをロードすることにより、一時的に魔法が使える裏ワザである。

2人の攻撃を跳ね返し、距離を再びとる。

(セラヴィー、フォーメーション、S32)

「了解」

カートリッジを4発ロードし、セラヴィーはGNフィールドを展開する。

ティエリアはその後ろに隠れる。

スバルとギンガはフィールドを打ち抜くため接近する。

その隙を狙い、ティエリアは前に出て攻撃する

「！？」

突然の挟撃に驚く二人だが、すぐ態勢を……整える暇も与えない。

砲撃が使えないためセラヴィーは4本の手に持ったビームサーベルを投げる。距離が近すぎるため避けられないので、もちろん2人はこれを弾くしかない。

そしてその隙を狙い2人の後ろに回り込んで首筋にビームサーベルを当てる。

「ふー、僕の勝ちだ」

それと同時に、試合終了の笛をなのはが鳴らした。

その後、ギンガも加えたトランザム訓練を行った。

ギンガは初めてトランザムと接敵したため、手も足も出なかったが、それも最初の3回だけ。

そこから先はすぐに慣れていった。

「はあ、はあ、あーつかれたあああああああああああ」

スバルは息を荒げ、倒れてそう叫ぶ。

「すごいね。いつもこんな訓練をやってるの？」

ギンガが聞く。

「ええ、まあ、この訓練はもうほぼ毎日の日課です」

そうほぼである。つい最近までは毎日であったが、ティエリアの休息というのにも必要と言うことで今は週4日と言ったところである。

「それにしても、みんなの成長もそうだが、やるなギンガ。まさかたった3回でもう慣れてくるとは」

「いえいえ、ティエリアさんの教え方が上手ですから」

そんなこと話しながらストレッチをしていると

「ママ」

ヴィヴィオが少し早足でなのはとフェイトの元に来る……途中で転んでしまった。

フェイトはすぐに向かおうとするがなのはが止める。

「大丈夫、地面柔らかいし、綺麗に転んだ。怪我はしていないよ」

「でも…」

ヴィヴィオは顔を上げると涙目になっている。

「ふえ、ふえええ」

というよりもう泣いている。

「大丈夫、なのはママはここにいるよ。おいで」

「なのはだめだよ。ヴィヴィオはまだちっちゃいんだから」

フェイトは見るに堪えず、ヴィヴィオの元へ向かった

「……僕は、先に隊舎に戻っておく」

「ティエリアさ…」

「失礼する」

スバル達の声も気にせず、隊舎へむかった。

隊舎の食堂

なのはとフェイトはヴィヴィオと同じ席に座り、一緒に食事を取っている。

ふとなのはが見るとヴィヴィオがピーマンを残しているのが目に映る。

「ヴィヴィオ、だめだよ。ピーマン残しちゃ」

「苦いのきらしい」

本当に嫌そうな顔をしてヴィヴィオは言う。

「えーおいしいよ」

「しっかり食べないと大きくなれないんだから」

フェイトとなのはに言われてもやはりいやそうである。そこに

「オムライスと一緒に食べれば、苦みが減ると思うぞ」

と、食べ終わった自分のトレイを運びながらティエリアは呟いた。

「……………（ぱく）」

するとヴィヴィオはティエリアの言ったようにしてピーマンを食べた。

「あ、ヴィヴィオ偉いよー」

「うん。ほんとに！」

なのはとフェイトがそう言ってヴィヴィオの頭をなでる

「なーんかティエリアさん、ヴィヴィオのお父さんみたい」

「ですね。アーデさんは優しいですからぴったりです」

スバルとリインがそう言うと

「……………ぱ、ぱ？」

ヴィヴィオはティエリアの眼をじっと見つめてそう呟く。

ティエリアはトレイを近くの机に置きしゃがんで手をヴィヴィオの頭に置き、

「すまない。僕は君の父親ではないし、なれもしないんだ」
そう告げた。

皆その瞬間黙るがヴィヴィオは少しだけ涙目になる。

「！すまない。失礼する」

そしてトレイを返し、そのまま立ち去った。

フェイトとなのはに捕まったのはその30分後だ

「どうしてあの時……」

「あんなこと言ったのか、か？」

なのは問おうとしたことを告げる。

「僕は、罪人だ。そんな人間の近くに、ヴィヴィオのような子がいていいはずがない」

「それはティエリアの世界の話でしょ！」

「それとこれとじゃ関係ないよ」

なのはとフェイトがティエリアの言ったことに対して反論を入れる。

「……………別の世界なら、罪の意識を忘れてもいいのか？…違つさ。そんなものは単なる逃げだ」

「……………」

「罪を背負うと決めた以上、そこに巻き込む人がいることを忘れてはいけない。その罪は未来永劫背負い続けなければならない。それは罪人にあたえられる義務だ。」

リンダ、イアンの娘、ミレイナも14という若さでそれを理解し、罪の意識を持ち、そこに来る犠牲やらも理解している。そのうえでソレスタルビーイングで家族と共に活動している。

ミレイナですらそうである以上、自分は絶対にそれを忘れない。

「あの子の親になると言うのは、それに巻き込む可能性があるからだ。……生半端な思いで家族になれるほど、世界は甘くはない」

「けど、」

「それに、この世界にはリボンズも来ている。もしあの子の親になれば、その時点で、狙われる対象になる。人質にするなどとしてな」

「「！」「」

ティエリアは少しだけ言い過ぎたと思っではいた。しかし、自分の信念と、生きていく道に他人を巻き込むなら、それ最低限の行動なのだ。

「……私だっつてそうだよ」

と、フェイトが呟く。

「？」

「フェイトちゃん？」

「私だっつて、過去に罪を犯した。それを忘れようとは思ってない。

……けど」

フェイトは言う

「けど、それでも、目の前にある幸せは、望んでもいいと思う」

「！」

「……うん。フェイトちゃんの言う通り。……ティエリアは罪を背負い過ぎて、目の前にある幸せを見失おうとしてる。そんなの絶対にだめだよ」

「そんな物、望む権利は僕には……」

「「あるよ!」「」

その先の言葉を言う前に2人のはっきりと、大きな声で遮られる

「ティエリアの罪は消えなくても、幸福を手にすることはできる」

「それも人に与えられた義務だよ」

「……だが、あの子に危険が」

「守ればええやん」

はやてが後ろから来てそういう

「ぐたぐた言わんで、守ればええだけやん……自分の思ったことを
がむしゃらに、やる？」

「……僕は」

はやてに言われたがそれでも悩んでいると

「なのはママ、フェイトママ」

ヴィヴィオがいつの間にか来ていた。

「どうしたの、ヴィヴィオ」

「怖い夢、見たの」

「そっか……大丈夫ママたちがいるから」

「うん……あ」

そこでヴィヴィオがティエリアを見る。

ティエリアは目を逸らす……ことはせず、ヴィヴィオの位置までしゃ
がみ問う

「ヴィヴィオ……君に聞きたい。僕は、君が思っているようない
人じゃない。そうだったとしても、君は僕を、1人の父親として、
……家族として、受け入れてくれるかい？」

言ってもよくわからないだろうし、悪い人だと教えているようなものだから、拒絶するだろう。そう思っていた。

「うん、うん」

「うん？」

「ははっ……！」

泣きながらヴィヴィオはティエリアに抱きついた。

「ど、どう、して」

わけがわからなかった。自分のことを悪者と言う人物を父親と認めたことを

「それが、ヴィヴィオの答えだよ」

と、なのはが言う

「と言うより、自分のことを悪者って言う人は、本当はええ人やっていうことがわかるんかも」

ティエリアは、自分の中の、消えることない罪が、けして軽くなることのない重い罪が、すこしだけ、軽くなった気がした。

（ありがとうヴィヴィオ。みんな）

だからこそ、ティエリアは自分を認めてくれた少女に言う

「改めてよろしく…ヴィヴィオ」

スカリエッツィの研究所

そこには大量のガジェットドローンが置かれている。

「祭りが近いそうだね」

そこに薄緑の少年リボンズが現れてスカリエッツィに言う。

「ああ。君達はどうするんだい？このパーティーに参加するのかい？」

「そうしたいけど、残念なことに、プリンジャー人でやりたいと言ってきたのでね。参加するの彼だけさ」

「ああ、そう言えばあの人、この前見たとき凄い目つきだったッスよ」

近くにいた胸に？のテンプレートがついており、巨大な盾のようなものを持った戦闘機人の1人、ウェンディがいう。

「ああ、彼はこの前やられた、デヴァインと同じ遺伝子だからね。」

自分の遺伝子は無能ではないことを証明したいらしいけど、あれは仇打ちが目的さ」

「へへ冷酷で冷静な顔しているのに以外ですね」

クアットロが甘い声で言う

「まあ、彼なりのケジメさ」

「ふん、くだらん」

ショートカットで胸に？のテンプレートをつけたトーレが言う。

「その意見には同感だよトーレ」

「？なかまだろ」

デイエチが言うがそれを聞いたりボンズはあっさりと言う

「仲間？ふん、駒だよ」

「自分の同類だってーのに、ひでーな」

「同類は同類でも、僕と彼では出来が違うのさ。故に駒なのさ」

？のテンプレートの付いた戦闘機人、ノーヴェにそう言う。

「それに、そう言う考えは君も同じだろう？あの、ルーテシアやゼストとかいうのも、君にとっては駒だ」

「まあ、否定はしないよ」

「……………やはり、君とは気が合うよ」

そうは言っがリボンスは目の前にいるスカリエッティすらも駒としている。

利用し終わるのもそう遠くない駒を見ながらリボンスは笑みをうかべる

「そうそう、あれももう完成するから、協力してくれた彼らには……」

「安心してくれ。この祭りが終わるころには、任務をしているドウ
ーエが彼らを消すさ」

「……………話が速くて助かるよ」

この歪みの笑みは消えない。そして、ついに運命の日が近付いてくる。

公開意見陳述会うんめいのひまであと、7日

21、新戦力、家族、そして……（後書き）

と言う訳でなんだかんだ悩みながらもティエリアを父親にしました。

そして、リボンス達が言うあれとは……

次回も楽しみしてみてください嬉しいです。

それでは

22、終末戦の前夜祭（前編）（前書き）

どうもです。ずいぶんと遅れてしまい、どうもすいません、ほんと

22、終末戦の前夜祭（前編）

「……………」

ヘリの中でティエリアは悩んでいた。きっかけは数分前、六課の隊舎で

「公開意見陳述会？」

「うん、そうや」

ティエリアが言うとはやてが肯定する。

はやてが言うには今回、地上本部でこれからのミッドチルダの平和を守るために管理局の今後について、そしてレジアス・ゲイズ中将与最高評議会による地上防衛用の迎撃兵器アインヘリアルの開発と運用について話し合われる。

そして、そこでカリムの言っていた予言が起こる可能性…つまり、テロが起こる可能性がでてくるということだ。

「せやから、ティエリアはなのはちゃんとヴィータ。それとフォワードのみんなと一緒に先に地上本部に向かって、その警備をしてもらいたいんや。向こうには既にギンガもおると思う」

「わかった。デバイスの調整が終わり次第、ヘリポートへ向かう」

「……やっぱり、調整が必要なんか」

そう。セラヴィーとセラフィムのツインカートリッジは、安定はしているがまだ完全安定はしていない。その証拠に使い過ぎるとティエリア自身に影響が出た。もしかすると暴発の可能性もある。そのため、小まめなメンテナンスが必要なのだ。

「まあ、そんなに前のようなことはしないさ」

「それなら、ええんやけど」

は yet は少し心配そうに言う。

「それより、例のあれについてなんだが……」

「あ、うん。そっちは順調や」

ティエリアの言うあれとはマリエルとシャーリーに頼んで現在開発中の物のことである

「正直、作るよう頼んだ僕も気が引けるんだが…あれが完成すれば、戦力値は大幅に上がる。まあ、今の段階では、そう易々と使えるほど安全じゃないが」

「みんなを守る可能性を0・1%でも上げたいんやろ？」

「ああ。……そろそろメンテナンスが終わるころだ。僕は行くよ」
そう言ってその場を去った。

そしてヘリポートにて

ヘリに乗って先に地上本部に向かうのはなのはとヴィータ、フオワードの4人、リイン、そしてティエリア。それと別件で中央方面に用事があるマリエルだ

そこに

「ん？」

「あ、ヴィヴィオ」

なのはも気付く。ヴィヴィオが寮母のアイナと共に、ヘリポートまで来ていたのだ。

「アイナ。……ヴィヴィオ、どうしたんだ？」

「ヴィヴィオ、ここは危ないよ」

ヴィヴィオは悲しそうな、寂しそうな眼をして、ティエリアとなのはを見る。

「ごめなさい。どうしてもママとパパのお見送りするんだって」

アイナがそう言った後にティエリアとなのはは、ヴィヴィオの位置までしゃがむ。そしてティエリアは頭を撫でながらいう。

「ヴィヴィオ、アイナに迷惑かけてはだめだ」

「そうだよヴィヴィオ」

ティエリアとなのはは、優しくヴィヴィオに言う。ヴィヴィオは下を向いて落ち込みながら

「……………ごめんなさい」

と、小さな声で謝る。

(……………どうしたものか。こついつ時はもう少し言うべきなのか、それとも……………)

ああだ、こつだとティエリアが考えているとフェイトが言う

「なのはもティエリアも夜勤でおでかけは初めてだから、不安なんだよ」

「あ、そっか…」

なのははヴィヴィオの瞳を見ながら言う

「なのはママと、ティエリアパパは今日外でお泊まりだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「……………ぜったい？」

ヴィヴィオの間に今度はティエリアが答える

「……………ああ、勿論。だから、心配しなくても大丈夫だ」

そして頭を優しく撫でる。

「うん。……わかった。でも……」

「「？」」

「かえってきてね」

「！……！！」

その言葉に過剰に反応したのはティエリアだった。

「うん。約束」

なのははゆびきりをし、約束を交わしたのだった。

そして今に至る

「……………」

「あの、アーデさん？」

「！、ああすまない。どうしたんだリン」

「その、顔色が優れないような気もするんですけど……………」

（……）

そう言われて、周りを見ると皆心配している。

(なにをやっているんだ、僕は。みんなを心配させて……………だが)

ティエリアは先ほどのヴィヴィオの言った言葉を思い出す。

【かえってきてね】

たったそれだけの言葉。だがそれはティエリアの心にずっと響く。

(僕は……………いずれこの世界を去ることになる……………そうなったとき、あの子は……………)

ここ最近ヴェーダとのリンク率が上がってきているというのに、彼はそれを忘れ……………いや、意図的に忘れようとしていた。

そもそもこの世界に体付きで来たことは奇跡が起こったと言っているほどの偶然。ヴェーダともう一度完全リンクをして、またこの世界に戻る確証はない。いや、ゼロに近い

だが、どんなに逃げようとその現実は今も近付いている。

(せめて、リボンス達のことが終わるまでは、ここにいないといけない)

ここにいればいいと皆が言うかもしれない。だがそれではだめだということとはティエリアが一番よくわかっている。

いつ、自分の世界が、ソレスタルビーイングの皆が、なにより来るべき対話があるか分からない以上、どうしても戻らなくてはいけない

い。

(現実から目を背けるな、ティエリア・アーデ。悲しみは、乗り越えなくてはいけない)

そして地上本部に着くまで、ずっとティエリアは自分にそう言い聞かせていた。

??? Side

(まったく、彼の人間かぶれは相当なところまで来てるな)

情報がいきかうその空間で、彼は呟く

(でもま、面白くはある)

誰に聞かれるでも、誰に言っているわけでもない。だが彼は呟く。

(けど、危なくもあるな……早く気付いた方がいい)

自分の身も危ないというのにどこか他人事である。それはそうだ。

なぜなら、彼にとっては別世界のことなのだから。

リンク回復率、80%

(そうか……僕と話ができるのも、近い。いや、またともになれる日も……)

彼はただ眠ることもなく、ただ異世界の事態を見つめていた。

???? Side了

本部に着くと既に厳戒態勢がひかれていた。

「ものすごい数だな」

「ええ」

ティエリアの言葉にギンガは頷く。

ギンガとはつい先ほど警備をしていた途中であった。

「ギンガ…君は、この厳戒態勢の本部にテロ起こすとしたら、どうする」

唐突にティエリアは聞く

「え、えと、そうですね……やはり、何処からか潜入し、内部からつぶすと言ったところでしょうか」

「たしかに…だが」

そう、この状況で潜入など出来るはずが

(ないとはいえないな……彼らの能力はまだ未知数な部分が多い)

戦闘機人という不可思議な者達の能力は様々。そもそも、ここは魔

法というティエリアの知らない非科学的な技術ちからがある。なによりA MFとよばれるものもある。それらも考えてティエリアはすでにいくつかとある物をつくり、ある程度ではあるが様々なケースに対応できるようにはしている。

「（なにが起こっても不思議じゃない……気を引き締め直そう）9月とはいえ、夜だから少し寒くなってきたな。何か温かい飲み物でももらってくる」

「あ、はい」

ギンガの元を離れ、とりあえず温かい飲み物をもらうことを優先した。

同員の人から飲み物をもらったティエリアは、戻ろうとしたとき、ヴァイスとティアナがヘリポートにいるのが見えた

「？」

少し、なぜだかわからないがそこに行ってみた。

「……それでも、アウトレンジショットの達人で、優秀な狙撃主だったって」

近付くとティアナの声が聞こえてきた。盗み聞きをするつもりはなかったがティエリアはとっさに物影に隠れた。

しばらくすると話が終わり、ティアナは去っていく。そして見えな

くなつた後、ヴァイスは呟く

「……………で、いつまでそうしてるつもりだティエリア」

「驚いたな。気配は完全に消したつもりだったんだか」

「ティアナは気付いてなかったみたいだが、気配消す前の瞬間にいたのを俺は見てたぜ。少しばかり目がいいんでな」

ティエリアはやれやれと呟き、ヴァイスの近くに来る。

「ティアナが言ったことは……………」

「ま、ほんとのことだが、別にどうでも……………」

「いいかもしれないが、1つだけ言いたいことがある」

言葉を遮り、ティエリアは言う

「？なんだよ」

「なにがあつたのかは知らないし、聞く権利は僕にはないが……………悩み過ぎない方がいい。悩みは人を狂わせることがある。……………まあ、僕が言えた義理じゃないが」

「ははは、確かに」

「それだけだ……………それじゃ、失礼させてもらつ」

ヴァイスSide

つい先ほど来て、気配を消していたティエリア。正直気配を消した後はいるかどうかはわからなかったが、あいつのことだからまだいるかと思ひ声をかけると案の定だ。

「いいかもしれないが、1つだけ言いたいことがある」

そして突然俺の言葉を遮り、そして言った

「なにがあつたのかは知らないし、聞く権利は僕にはないが……悩み過ぎない方がいい。悩みは人を狂わせることがある」

ぐさりと、何かが心の奥底に刺さった気がした。

(こいつは、やっぱり妙に勘がいいというか、なんというか)

「……まあ、僕が言えた義理じゃないが」

ってそりゃ

「ははは、確かに」

否定しようにもできないことなので俺は笑いながらそう言った。

(でもよ、そんなことを口にしたってことは、お前も今何かに悩んでじゃねーか)

そう言いたいが無かった。確証がないからだ。

「それだけだ……それじゃ、失礼させてもらおう」

「おう、じゃあな」

テイエリアが去った後も言葉は何度も俺の中で響く。でも、大丈夫さ……

「昔の話だ……そうだろ、ストームレイダー」

「そうですね」

静かにストームレイダーは答える。お前も、思い出してるのかもな……

ヴァイスSide了

それから数時間後、日も昇ってしばらくたったころになのはに言われ、テイエリアも内部警備に当たることとなった。

「じゃあ、すまないがスバル、セラヴィーとセラフイムを頼む」

「はい」

内部にはデバイスを持ち込むことができない。そのため、なのはもスバルに預けている。

「本来なら、我らも共に行きたいのですが、仕方ありません」

「マイスター、くれぐれもお気を付けください」

セラフィムとセラヴィーの言葉を聞き、頷いた後、内部に向かった。

内部にて

なのはとフェイトがいる階まで案内され、そこでなのは達と合流し、待機する。

（しかし、前から思っていたが妙だ。なぜ、リボンスはここまで回りくどいことをする…数で押せば、簡単に僕を倒すこともできる。いや、そもそも彼の目的は何だ？僕は計画の邪魔になるから排除するという理由はともかくとして、スカリエッティと手を組んだのは何故だ？）

リボンスのやってきたことや、性格を考えても、わからないことが多かった。

（……それにこの事件、なにか大きな者が関わっている……そんな気がする。ともかく、彼らはほぼ確実にくる。その時に備えないといけないな）

リボンスSide

「そろそろですね」

リバイブが言う。

「あゝあ、つまんない。ねえ、リボンス、やっぱり私もだしてよー」
本当に退屈そうにしながらヒリングは言う。

「だめだよ。君達の新デバイスは最終調整が済んでいるとはいえ、まだ出すには早い」

「人間ごときに見せた所で、どうにもならないわよ」

ふむ、たしかにそれもそうだ……なら、

「はあ……いいよ、ヒリング」

「やった！」

「ただし、トランザムの使用は禁止だ、それと、全力を出すのも」

「はいはい」

ふむ。これでいい。まあ、せつかくの前座なんだ、少しは楽しみを
きかせるのはいいかもしれない。

……さて、そろそろ

リボンスSide了

スカリエツテイSide

ようやくだ、ようやく来た！この時が！！

「ふっ、ふふふふふふふふふ」

「楽しそうですね、ドクター」

ああそうさ、そうだとも！！

「楽しいさ、この手で歴史を変える瞬間だ。研究者として、技術者として、心がわき立つじゃないか」

そう、彼らスポンサーに教えてあげるさ。いまここで！！

「！、リボンス氏からです。もう一人、あとで参加するそうです」

「ほう、それは頼もしい。ということは、私の開発したあのデバイスを使うということか…」

ちょうどいい、実践テストだ。

「さて、そろそろ始めよう！！」

スカリエツティ Side

そして、後に語られる戦いの始まりの鐘が、いま鳴った。

22、終末戦の前夜祭（前編）（後書き）

待たせた割に戦闘描写がなくてすみませんOTL

感想と応援よろです。

次回を楽しみにしてくれましたら幸いです。

それでは、また次回

23、終末戦の前夜祭（中編）（前書き）

どうもです

新年最初の投稿です。

今年もよろしくお願いします

23、終末戦の前夜祭（中編）

ついに敵が動き出した。突然通信ができなくなり、指揮系統が乱れ、内部が混乱している。

「外の状況はどうなっているのか……なのは、外との連絡はやはり……」

「うん。全くつながらない。会議室や、非常口の扉は、完全にロックされてる……」

（会議室には、はやてのような優秀な魔導師達がいる……おそらく、戦力の削減。AMFの濃度が高ければ、魔力結合もできない。非常口は、僕たちをここら出さないのが目的だろう……）

テイエリアは冷静に状況を把握し、分析する。そして、この場でも優先すべきことを見つける。

「ともかく、急いでこの場から脱出しよう」

テイエリアはそう言うと、エレベーターの方へ向かう。エレベーターも現在は稼働していない。何人かの局員が無理やり開けようとしているが、これでは時間がかかるのは明白である。

「すまない、少し下がっててくれないか？」

「あ、はい」

局員は「どうするつもりだ」と言わんばかりの顔をしてさがる。

「テイエリア？」

フェイトもそんな感じで彼の名を呼びながら首をかしげる。

「さて、やるとするか」

テイエリアはズボンのポケットからとある物を出す。そしてそれをエレベーターのドアに向かって投げ、それがドアに張り付く。

「伏せろ！！」

ドアから急いで離れながらテイエリアは言う。皆とっさのことだったが、すぐに理解する。あれが何なのか、そしてなぜ伏せろといったかが……

そして皆が反射的に伏せた瞬間だった。

ズド　　ン！！

ドアに張り付いた小型爆弾が爆発しドアを吹っ飛ばした。これは刹那が使っていた小型爆弾とほぼ同タイプの物である。

テイエリアは長年優秀な戦術予報士、スメラギ・李・ノリエガの戦術予報を見てきた。それ故に、テロがどのように行われるか、どのような手口を使うか、どう対処すればいいかなどが、頭と体に覚えている。故に、閉じ込められるといったことなどに対しての準備として、小型爆弾はいくつか作ってはいた。

「あの、テイエ……」

「言いたいことが山ほどあるのはわかるが、今は非常事態だ、目つぶってけると助かる」

とどこか子供の言い訳がましく呟くティエリアをみて、2人は思った

（結構強引でちょっと子供っぽいところもあるな）と

そのころ、内部ではスバル達がなのは達にデバイスを届けるため、合流ポイントへ向かっていた。

そして、その途中に現れた戦闘機人と戦闘を開始していたのだった
最初こそいきなりスバルが攻撃され戸惑ったが、いつもの訓練を思い出し、応戦する。

（よし、まだ訓練の時のなのはさんやティエリアさんの攻撃の方が早い）

エリオは得意の素早い動きでウエンディやガジェットの攻撃をことごとく回避する。

「くっそーちょこまかとー！」

「ウエンディ、このグズ！さっさとしとめろ！」

ノーヴェは黄色をしたウィングロードのようなもの（エアライナー）をローラーブーツを使って走り、ティアナの後方へ一気に移動し、飛び蹴りを繰り返すが

「!?!」

それはいきなり消え去り、空を裂くだけだった。

「幻影!」

そう。ティアナの得意とする幻影。今回はキャロの支援もあり、尋常ではない数の幻影を出す

(スバル、いま!)

「うおりゃあああああああああ!」

幻影にまぎれて少しずつ近付き、一定の距離に来た瞬間に加速しそのままの勢いでノーヴェを叩きつける。

「サンダー……」

さらにもうひとり、先程まで避けることに集中していたエリオが幻影に紛れ込んで前に跳躍しストラーダを振り下ろす。

「レイジ!」

瞬間、雷撃が周りに拡散する。ウェンディは武装のシールドを使い防いだ。周囲にいたガジェットは前期破壊され、爆煙が飛ぶ。

「撤退!」

その隙を見てティアナの指示で合流ポイントへ撤退する。敵の眼を

ごまかすため、幻影を四方に分散させる。

「の、やるお！」

ノーヴェは怒りをあらわにするがもはや追うことは不可能であるというのも理解する。そこに

<ノーヴェ、ウエンディ、ちょっとこっちを手伝え>

通信が入る。小柄で銀色の髪をした長髪で、右目を眼帯で覆っており、胸には？と描かれたテンプレートがある彼女の名はチンクである。

<もう一機のタイプゼロ、ファーストと戦闘中だ>

その彼女の映像に映った相手はギンガだった

「ふっ！」

ズカ ン！

移動中に現れたガジェットを持っていた最後の小型爆弾を使い破壊する。

「これ以上現れないでくれ……」

テイエリア達はエレベーターの扉から下に降りていきここまで来たがその途中ガジェットに遭遇した。

数は少なかったので一か所に集まったところをまとめて破壊したのでどうにかなったが、これでティエリアの持っていた小型爆弾はすべて使い果たした。

「高町一尉！」

とここで移動中に後ろから聞き覚えのある声があった。聖王教会のシヤツハである。

「シスターシヤツハ！」

「シスター、会議室にいらしたんじゃない？」

なのはとフェイトが声をかけるとここまですっと走っていたのか、息を切らせながら答える

「会議室の扉は勇士の努力で、何とか開きました。それで私も急ぎ、あなた方を追って……」

「はやくて達は？」

ここで周りを警戒しながらティエリアも聞く

「皆さん、まだ会議室にいます」

「そうか…よかった」

とりあえず無事を確認でき、少しだけほっとするティエリア。

しかし状況は最悪なことは変わりない。ここで敵が現れたら終わりの状況だが、どうやらそれはなかった。来たのはスバル達である。

「ああ、いいタイミング」

フェイトの言う通り、まさしくいいタイミングである。

「お待たせしました」

「お届けです」

テイエリアはスバルから自分のデバイスを受け取り、それを腕に付ける。

「よし」

「こちらは、私がお届けします」

シャツハはティアナからはやてとシグナムのデバイスを受け取る。

「ギン姉？ギン姉！」

ようやく動けると思った矢先のことだった

ギンガと連絡がつかない状態になっていたのだ。

（何かあったと考えるのが妥当だが…）

<こちら、ロングアーチ！アンノウンと交戦中！しかし、もう……

…>

そこに追い打ちをかけるように通信が入る。

「ここは二手に分かれよう。スターズはギンガの安否の確認と襲撃」

「ライトニングは六課に戻る！」

「」「」「はい！」「」「」

「ティエリアはどっちに行く？」

「なら僕は……………！！！」

答えようとした時、ティエリアは急に黙り込む

「ティエリア？」

「……………すまないが、僕はここまでだ」

そう言うとティエリアは黙ってセラヴィーとセラフィムを装備する。

「僕は……………」

すると、ゴゴゴという音が聞こえそれがどんどん大きくなってくる。

「さがれ！」

瞬間、壁から巨大な物体が現れる

「ティエリア・アーデ！！！」

新デバイス、レグナントを装備したブリング・スタビティである。

鋭い爪を向けて突進し、ティエリアを壁に打ち付ける

「ぐああー!!!」

「ティエリア!」

「僕はいい!!! ツインカートリッジ!!!」

この状況から脱出するためツインカートリッジの機動力注ぎ込む

「「ロード、カートリッジ」」

カートリッジからそれぞれ2つ計4つの薬莢が出てき、スラスターに一気に力が入る。

バースト・ブースト

全てのエネルギーを一時的に機動面に注ぎ込み、トランザム時の数十倍の機動力が得られる。ただし、この間はトランザムを使うとあまりの機動力のアップにティエリアの体が耐えきれなくなる。

「うごけえええええええ!!!」

数倍はある大きさのレグナント押し返すさまは凄まじいものである。

「ここは僕に任せて、君達は早く目的を……っっちい!!!」

スラスターのエネルギー放出を止め、そのまま、下へ向かう。

「逃がさん!!」

怒りに満ちた感情のままプリングはそのあとを追う。

なのは達はしばしその光景を見ていたが

「……いこう! ティエリアは私達を信じて戦ってる!」

「うん! 私達は、私達にできることをしよう!」

なのは、フェイトの力のある指揮に皆頷き、行動を開始した

六課隊舎にて

「なーんだ、やっぱりこのていどか」

ヒリングは心底つまらなそうに言う。

その後ろには数十機のガジェットと2人の戦闘機人がいる。

1人は中性的な外見をした茶髪のショート、胸に?と描かれたテンプレートがあるオットー。

もう1人は顔はオットーと似ているが、髪型はロングで、少し大人びており、両手にはビームサーベルのような物を持ち、胸のテンプレートは?と描かれている彼女はディードであり、この2人は同じ同じ「素材」から生み出された、言わば双子のような関係だ。

「申し訳ありません。1人でここまでしていただいて」

そうディードが言う先には半壊した六課隊舎とここまで粘って戦っていた傷だらけのシャマルとザフィーラの姿であった。

「別にいいわよ。お礼なんて。あたしはただ実戦がしたかっただけだし」

そう、ここまで破壊したのは戦闘機人でもガジェットでもなくヒリング1人である。

「さーて、どうしよっかな？……もうちょっと破壊しよ」

そう言う腰に装備してあるGNメガランチャーを隊舎に向ける

「させ、は、せん！！」

しかし、ザフィーラが不屈の精神力で起き上がり特攻を仕掛ける。

「ぐわ」

ヒリングは両肩の前と後ろにあるGNファンングをつかう。縦横無尽に飛び、ファンングのビームサーベルがザフィーラを切り刻む。

「ぬ、ぬあああああ！……！」

それでも最後の力を振り絞り、特攻するが

「うざい……GNフィールド展開」

両肩のサイドのにとりつけられた盾のようなものが動きGNフィールドを作り出す。

「くううう」

力をつくし、攻撃が届かず、ただ地面に落ちていくザフィーラにGNメガランチャーを発射した。その勢いは隊舎までいき、爆音と爆煙がただよった。

「これが、ガオッツの力」

ガオッツ

『ガ』シリーズのガデッサ、ガラッゾ、ガッデスこの3機のデータをもとに、スカリエッティによって制作された新たなタイプ。3機すべての武装が施されており、出力は3機のどれをも上回る。

「で、あんたらが狙ってる聖王ってのはどうすんの？」

「それなら、いまルーテシアお嬢様が向かいましたので、万全かと」

「ふ〜ん。なら、あとは任せたわ」

オットーから聞きもつ自分の活躍できそうなことはここにはないとし、撤退を開始する。

「さて、ブリングのほうどうなってんのかな」

そんな言葉を呟きながら……

再び地上本部にて

スバルはスピード上げ、ギンガが戦っているであろう場所へと1人先行して移動していた。

（ギン姉！）

ティアナの通信もあつたがそれでも進んでいく。

（あたし、バカだ！あいつらは、私を狙っていた。ならギン姉も危ないのは当然なのに）

最悪のケースが頭の中で何度も無意識に想像される。

（どうか、それだけは……）

だが、それは現実となった。

「……………！！」

スバルの眼に映つたのは先ほど戦つた2人の戦闘機人と別の戦闘機人。そして、全身血まみれで、バリアジャケットもズタズタの状態。目はうつろで、気絶し、虫の息となったギンガの姿だった。

「あ、ああ、ああ」

このとき、スバルは自分の感情を制御できずにいた。そして、彼女の眼が黄色へと変色し、自分の力を解放した。……………戦闘機人としての力を……………

一方、ティエリアVSブリングの戦いは前回のエンプラス戦とは違い、ティエリアが圧倒的に押していた。

細いルートを進み、レグナントはその細道を破壊しながら強引に突き進む

「いけ、ファング！」

エンプラスの爪が腕から離れ、特攻を仕掛けてくる。

「その程度！！」

合計8つの砲台で応戦し全てのファングを消滅させる。もちろんこれは偶然などではない。

(よし、うまくいった)

ティエリアはこの道に誘い込んだのだ。狭い通路では、ファングは思うように動けず、前に進むしかなく、さらに攻撃も当たりやすい。

「でえええい！」

今度は大型ビーム砲で攻撃をしてくる

「(ならここは…)セラヴィー、カートリッジロード」

ツインカートリッジではなく、セラヴィーのみがロードする。

「ハイパーバーストプラス」

本来のバーストモードより攻撃力の高い光の球が飛び、互いの力が相殺される。

GNフィールドをとっさに展開してダメージを最小限にするが、あいてはまさか相殺されると思わなかったのか、フィールドを展開できず、ダメージを負った。

煙にまぎれてワイヤーを射出し、ティエリアをからめようとするが、これらも撃ち落とされる。

(よし、このままいけば…しかし)

疑問に思うこともあった。

(なぜ、敵はこの状況下でファングを使ったんだ？ここで使えばこうなることなど目に見えているはず)

ティエリアはブリングがデヴァインを殺され憤って我を忘れていることなど知らず、考えながら攻撃する。

状況はティエリアが圧倒的、もう動けなくなるかと思われた時だった。

「うおおあああああああ！…！！」

「なっ！」

地獄の底から聞こえてきそうな声をし、MSモードに変形し、強引にティエリアを抑え込む。

(だが)

腰のキャノンを使い、敵の砲台を破壊した。

(これで武器はなくなり、何もできないはず。あとは、一斉砲撃で) 敵を倒すはずだった

「トランザム!!!」

「なんだと!?!」

驚いたことにレグナントがトランザムを使ったのだ。だが、これはスカリエツテイの手でも未完成であった。本来は万全の状態で、しかも砲撃にしか使えない。それを今まさに暴発させようとしていた。

(まさか!)

「死ねええええええええええええ!!!!」

トランザムを暴走させブリングはレグナントを自爆させた。

23、終末戦の前夜祭（中編）（後書き）

さあ、次回ティエリアはどうなったのか！？

ここで補足

ガオツズの名前の由来は『ガ』シリーズのすべて、オールズにガを足し、自分ふうにしてみました。

他にあつたらご意見どうぞよろしくお願いします。
ご感想もお待ちしています

それでは

24、終末戦の前夜祭（後編）（前書き）

どうもです。

今回少し短いですが、見てくれたら嬉しいです。

24、終末戦の前夜祭（後編）

それは振動だった。地上本部全体に震度3から5弱ほどの揺れを感じ、中にいる者たちは皆不安を抱いた。

それは移動中だったなのは達もである。

「今の揺れは……」

「……………急ごう」

ティアナの間に一瞬黙り込んだが、そのことに触れず、ただそう呟いてスピードを上げた。なのはも皆のことが心配で仕方ない。とくに六課の方はヴィヴィオがいる。彼女の心境はおそらくスバルと同じかそれ以上に不安でいっぱいだろう。それを抑え込んでいるのを察したティアナはそこら先何も言わず、目の前の自分のすべきことに集中した。

スバルは敵の攻撃にも全くひるむことなく進む。攻撃を受けることに傷ができるがそれでも進み、そして拳を振るう。ノーヴェはとっさに反応し、シールドを張るが、まるでガラスのように一瞬で碎け散る。

「どおおけええええええええええ！！」

スバルの怒りに染まった眼を見て一瞬心の中で恐怖が生まれる。それを瞬時に押し殺し、相手の蹴りに合わせてローラーのブーストを全開にし、同じく蹴りを入れる。同時に当たるが相殺されず逆に吹

っ飛ばされる。

「ノーヴェ、ウエンディ、ここは姉に任せてここから離脱しろ……姉なら、あれに対抗できる」

遠距離からナイフを投げ、彼女のIS「ランブルデトネーター」の効果で爆発物となり爆発する。

「行くツスよ！ノーヴェ！」

「了解……！」

ギンガを大きなケースに入れ、ウエンディはIS「エアリアルレイヴ」で自分の盾を浮かせ、ボードのように上に乗ってギンガの入ったケースを運びながら移動を開始し、ノーヴェも痛む傷を押さえながらローラーブーツを使い、撤退する。

スバルはそれを追おうとするがチンクの攻撃に阻まれる。

「じゃますんなああああああああ」

チンクの攻撃は間違いなく効いている。だが、その痛みすらも今のスバルにとってはどうでもいい者となっている。彼女の中にあるのはただ姉の無残な姿した悲しみとそうした者への憎しみ、そして姉を取り戻したいという思いが混ざり合い、強大でスバル本人でも手の付かない力となっている。

「ぐうううう！」

チンクは必死にシールド使い防ぐ。それに対しスバルはひたすら拳

を時には蹴りを当てる。だがそれはいつもの格闘のようなフォームはほとんどなく、がむしゃらに殴り続けているかのようである。

しかし、それでも強力な攻撃には違いない。チンクのシールドは破壊され吹っ飛ばされる。

「ギン姉！」

急ぎ、姉をさらった戦闘機人を追おうとする。しかし

「行かせは…せん！」

チンクも全力を出す。現在使えるナイフすべてをスバルの周りに展開し、包囲する。

「プロテクション展開」

自分のマスターの危機にマツハキヤリバーはオートでプロテクションを張り、防御態勢をとる。それとほぼ同時、チンクのISが発動し包囲展開されたナイフがスバルに向かっていき、当たった同時に爆発する。

爆煙が立ち、チンクは目を瞑る。煙が多少晴れ、眼を開けるとそこにはこれほどの攻撃を受けてなお歩いているスバルの姿

「……かえせ」

しかし完全には防げておらず、バリアジャケットはギンガ以上にずたぼろ、ローラーブーツは完全に壊れてはいないがいつ壊れてもおかしくなく、左腕の一部は皮と肉が割け機械の骨格が火花を上げて

いる。それでも彼女は歩く。ただ大切な者を取り戻すために。そして叫ぶ。

「ギン姉をかえせよおおお！！」

(ここまでか……………)

チンクは己の最後を悟ってか、眼を閉じる。しかしそれは無駄に終わる。

「セインさん到着！」

まるで水から出てくるように壁から出てきたのは水色の髪に胸に？のテンプレートのある戦闘機人、セイン。彼女のIS「ディープダイバー」の能力は無機物への潜行する物質の理を無視したものである。

「たすかった」

チンをつかみISを使い壁に潜行し撤退した。それはスバルにとってもう自分の姉を追う手段が完全になくなったことを示す。

「あ、ああ、あああ、ああああああああ！！！」

ついにローラは破損し、マツハキヤリバーのシステムもダウンする。それと同時にスバルも膝をつき、涙を流してただ叫んだ。なのは達が到着したのはそのすぐ後だった…

機動六課隊舎では新たな戦闘が行われていた。

「ほらほらあ！ちゃんと避けないと切り刻まれるわよ！！」

「ぐうう！！」

「エリオ君！っフリード避けて！！」

途中まではフェイトと共に六課へ向かっていたが、途中に2人の戦闘機人と接敵し、フェイトはその戦闘機人と現在戦闘中。エリオ達は邪魔にならぬよう、フェイトから離れ、先に六課へ向かった。

着いた時には自分たちが数時間前までに見た六課隊舎は燃え盛る炎に包まれ、見る影もなかった。ふと、見るとガジェット？型に乗った召喚師の女の子ルーテシアと、その召喚獣ガリユー、そしてガリユーの腕には気絶したヴィヴィオの姿があった。

エリオはこの時、自分の過去を思い出した。幸せな家庭にいきなり現れた恐い人たち。その人に連れていかれそうな時、その者から自分がコピーであると言われ、それを肯定するように押し黙った家族。もうそんな悲しみなんていない。そして、彼はストラーダをフォーム？にし、ブースとを使って追いかけようとした。だがタイミンが悪く、この状況を傍観していたヒリングに見つかってしまい、戦闘を余儀なくされた

「ストラーダ！！」

「了解！」

ストラーダから雷撃が周りに飛び交うファンクを2機破壊する。だがそれでもまだキャロの方に2つ、エリオの方に3つ計5つのファ

ングが残っている。

「やるじゃないさ！ならこれで……」

ヒリングはGNメガランチャーをエリオへ向ける。エリオは構える。敵が一撃必殺の攻撃をしてくると踏んだからだ。だが、

「失礼：IS、ツインブレイズ」

「なっ！！」

いきなりの後ろからの攻撃にエリオは対処ができず、攻撃がクリーンヒットし、海上に落ちていく。

「エリオ君！！」

すぐさま助けるため、ファングをすり抜けながら向かおうとするがそれはできなかった。

「IS、レイストーム」

いつの間にかフリードもキャロ自身もバインドのようなものに縛られ、身動きが取れなくなり、キャロとフリードも海上へと落ちていった。

「ちょっとお！あたしの獲物取らないでよ！」

ようやく見付けた遊び相手のおもちゃを横取りされたと思い、ヒリングは睨みながら言う。

「そうは言いまして、リボンス氏から言われたので」

「リボンスから!？」

「はい」

オットーとティードは淡々と述べる。すると遅れてリボンスから脳量子波で指令をつけ、力を出しすぎだ、もう撤退しろとの命令が出る。

「ちえ、まあいいわ……にしても、ブリングはやっぱり死んじゃった
ようね」

仲間の死に1?の感情もなくそう呟いて撤退した。

地上本部のとある場所にて

辺り一面は破壊され、そこらじゅう瓦礫に埋もれており、火と煙が
充満している。

「ぐっ、ぐううう!!」

「「危険。現在魔力20%未満ダメージレベル8、非常に危険です
」」

二つのデバイスから現在の自分の現状を知らされるティエリア。バ
リジャケットは両方とも半壊、武装はすべて使えなくなっている。

「どうにか生きているようだが……ダメージが、大き過ぎる」

数分前、自爆しようとしていたレグナントから出ようともしるも完全に押さえつけられてしまい、脱出は不可能だった。故にティエリアはツインカートリッジを使い両方合わせて10発ロードし、爆発した瞬間に超強力なGNフィールドを展開した。

「ぎりぎり……だった……」

そう、ぎりぎり。爆発して0コンマ1秒以下で展開しなければ死ぬ。そんな状況下においてこれはギャンブルでしかない。事実死んではないとはいえ、少し遅れてしまい限界寸前のダメージを負った。しかも、ツインカートリッジをこの数分前にも使っているので疲労は限界。魔力も残りわずかとなった。

「はあ、はあ、こちら、ティエリア。誰か、応答してくれ」

<こちら……ら、ロング……アーチ>

通信からシャーリーの声が聞こえる。

「シャーリー、そっちは大丈夫か！」

<六課は崩か……。ヴィヴィオが、連……て……行かれました>

「……」

とぎれとぎれの通信でも聞こえた。聞きたくなかった、認めたくなかった言葉が発せられる。

<……ませ……あの子を……ヴィヴィオを>

「きみが、謝ることじゃない」

何もできなかつたくやしき、この事件を起こした者への怒り、また大切な人をまもれなかつた悲しみ、そう言った負の感情が一気に彼に流れ込んでいく。

「僕は、また……うあああああああああああ……！」

悲しみに染まりきつた彼の慟哭は火と共に掻き消され、夜の闇に消える。

【まだだぜ】

「……！」

聞こえてくるのは彼の心の支えとして、彼の心なかに生き続けるニールの声

【まだ、お前も、お前の大切な者も、生きてる。生きてるんだ】

「生きている……そうだ僕も、ヴィヴィオも、いきている」

それは彼に新たな決意をあたえた。

その日、地上本部および機動六課が崩壊した。死者が出なかったのは奇跡ともいえるが、その惨状は絶望的である。

そして犯行を指示したとされるジェイル・スカリエッティによる演説の後、長い、本当に長い1日は終わったのだった。

24、終末戦の前夜祭（後編）（後書き）

さて、クライマックスも近くなってきました……

次回も楽しみにしてくれたら嬉しいです。

それではまた次回

25、戦う決意と……再開？（前書き）

どうもです。今回最後の方であいつが出ます。

そう22で出た……？がでます

25、戦う決意と……再開？

襲撃事件の翌日、地上本部はもちろんだが、六課も大変な状態だった……そしてこの事件で大けがを負った者は皆ここ、聖王病院へときていた。そして入院している者の中にはティエリアもいるのだが、

「ティエリア、だめだよ！まだ安静にしていなと！」

両手と額に包帯を巻いたまま歩いているティエリアをフェイトは必死で止めようとする。

「大丈夫だ。セラヴィーとセラフイムが守ってくれた。僕へのダメージはもうほぼ改善されている」

「けど！」

「今は他の皆の方が重傷だ。人手も足りないこの状況なんだ。比較的怪我の割合が低い僕が動いた方がいい、それに……辛いのは僕以外にもいる」

ティエリアはかつての自分を思い出す。強がっておこうとしていたが、とてももろかった頃の自分、それが今のなのはと重なっているからだ。

「……………」

フェイトもそれに気付いたのか何も言わない。

「…！エリオ、キャロ」

「テイ、テイエリアさん！」

「大丈夫なんですか」

ばったりと会ったエリオとキャロがそう聞く。

「少しばかり痛むが、問題はない。それより、スバルは……」

「いま、病室でティアナさんと話していると思います」

「そうか……エリオ、君の腕は大丈夫なのか？」

「はいなんとか」

あの後テイエリアは戦闘機人に関して、そしてスバルとギンガについて知った。彼にとってはそれは無視できないものだった。プロジエクトF以上に超兵計画に近いもの、自分に近いもの、そうして見ていく内に、聞いていく内に結論は出た。

（あの男、ジエイル・スカリエツティがこの事件の……いや、フェイトやスバル達の事件のすべての元凶）

静かに、そして自分のなすべきことを忘れぬよう、怒りの炎を胸に灯す。怒りは時に強大な力を生むが、同時に冷静さも失う。これまでの戦いの中で彼が学習したことだ。

（なら僕がすべきことは決まっている。……歪みを破壊する。ああ、そうさ、これまでと変わらない）

胸に秘めた思いを持ち、フェイトにこの場をませてテイエリアは歩く。進み、その先の未来を信じて

リボンスSide

「本気ですか!？」

リバイブの声が部屋に響く。

「本気さ」

「しかし、いいのですか?何もここまでしなくとも、我々の計画に支障はありませんし」

「確かに。けど、念には念を入れておきたい……彼らには最後まで信用してもらわないと。それに、ブリングが死んだことでこっちの駒も少ない。スカリエツティたちだけじゃだめだ」

リバイブの言うこともわかるけど、せつかく見付けたんだ。利用できる駒は多いに越したことはない。それに、

「今のテイエリアは、あれを使えば僕らが直接手を出さずとも間違はなく何もできずに無残にやられるだろうからね」

「ああ、確かに。あの人間かぶれの彼なら……」

そうさ。彼の今の状況をスカリエツティから聞けたのは運が良かった。まさかこの手がここまでうまくいきそうなものになるとは……

「それじゃ、僕は少し行ってくるよ」

白い部屋を出てくこれくを見上げる。

「もうすぐだ」

そう、もうすぐだ。この醜い世界も、僕の世界も、何もかも、すべてが終わる……

「……どうやらヒリングもうまくやっているようだね」

リボンズSideア

ヒリングSide

地上本部の地下最下層、ここを知っている物は管理局の中でもトップクラスの一部しか知らない。最高評議会の三人は本来なら数10年も前の人物。だが今や体を捨てて脳だけとなり管理局を裏から支配と言つていい形でその地位にとどまり、平和を守ってきた。だがそのためならいかなる手も問わない彼らはもはや犯罪者と同等と言ふべきところまで落ちていた。

そしてその場所に1人の女性の死体、いや、最高評議会の脳を合わせる3人の死体が無残に転がっている。

『お前は……』

「何者なんだとか、よくある言葉はやめてよ。つまんな過ぎて今にも殺しちゃいそうだから」

ヒリングは退屈しのぎにもならないこの任務にイライラしているのか、どこか不機嫌そうに言う

事は数分前。

この場所にいた評議会と、その者たちの生命活動をとりとめているポッドを管理している女性局員の前に現れ、有無を言わせずその局員を殺した。女性は何かしようとしていたが、全方位からのファングを防げず絶命した。

瞬間、局員の身体が歪んだと思ったら、そこには胸に？のマークがつき長い金髪の戦闘機人、ナンバーズの2番、ドゥーエの姿となる。彼女が死んだことにより、彼女のIS「ライアーズ・マスク偽りの仮面」効果が切れたからだ。

それを見てほっとしたようにヒリングに礼を言おうとしたところ、有無を言わず2つのポッドごと脳を粉碎した。

「私達の計画が気付かれたらいけないからね。それにあんた達ももう用済み」

『きさま、ジエイルのものか！？』

恐怖と共にその言葉が出る。

「ちがうわりボンスの方よ」

まちがわれてイラッとしたがヒリングは無視してそういった。

『なんだと！？、約束が違うではないか！我々をイノベーターにす

ると…』

「協力をすればイノベーターになるチャンスがあるかもしれないと言った、その代償として、あれを作る手伝いをあなた達にさせただけ、結局チャンスはなかった。どう、何ひとつ嘘は言ってないわよ」

一歩、また一歩と最高評議会の評議長の脳が入ったポッドへ近付く。

「まあ、どっちにしろあんたらは死ぬ運命だったってことは変わらないわ」

ヒリングは「自業自得よ」といってGNビームクロウを向ける。

「でも安心してなさい。あんたらが作り出したジェイルも、この世界の平和も、何も考えなくて済むから…永遠にねえ!!!」

最後の瞬間、評議長は理解した。彼らにかかわった時点で、終わっていたのだ。人ならざる者に協力したその時に……

ヒリングSide了

「さてどうするか」

崩壊した六課に戻り、なのはを探しながら先程のことを思い出す

数時間前、地上本部特別ルームにて。

ここは本来はデバイスだけでなく重要なデータの保管子でもあるのだが、六課が崩壊し、本局も壊滅的な状況のため、調整、修理に使える部屋はここだけだった

「だめですね」

「やはりだめか」

マリエルに言われてティエリアは少し落ち込む。

「デバイス自体のダメージは修理すれば動けますが、あくまで動けるだけで、全力は出せません。特にセラフイムの場合は魔力調整オーバーロードで、データがいくつか壊れている物もありますし……」

「どうにもならないか」

「はい。デバイスを初期化する以外、方法は現在のところはありません」

・
・
・

（まさか、そこまでやられているとは。しかし、トリアルシステムのデータが破損するとは……こちらのカードは切り札も含めてゼロ。どうする……）

そう考えながら歩いていると、なのはの姿が屋上に見えたのでそこへ向かった。

「なのは」

屋上で空を見上げているなのはにティエリアは声をかけた。

「あ、ティエリア」

生気のない声でなのはは返事をする。

「……君らしくもないな。僕の知っている君は、どんな時でも強い意志を持っている女性だと思っていたんだが」

「……………」

「ヴィヴィオのことか？」

ぴくりと、なのはの体が動く。

「今回のことは、君のせいじゃない。あまり自分を責めない方がいい」

「けど、だめなの、私…守るって約束したのに、絶対帰るって、約束したのに、側にいてあげられなかった…」

「ああ」

ただそれだけ言って黙る。

「ごめんティエリア、ちょっと後ろに向いててくれないかな」

「？あ、ああ……………」

後ろ向くと同時に背中に少し体重がかかる。

「なの……」

「じゅめん、ちょっとだけ、背中貸して……」

「……………わかった」

それだけで察し、ティエリアはただ黙る。すると小さく「ありがとう」となのは声を出した。そしてこれまで我慢していた。ものを涙と共に出し始める。

「守ってあげられなかった！…あの子、きつと…泣いてる！…」

「ああ。僕も同じだ。約束を守れなかった……」

ティエリアはなのはの話を聞きそう言ったあと「だが」と呟き。

「僕らはまだ、生きている。捕らえられたのなら、あの子もきつとだから、こんどこそ、必ず守ろう」

「ティエ、リ、ア……うん。そうだね……」

そこからさき、なのはの涙が収まるまでティエリアは背を向けたまま、その場にいた。

襲撃事件から4日が過ぎた。ともかく本部を必要することと、はやてはアースラという次元航行艦を用意した。

そしてそのアースラの内部のデバイスルームにはやてとティエリアはむかっていた。

「この船は本当にすごいな。プトレマイオスを思い出す」

「気に入ってくれて嬉しいよ」

はやては嬉しそうに言う。それはそうであろう。彼女にとってこの船は自分やなのは達の思い出のある船なのだから。

「しかし、すまないな。君まで付き合ってもらって」

「ええよ」

切っ掛けは2時間前。先に向かっていたマリエルとシャーリーから呼び出しがあり、はやてに頼んで本局に来る手続きをもらったのだ。

「それにしても、いったい何があったんやろ」

「わからないが、ともかく会えばわかるだろう」

そんな話をしている内に、その部屋に着いたので2人は中に入る。

「あ、はやて部隊長、ティエリアさん」

シャーリーが向かい入れる。

「シャーリー、どうしたんだ？」

「それが、セラフィムがどうしても話したいことがあると」

そうするとマリエルがヒビがついたセラフィムを持ってくる。

「どうした？」

「いえ、ただ、このままでは危険と思い、伝えることと、提案があつて」

「提案？」

セラフィムは「はい」と答える。

「結論から言えば、今のままではあなたは勝てません。ですから、ヴェーダにある資料をもとに、新たにゼロから再構築し、新デバイスの製作をしたいと思ひ」

「たしかに、今のままやったら、ティエリアは戦うこともできへん」
はやてが言うとセラフィムは続ける。

「ですから、そのためのデータとして、【ガ】シリーズのデータをもとに、新たな機体を構築したいと」

「……………」

「……ティエリア（さん）？」

何も言わないティエリアに3人は呼びかける。

「それで?」

「だから、どうかと」

「違う」

テイエリアは溜息をし、一呼吸した後、静かに言った。

「いつまでそんな慣れない言葉を使っつもりだ」

「???どうゆうことや?」

いきなりの発言にはやては…いや、その場にいるも全員が首をかしげる。

「何のことです?」

「とぼけるのもいい加減にしたらどうだ」

怒っているわけではないが声が少し大きくなり、それを呟く。

「リジエネ」

「!?!?」

この場でその名を知っているはやてとシャーリーは驚き、セラフィムを見る。

「それは、……………」

「どこから気付いたんだい？」

25、戦う決意と……再開？（後書き）

どうもです。でましたリジエネさんです。

詳しい話と新デバイスに関しては次回に

楽しみしてくれて呼んでくれれば自分は最高です。

ご意見ご感想を楽しんでいます。

それでは

26、近づく時間(前書き)

どうもです。

これで番外含めて30話超えました。

これからもよろです。

26、近づく時間

「どこから気付いたんだい？」

突然セラフィムから発せられる声が変わる。それはティエリアと同タイプのイノベイド、

「この部屋で君が最初に喋った瞬間にだ。というより、やはり君か、リジエネ」

そう、リジエネ・レジェッタの声だった。

「あ、あのーよくわからないんですけど」

マリエルは状況が理解できず混乱していた。

「ああすまない。マリエルは知らなかったな。簡単にだが、僕と彼のことを話そう」

そこからティエリアは話した。自分と言う存在のこと、自分がないをしてきたのか、簡潔に、ありのままに話した。

「そうだったんですか……納得しました」

「きみも、何も言わないんだな」

「言ったところでどうこうするの問題でもありませんし、何より、今のあなたとは関係ありませんし」

「感謝する」

テイエリアが素直に礼を言うと

「まったく、誰も彼もこの世界の人間は人がよすぎるね」

どこか馬鹿にするように今まで黙っていたリジエネが呟いた。その言動にはやて達はムツとしたが、話がややこしくなりそうなのでテイエリアが喋り出す。

「ところで、何の用だ？最近までは何もしてこず傍観していたんだらう？なのに君が、セラフイムを使ってこの世界と通信を行うとは」

「どづいうことですか？」

シャーリーが聞く。他の2人も同意見なのかその答えを待っている。

「セラフイムは、ヴェーダとリンクするためにための機体で、それはデバイスになった今でも使える。つまり、ヴェーダ側からリンクすることも可能だ。ヴェーダを使ってセラフイムと同調し、通信している。そうだろ？リジエネ」

「その通りだよテイエリア。とはいえ、君のヴェーダとのリンク率が80%を超えてなければ、難しかったけどね」

テイエリアとリジエネの会話を聞きながら3人は思った。

() () (空気がめちゃくちゃ重い……) ()

それもそのはず、この2人はともにヴェーダの一部となったとはい

え、仲がいいというわけではない。だが決して悪いとも言えない。ならばなぜこんな会話になるかと聞かれれば、ただ一つ。性格がまるで違うからだ。

「それで、わざわざこんな手の込んだことをしてまで伝えたいこととはなんだ？」

そう言うと

「気付いているんだろ？君と僕はつながっている。リンク率が70を超えた時点で、君がこの世界で何をしてきたかの記憶も、^{なか}ぼくの脳にある」

「プライバシーもなんもないな」

リジエネに好意を持ってないのか、はやては少し怒ったように言うが、リジエネは無視して話を続ける。

「まず、君のその体は、ナノマシンが正常稼働していないから、老いるし、傷つけば前のようにには簡単に治らないし、前は致命傷じゃなかった傷も致命傷になる」

「……………」

否定できないことを言われてティエリアは黙り込む。

「一応言っておくけど、リボンスは君よりも強い。潜在能力的にも、イノベイドとしても…いや、彼は本当にイノベーターなのかもしれない」

「遠まわしに言わず、早く言ったらどうだ？」

「ともかく、今の君じゃ勝てない。機体性能でも段違いだからね。だから、このデータを渡して、それをもとに作り変えればいい。どいうのにするかは君にゆだねるよ」

「それだけか？」

テイエリアは別にリジエネを信用していないというわけではない。だが、わざわざこのように話さなくても、データを送るだけにすればいいはず。なのにこんなことを言うのが、どうも分からなかったのだ。

「……忠告さ」

「君に忠告されるようなことなどない」

即座に言い放たれた。しかしそんなものお構いなくリジエネは続ける。

「君はあの人口生命体クラウンに……」

「ヴィヴィオだ」

テイエリアは怒りを冷却し続けながら話しているが、はやて達はもう限界まで来ている。

「そこまで愛着を持つてるなんて、予想外だよ。けど、わかっていると思うけど、君はいろんな意味で親にはなれない。君は罪があるから。そして…君はイノベイドだから」

「ええかげんにせえやー!!」

ついに限界がきてはやては机にダンと大きな音を立てる。

「さつきから黙って聞いておいたら、否定ばかりし……」

「事実を述べてるだけだよ。八神はやて」

はやての言い分をすべて聞く前に事実を突き付ける。それでも何か言おうとしたがティエリアの手が前に出て止める

「はやて、いい。それとありがとう。……リジエネ、君の言うことはもつともだが、僕はあの子の親になると決断した。今度こそ守るとも」

決意を決めたティエリアの瞳はなににも揺るがないものがあった。

「そうかい。なら、もうひとつ。君は本来ならもうリンク率は100%に達しているんだ」

「「「!?!?!」」」

「どづいことだ?」

「さあ、なんでだろうね」

明らかに知っている口調だが教える気は全くないというのはよくわかる。

「はあ、いいだろう。それで、何が言いたい?」

「これはほぼ確定だけど、君のリンクが100%に達したとき、こ

の世界から離れることになるだろうね。そしてもう2度と戻ってこれない」

冷たい現実が告げられこの場にいる皆が、特にはやてが一番反応していた。

「……どうにも、ならないか？」

「どうにもならない。君のその体に意識端末を入れるすべがないんだ」

「そうか……」

ふっ、とティエリアは苦笑いに近い笑みを浮かべていた。

「そういうことか……」

「なにがだい？」

「君がわざわざそれを言った本当の理由がわかったよ」

「そうかい。それは帰って来てから教えてもらおうよ……………通
信、きれました主」

先程までのリジエネの声ではなく、もとのセラフィムの声に戻った。

リジエネSide

ヴェーダの中に戻ったリジエネは少々ご機嫌斜めだった。

（次元を超えての通信。やはり無理があったのかな）

そう言いながらヴェーダのデータ点検をしていた。別次元に通信という手段はヴェーダの演算システムでも随分と無茶があった。現にいくつかのデータが破損しかけたくらいなのだから。

（これで、リボンを倒した後早く戻る気になってほしかったんだけど、やっぱり無理そうだな。ぎりぎりまで粘ろう）

何を隠そう、ティエリアのリンク率を押さえているのはリジエネだった。彼もこのまま帰ったらいろんな意味でまずいということはわかっていいるからだ。

（あれ、そういえば、リボンを倒せるって……僕はティエリアを信じているということか）

それは珍しく彼にとっては根拠のないものだったので自分で驚いていた。

（僕も彼が原因で変わったということかな）

そうして自分自身を少し笑う。

（ティエリア、君が帰るのを待っているよ……）

その声は誰に聞こえるわけでもなく、データの彼方へと消えて行った

リジエネSide 了

「これが、【ガ】シリーズを元にした機体データか…シャーリー、マリエル、製作にどれほどかかるんだ？」

「だいたい、1週間、速くて3日〜4日ですけど」

「複雑な物もありますし、どうなるか」

皆焦りを見せている。テイエリアがヴェーダと100%にリンクすれば自動的に元の世界に戻り、こちらに戻る可能性はほぼ0となる。しかも、それがいつなってもおかしくない。

「セラフイム、現在のリンク率はどうだ」

「81.5%、なおも少しずつ上昇中。計算では、4日以内には完了します」

ぎりぎりの時間だった。いや、そもそも戦えるかどうかもわからない。

「……時間がないな…シャーリー、マリエル、僕もできることを手伝う。なんとか製作してくれ」

「「はい」」

「それと……はやく？」

「え？な、なに？」

ポーっとしていたのか、はやくはいきなり声をかけられ、驚い

てしまう。

「大丈夫か？最近まで色々なことがあり過ぎて疲れているんじゃないか？」

「う、ううん。大丈夫や」

はやては苦笑いで否定する。ティエリアは知らないことだが、はやてにとってティエリアは特別な存在である。だが彼女は幸いにも、いや、不幸にもこういうことには強かった。強くなっていた。

「ならいいんだが…それより、さっきジエネが言っていたことは、他の皆には内緒にしてくれないか。もちろんシャーリーとマリエルも秘密にしておいてくれ」

「え？」

ティエリアは決戦に向けて皆に余計な雑念を生まないようにするためそう頼んだ。普通なら…いや、ティエリアが考える部隊としての普通ならOKをだすだろう。だが

「それは…だめや、許可できん」

「！なぜだ！？君も部隊長という立場ならわかるはずだ。皆に余計な心配をかけないようにするのは…」

「タブーやっということはわかる。けど、何も言わんまま去ろうとするのは認められへん」

はやてがこういうのにも理由があった。彼女は過去に自分の家族の

1人、初代リインフォースとの別れがあった。たったひとり、はやてに伝えないまま去ろうとした大切な家族を…

「どんなにタブーなことでも、それだけはできん!!」

「なぜだ!!」

「きまつとるやろ」

だから、彼女は答えた。あの時と同じ、

「仲間やから、家族やから、大切な人がいなくなるのは、いややから」

「!、かぞ、く?」

こくりとはやては頷く。

「そうや。こんなに一緒におったんやから、もうティエリアも家族や」

「……………」

予想外、あまりにも予想外の言葉にティエリアは呆然としていた。

(ずっと、わからなかった…あの子の親になっても、家族がどういうものか…)

生まれたときからイノベイドとして生きてきた彼には理解のできないことだ、知りようのないことだと思っていた。

「（そうか、そういうことか………これが、）家族……」

無意識に、だがはやてには聞こえるくらいの小さな声で呟いた。

「そうや、確かにどっちにしろ結果は変わらんけど、想いは、結末は、変わってくる……」

「………はやて、すまなかった」

「ええよ、べつに」

にっこりとした顔ではやては微笑んでいた。

「このことは僕から話す。僕なりのケジメだ」

それはこの世界で彼がしてきたことに対して、それはこの世界で彼が共に戦った戦友として、そして、初めて手に入れた、唯一確かな答えを否定しないために……

はやてSide

（それにしても、私、どさくさに紛れて凄いこと言った、言っってしまったああああああ）

【仲間やから、家族やから、大切な人がいなくなるのは、いややか
ら】

【大切な人が…】

（うわ、はずかしい！！でも、これでティエリアが…す、すきって言ってくれたら…）

と思い出しから徐々に妄想していつていると

「はやて、本当に大丈夫か？」

「へ、あいや、その、あはははははは」

笑ってごまかしているが、ティエリアは別に気にしていない。

「そうか…おっと、そうだった。大切ことを言い忘れていた」

「え？（こ、これはもしや！！）」

とまた妄想しそうな勢いを自分で抑えてその言葉を聞く。が、

「さっき、家族と呼んでくれて嬉しかった。ありがとう」

「あ、ああ、うん。どうたしまして」

期待は外れた。

(うっやっぱ、気付いとらん…)

(はぁ、これを見ると部隊長だけじゃなく、なのはさん達も、前途多難ですね)

シャーリーはこの状況を少し面白く見つめていた。

心の中で想い続けていることは伝わらず、時は近付く。最終決戦の時が…

26、近づく時間（後書き）

リジエネは河ゆんさんの単行本を見たら、結構テイエリアを心配している場面とかも見えましたので、自分が考えた結果こういう感じになりました。

さて、次回からいよいよ「ゆりかご」編です！！

27、いにしえの翼（前書き）

どうもです。二か月以上も更新できなくてすみません

自分はとりあえず震災は大丈夫でした。

中学時代の親友で震災地いた人がいました。生きてはいますがそこに残るそうです。「自分の第二の故郷だからと」

今も不安です。正直震災後は震災地、またはその付近の県にいる親友の安否を気にし、書こうにも書けませんでした。

言い訳がましかったですね、すいません。

でも、本日ようやく全ての親友の無事が確認できました。

まだまだ原発などの不安もありますが、くよくよしてもどうにもなりません。前を向いて歩みます。

長々と失礼いたしましたそれでは、始まりです

27、いにしえの翼

「それじゃ、ここから先は各々で別行動するということでもいいね」

スカリエッティの研究施設でリボンスはそう告げる。

「ああ、かまわないさ。君達の知識と技術のおかげで、私の研究は多いに捗った。聖王も新たな力を加えることもできた。感謝してもきれないよ」

「それを言うなら、君もあれを作る手伝いをしてくれた。最高評議会のゴミどもだけじゃ、こうはいかなかっただろう」

互いが感謝し、褒めあう状況だがこの場は黒い渦に満ち溢れていた。

「まあ、さっきも言ったように、ここら先の僕の計画に邪魔を入れないでくれよ」

「私も死にたくはないのでね。気を付けるし、あれの最終調整が済むまでには終わらせるよ」

「そうかい。なら、僕らは本局の用済みとなったあの男を消してあげるよ。それが最後の協力だ」

そう言ってリボンスはその場を去る。

(さて、せいぜいがんばってくれ、スカリエッティ)

リボンスにとってスカリエッティが勝とうが負けようが関係なかつ

た。それで自分の計画が失敗すのがあり得ないからだ。むしろ負けでも絶対に失敗しない確信すらある。

（さあ、終わりにしようすべて……………）

リボンスは今、歪みから闇へと変わろうとしていた……………

次元航行艦アースラ（現六課本部）にて

襲撃事件から1週間が過ぎた。まだ傷が癒えていない者もいるが、それでも戦う戦力は充分あった。

（新デバイス完成まで後少し。間に合えばいいが……………）

「あ、ティエリア」

考えながら歩いていると、フェイトとばったりと出会った。

「フェイトか……………どうした？」

「うん、ちょっとね。別になんでもないよ」

どこか弱弱しげに答える。ティエリアの置かれている立場を話した後、六課のメンバーは皆驚いていた者、悲しげな者の二組に分かれ、フェイトは後者の方だった。ティエリアは「元から遅かれ早かれこうなるはずだったんだ」と励まし、この戦いが終わるまでは死んでも帰らないと言うとなのは、はやて、フェイト以外は頷き、この3人はやはり寂しげだが最終的に納得はしていた。

「（どうやら、僕のことだけではなさそうだが）なんでもない顔には見えないんだが」

「……………」

「戦闘機人と戦ったそうだが、何か言われたのか？」

「……」

ビクッ、と体が反応する。それだけで相手に真実を告げたような物だ

「凶星か。…何を言われたかあえて聞かないが、1つだけ言わせてくれ。君は、君が信じた道を進んでくれ」

「私の道？」

そうだと言ってティエリアは続ける。

「誰かが言った言葉や、誰かの思いではなく、ただ自分が信じた行いをすればいい。それが正しいかどうかは君を信じる者たちが決めることだ。もちろん僕も信じている」

「……………ありがとう」

フェイトは小さい声ではあるがしっかりと聞こえるようにその言葉を告げた。

フェイトと別れ、デバイスルームに入るとまず目に入ったのは寝ているリインだった。

「リイン曹長、朝まで寝ずにティエリアさんのデバイス調整をしてくれてたんですよ」

シャーリーが横から来てそう告げた

「シャーリー……そうか、ありがとうリイン」

「……きです、アーデさん」

(起きている時に言えたらよかつたんですけどね、どっちも)

ティエリアはリインに感謝し、ポッドに入ったセラヴィーとセラフイムに話しかける。

「どうだ、状況は？」

「現在、我々のメモリー、ツインカートリッジシステムのデータ以外を初期化し、新たなデータを入れてそれを元にバリアジャケットを構築中。完了までは……あと29%」

「皆様のおかげで予想以上に早く進んでいます、マイスター」

それはティエリア達にとって絶望の中に芽生えた希望の光の吉報であつた。

「これなら、戦える」

気持ちを高め、戦闘準備が整いつつあったが、敵はそんな状況を待たない。緊急アラートが管内に響き渡った

「うごいたか」

アインヘリアル1号機付近にて

「ひゅー、これ見て面白いわ。なーにが地上世界の希望だかなるガラクタじゃん」

破壊されていく兵器を見ながらヒリングは呟く。

「しかたないですよ。ほとんどの製作業は僕達のおれに使ったんですから。しかし、援護はしなくてもいいのですか？リボンス」

リバイブは通信を開きリボンスと連絡をとる

『いいさ。彼らの計画にはもう僕らが多少動いても変わらない。それより、この男達を始末してくれ、もう用済みだ。生きていても邪魔になる』

映し出されたのはレジアス中将とゼストだった。

『それと、けして管理局には気付かれないように動いてくれ』

「了解」

ヒリングはウインクをして地上本部に向かおうとした時だった。

「…この、地響きは……」

「どつやら出てくるようですね…ゆりかご、スカリエツティの切り札が。我々も行きましよう、管理局に気付かれぬよう、遠回りをお願いしますよ」

ガオツズモードになり、2人はその場を離れた

アースラブリッジ

アインヘリアルや地上兵器、さらには魔導師たち複数の部隊があったという間に殲滅される映像をティエリアは見ていた

「一週間も動かなかっただけはある……動きが前より繊細だ。おそらく何らかの手を施したんだろうな」

ティエリアはなぜこれほど期間の間何もしてこなかったのかはわからなかったがその謎も今日の前に起きている出来事を見れば納得がいった。

それだけではない

「…！あれは、ギンガか」

胸元に??と描かれたプレートが付いたナンバーズの服装をしたギンガだった。だが表情はまるでなく、機械的でもある。

「（スカリエッツィの仕業だろうな）急がなければ大変なことにな……?」

そこでテイエリアはある違和感に気付いた

「シャーリー、イノベイド達の姿は？」

「え……!?! 映像も、反応にもなしです」

その言葉にブリッジにいる全員が違和感を感じた。『なぜいないのかと』

だがそんな疑問すらも一瞬にして吹っ飛ばすような映像が流れる

報告にあった少女の召喚師の召喚獣による振動で大地が揺れているのがモニターをみてわかる。そして

「あれは……」

少しずつ、地盤が浮いてきているのだ。そしてそこから現れたのは巨大な艦。プロトレマイオスや連邦艦を見たことあるテイエリアだが、目の前に映し出されたこの艦はそのどれとも違うもの、恐怖感がでた。

『見えるかい!?!これが、君達が気にしながらも求めた絶対なる力さ!……そして』

映し出されたのは玉座のような椅子に苦しそうな顔をした少女。ヴィオの姿であった。

『今まさに、力を得て、待ち望んだ主をのせ、古代の力と英知の結晶は今その力を発揮する！！！！』

『痛いよー！！！！！！ママー！！！！パパー！！！！』

「……………」

ジツと、その怒りを必死に冷却する。怒りは力となるが思考を弱める。だから留め、それを一気に爆散させるために

『さあ、ここから私の夢の始まりだ！！！！』

そして高笑いを、まるで純粹な子供のように無限アンリミテッド・デザイアの欲望はあげるとそれに呼応するように大いなる聖者の舟はゆっくりと、着実に浮遊していく。

「……………夢だと、ふざけたことを」

怒りを抑えきれず静かに呟く。

目線であいてを殺すというものがある。今のティエリアにはぴったり以上の言葉。そのくらい冷却が追いつかないくらいキレていた

「せやけど、まだ完成し取らん状態で出ても足手まといなるだけ、ここは、私達に任せて。ティエリアはゆっくりお茶でものんで、終わるのを待つとたええよ」

「……………ふっ、そうだな。なら、君達と共に出られないのは残念だが、

僕は僕の今できることとやることをしっかりと後にも、ゆつくりと飲ませてもらうぞ」

はやてはそんなティエリアを見て落ち着かせるための冗談を入れた言葉を言ったが、返したところを見て、ほっとしたのだった。

「あつ、そうや！みんなにこれ、渡さんとな」

はやては思い出したようにそれを出している

「！完成したのか？……しかし、いいのか？正直これは……」

「危険を冒してでも守る時がいまや。それに、使いどころがわからんようなやわな子は、六課の戦力には1人もおらん」

「はやて……分かった」

ティエリアは納得してそれをもう一度見つめる。ルビーのように染まった紅く、そして側面には「T」と描かれた薬莢を

27、いにしえの翼（後書き）

さあ、最後に出た「T」と描かれた薬莖「カートリッジとは!？」

ちなみに、次回はまだテイエリアは戦いません。戦うとしても最後の方かな

まあ、あくまで予定だけど…それでは、感想よろしくです。また次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1247m/>

魔法少女とイノベイド～対話の前の話

2011年3月31日07時04分発行